殺したことも信じて居た。尤も警察は間誤附きはしたものゝ、全々瞞着されはしなかつた。例へば、キリロフの遺書のなかに漠然と挿入されてゐる『公園』といふ言葉は、ビヨートル・ステパノウキツチが期待した程其筋の人を迷はせはしなかつた。警察は直ぐ様スクウオレシニキへ駈けつけた。それは單にこの界隈で唯一の公園であつたからといふ理由のみでなく、或る一種の本能に依つて導かれたのである何故と言ふに、數日來この町で起つた様々な戰慄すべき出來事は、直接間接スクウオレシニキと關係してゐたからである。これが少くとも私の理論である。(序でに斷つて置くが、ウアルウア・ペトロウナはその朝早くステパン・トロフヱモウキッチを取押へに出向いたので、町で起つた事件に就いては何一つ知るところがなかつたのだ。)

死體はその日の夕方池の中から發見された。この發見の手掛りとなつたものは、下手人共が、犯罪の場所へうつかり見落して置いたシャートフの帽子であつた。死體の容子と云ひ、檢屍の結果と云ひ、二三の推論の示すところと云ひ、何うしてもキリロフには共犯があつたに違ひないといふ疑念が直ぐに生じた。續いてシャートフやキリロフの加名して居る、例の檄文に關係のある秘密結社も、實際に存在して居るといふことが明かになつた。併しその共犯者といふのは一體何者だらう? 五人組の仲間のことなぞ其日は未だ夢にも考へるものがなかつた。唯だキリロフが隱者のやうに、まるつ切り世の中と掛け離れた生活をしてゐたので、遺書にも述べてある通り、フェーヂカがあれ程手を盡して搜索されて居る時ですら、幾日も彼と一緒に起臥してゐながら、一向知れずにゐたのも尤もだと點頭かれた。何よりも

一同を惱ましたのは、この混沌たる事件のなかゝら、何一つ脉絡を明かにするやうな事實を發見することが出來ないといふことであつた。

若しもその翌日突然リヤムジンのお蔭で、一切の謎が氷解しなかつたなれば、恐慌を感じた町の人々が、何んな結論と、何んな突然な理論に到着したか到底想像もつかなかつたに相違ない。

リヤムジンは到頭挫折して了つた。彼はビヨートル・ステパノウキツチですら終ひ際には不安を抱き始めた通りの行動を取つたのである。トルカ!チエンコに代つて、エルケルの監視を受ける身となつた彼は、次の日一日中壁の方へ頭を向けたまゝ床のなかに臥つてゐた。見受けたところ至極穩和しく、一言も口を利かず、話し掛けられても碌々返事さへしなかつた。かういふ譯で、彼は市中に起つたことを終日少しも知らないで過したのである。ところが一切の出來事をすつかり嗅ぎつけたトルカーチエンコは、夕方になると、ビヨートル・ステパノウツチから仰せつかつたリヤムジン監視の役目を打つ棄らかして、この町を去らうといふ考へを起した。つまり、平たく言へば逃げ出したのである。事實彼等はエルケルが先に豫言したやうに、皆んな血迷つて了つたのである。序に言つて置くが、ソブーチンも矢つ張りその日の十二時前に姿を隱した。けれども彼の逃亡のことは何うしたものか、次の日の夕方まで官憲に知れずにゐた。警官が出掛けて行つて家族の者を訊問した時になつて漸つと、主人の家出に狼狽してゐながら、結果を恐れて今迄固く沈默を守つてゐたことが分つたのである。併し先づリヤムジンのことを述べやう。彼は一人切りになる否や(エルケルはトルカーチエンコを當てにして一足先に家に歸

つたので）家を飛び出して了つた。そして勿論直に事件の成行を知つたのである。彼は家へも寄らないで、その儘何處へ行くといふ宛もなく一生懸命に逃げ出した。けれども眞暗な夜ではあるし、而も逃亡するといふことは困難でもあれば恐ろしくもあつたので、二つか三つ程通りを拔けると、すぐ〳〵我が家へ引返して、夜つぴて部屋のなかに閉じ籠つてゐた。想ふに彼は明け近く自殺を企てたが、成功しなかつたものに違ひない。彼は正午までその儘閉じ籠つてゐた――それから突然警察へ駈け出したのである。噂に依れば、彼は膝を突いて床の上を這つたり、泣いたり喚いたり・床に接吻したりしながら、自分は前に立つてゐる役人達の長靴を接吻する價値もない人間だと叫んだとのことである。人々は彼を宥め賺して、色々と優しく劬つて遣つた。訊問は何んでも三時間ばかり續いたとのことだ。彼は何も彼にもすつかり白狀した。先方の訊問を見越して、知つて居ることは一から十まで細大洩さず、底の底まで打ち明けた。そして一刻も早く胸の重荷を一据しようと焦慮つて、訊かれもしない先から要らないこまとで喋り立てた。彼は隨分色んなことを知つて居ると見えて、可成巧みに事實の眞相を傳へた。シヤートフとキリロフの悲劇や、放火のことや、レビヤドキン兄妹の慘殺のことや、その外のことなぞは第二義的の位置に追遣られて了つて、ピョートル・ステパノウキッチ・秘密結社、革命運動の組織、五人組の網目なぞが第一義的なものとなつて現はれた。一體何んの爲めにあんな多くの人殺しや、醜惡卑劣な暴行を敢てしたのかと訊かれると、彼はせか〳〵とした病的な調子でかう答へた。――『それは組織的に社會の基礎を顚覆する目的を以つてしたのです。社會組織並びに社會的原則を、組織的に破壞する目的を

以てたのです。人心を惑亂して一切を混亂狀態に陷入れる目的を以つてしたのです。かうして根抵をぐらつかされた社會が、病的になり秩序を失つて、犬儒的な、そしてまた懷疑的な調子を帶びながら、全體の人心は自己防衛の念と、何等か自己を支導する理想に對する渴仰の念が、熱烈に漲り渡つた際に乘じて、突如として叛旗を飜し、一擧にして全社會を我が掌中に收めやうといふ目的を以つてしたのです。この際賴みとなるものは、完備した五人組の網の目です。彼等はその間に絶えず行動して同志を增やしながら、悉て乘じ得る隙のある社會の弱點病所を探究してゐるのです。』結論として彼はかう言つた――この町に於いてピョートル・ステパノウキッチは、唯ださうい組織的な攪亂のほんの最初の試みを行つたに過ぎないので、謂はゞ、これが今後總ゆる五人組の取る可き行動のプログラムとなるものである――併しこれは彼一個の（即ちリヤムジンの）考へであり、彼自身の理論であつた。ですから何うかそのことを御記憶願ひます。そして私が何れ位い明らさまに正直なところを自白したかをお含み置き下さい……かういう譯ですから、今後とても御役に立つことゝ存じます。』正確に言つて五人組は何の位いあるかと云ふ問ひに對して、彼はその數は實に莫大なもので、露西亞全國はかうした網の目で蔽はれて居ると答へた。彼は何等證據を提出しなかつたけれども、その答へは徹頭徹尾眞面目なものであつたと、私は信じてゐる。彼の提出したものは單に外國で印刷した結果のプログラムと、ピョートル・ステパノウキッチ自身の手で、荒筋だけを書きつけられた、今後の行動を組織立てる計畫書だけであつた。これに據つて見ると、リヤムジンが述べた『社會の基礎を顚覆する』云々の言葉は、悉く自分自身の理論で

あると申立てはしたものゝ、實は一字一句、句讀一つ拔かさないでその儘この書類から引用したものであることが分つた。ユーリヤ・ミハイロウナのことになると、彼は恐ろしく瓢輕な調子で、訊かれもしない先から『あの人に罪はないのです、いゝやうに馬鹿にされたのです。』と述べた。併し不思議なことに、彼はニコライ・スタウロギンのことになると、全々この秘密結社に關係がない、ピョートル・ステパノウキッチとも何等協約を結んでゐないと極力辯護した。(ピョートル・ステパノウキッチがスタウロギンに對して抱いゐた滑稽極る秘密の希望に就いては、リヤムジンは何一つ知らなかつたのである。)彼の言葉に依ると、ニコライ・スタウロギンはレビヤドキン兄妹の死に就いては何等與り知るところがなく、ピョートル・ステパノウキッチ一人が企らんだことで、相手を犯罪のなかに捲き込んで、自分の自由にしやうといふ陰險な目的だつたのである。併しピョートル・ステパノウキッチが淺墓な了簡から期待してゐた感謝の代りに、彼は唯だ『ニコライ・フシウオロドウキッチの高潔な心』のうちに、憤怒と絶望の情を呼び醒したに過ぎなかつた。彼は今度もまた訊かれもしないのに恐ろしく急き込んで、巧みに話を持ち掛けながら次のやうなことを仄めかさうとした。——スタウロギンは恐らく重要な任務を帶びた人であるが、それには何やら秘密が含れてゐて、この町でも謂はゞ微行の形で在住して居たので、何か任務を帶びてゐるのである。彼 屹度まだペテルスブルグからこの町へ歸つて來るに違ひない(リヤムジンはスタウロギンが今ペテルスブルグへ行つて居るものと信て居た)、が併し今度は身分も境遇もすつかり違つて、この町でも直ぐに噂に上るやうな立派な人を澤山伴に連れて來るだらう。かういふ話

は皆『ニコライ・フシウオロドウキッチの祕密の敵』たるピョートル・ステパノウキッチから聞いたのであつた。

こゝで私は一言つけ加へて置くが、二ケ月經つてからリヤムジンの白狀したところに依ると、彼がわざ〳〵スタウロギンを辯護したのは、先方に保護して貰ひたかつたが爲めである。つまり宣告の際にも刑二等位い減じるやうに計つて呉れ、西伯利亞へ行くにしても、金錢や紹介狀を惠んで呉れるだらうと、それを當てにしてゐたからである。この自白を見ても、彼がスタウロギンの勢力に就いて、並外れて誇大な考へを抱いて居たことは明かである。

勿論警察は同じ日に直ぐヴイルギンスキーを逮捕した。而も勢ひに任せて家族も一人殘らず拘引したのである。(併しアリーナ・プロホロウナも、その姉も、叔母も、加之例の女學生までも、最う疾くに釋放された。噂に依ればシガロフも、刑法の何の條文にも當て嵌らない爲めに、間もなく放免されるだらうといふとだ。尤もこれは今のところ噂だけである。)ヴイルギンスキーは直ぐ樣自分の犯罪を承認して了つた。逮捕される時、發熱して病床に寢てゐた。彼は殆んど救はれたやうな顏をして、『あゝこれで漸つと胸の重荷が下りた。』と言つたとのことである。噂さに依れば、彼は何も彼も明らさまに申立てをして居るが、一種の威嚴を持して、自分の『光明ある希望』を一つとして捨てやうとしない。それと同時に『情實に絡まれた環境の渦卷の爲めに』うか〳〵と輕卒にも自分が捲き込まれて入つた政治的手段(社會主義的手段とは正反對な)を、心から咀つて居るといふことである。暗殺の際に於ける彼の行動は、

幾分彼の爲めに有利なものとなつた。それ故彼も矢つ張り或る程度まで宣告輕減を期待することが出來る譯である。少くとも町の人はさういふ風に斷言して居るのだ。

併しエルケルの場合に到つては、輕減の重みがあるか何うかは頗る疑はしい。彼は逮捕されて以來は飽くまでも頑固　沈默を守つて、稀に口を開けば出來るだけ事實を曲げやうとした。懺悔の言葉なぞは一言も、今迄のところでは彼の口から出て居ない。それにも拘らず彼は最も嚴酷な裁判官にさへ、彼の年少であることや、境遇の賴りないことや、政治的煽動者の狂信的犧牲に過ぎないといふ爭ひ難き證蹟や、就中、自分の僅かな俸給の殆んど半ばを裂いて母親に仕送つて居たといふ、彼の母親に對する孝養は、一種の同情の念を呼び起した。その母親は現にこの町に住んでゐる。彼女は弱い病身な婦人で、身の割りに老ひ込んでゐる。彼女は泣きながら自分の息子の命乞ひに、實際地面に身を投げ出してゐるのである。何うなるにもせよ、多くの町の人はエルケルに同情を寄せてゐる。

リプーチンはペテルスブルグで捕縛された。彼は其處に二週間も滯在して居たのである。彼は殆んど信じ難い、そして說明するのも難しい位い奇妙な行爲を遣つて居たのだ。人の話に依ると、彼は他人名義の旅行券を持つてゐるうへに、可成經つた金も身に附けて居たので、外國に出奔する總ゆる便宜を有つて居たに拘らず、何處にも行かないで、何時までもペテルスブルクでまご〳〵してゐたのである。彼は暫くの間スタウロギンとピョートル・ステパノウキッチを探してゐたが、突然飲酒に耽り出した。そして總ゆる理性と、自分の境遇に對する理解を失つた人間のやうに、放埒極まる耽溺に身を持ち崩した

のである。彼はペテルスブルグのある娼家で酒を飲んで居るところを捕縛された。噂に依れば、彼は少しも意氣沮喪することなく、審問の際にも兎角虛僞の口供をして、來るべき公判にも希望に充ちながら(一)、謂はゞ堂々と乘り出さうと意氣込んで居るところである。彼は公判廷で一喋りする積りでゐるのだ。トルカーチエンコは逃亡後十日ばかり經つて、何處か郡部の方で逮捕されたが、その振舞は前者とは比較にならぬ程愼重で、胡魔化しもしなければ嘘も吐かず、知つて居る限りのことを遂一白狀して敢て辯解かましいことも言はないで、從順しく罪に服してはゐるものゝ、それでも矢つ張り駄辯を弄したがる傾向がある。彼は躊らうことなく自分の知つて居ることを述べるが、談一度農民間に於ける革命的(?)要素に關する知識に及ぶや、彼は急に容態振つて、聽衆を感嘆させやうと焦慮るのであつた。聞くところに依ると、彼も亦公判廷で一喋りする積りだとのことである。彼もリープチンも餘り恐れて居る樣子がないのは聊か不思議な感じがする。

繰り返して言ふが、この事件は未だ片附かないでゐる。三ケ月も經つた今日では、この町の社交界も休息の餘裕を得て、漸次順調に復し、動搖も鎭つて來たので、穩當な意見も生じるやうになつた。併し甚しきに至つては　ピョートル・ステパノウキッチを一種の天才、否少くとも『天才の風貌』を有する人物と考へるものさへ出て來た。「あの組織は何うです！」と、指を上の方へ向けながら、倶樂部でその連中は言ふのであつた。併しそんなことを口にするのは少數の、極く無邪氣な連中だけであつた。是に反して、多數のものは彼の敏腕を否定しないが、現實生活に對する極端な無知、恐ろしい抽象癖、馬鹿

らしい程奇怪至極な偏執の結果、思ひ切つて淺薄になつたことを指摘した。彼の精神的方面では誰の考へも一致してゐる。それに就いては何等異說がないのである。

偖而、萬遺漏なきを期する爲めに、これから一體誰のことを述べたらいゝのか私には分らない。マヴリーリーキイ・ニコラエウキッチは永久にこの町を去つて了つた。併し何處へ行つたのか私は知らない。ドロズドフ老夫人はすつかり耄碌して了つた……ところで未だ極めて陰慘な出來事が語り殘されてゐる私は單に赤裸々な事實を記述するに止めて置かう。

ウスチエヴオから歸つて來ると、ウアルウアラ・ペトロウナは町の方の邸へ落着いた、留守の間に積りに積つたさま〳〵な報知は一時に彼女を襲ふて、怖ろしい打擊を與へた。彼女は一人で居間に閉じ籠つて了つた。それは最う夜のことだつたので、人々は疲れて早くから寢に就いてゐた。

翌朝小間使がさも秘密らしい容子をしながら、ダーリヤ・パヴロウナに一通の手紙を渡した。その女の言葉に依れば、この手紙は最う前の晩遲く屆いて居たのだが、その時は皆んな休んでゐたので、彼女は遠慮して起さなかつたとのことである。それは郵便で來たのでなく、一人の見知らぬ男がスクウオレシニキに居るアレキセイ・エゴリッチに手渡したので、アレキセイ・エゴリッチは直ぐ樣自分で遣つて來て、直々それを小間使の手に渡すと、その儘スクオレシニキへ歸つて行つたと言ふのである。

ダーリヤ・パウロウナは胸をときめかせながら、長い間凝然とその手紙を見詰めてゐるばかりで、敢て開かうとはしなかつた。彼女はそれが誰から來たのかよく承知して居た。文字は確かにニコライ・ス

タウロギンの手であつた。彼女は封筒の宛名書きを讀んだ。『秘密にダーリヤ・パヴロウナに御渡し下されれ度、アレキセイ・エゴリッチ殿へ。』

こゝに再錄した手紙は、歐羅巴風の教育を受けながら、露西亞の文體特有な誤謬を、毫末も訂正することなく、一字一句も違はずそつくりその儘記載したものである。

愛するダーリヤ・パヴロウナ――貴方は嘗て私の看護婦になりたいといふ希望を洩した。そして私が貴方を必要とする時には、貴方を迎へに寄越すといふ私の言質を取つたことがある。私は兩二日中には當地を出發して、兩度歸來することはないだらう。私と一緒に行きませんか？

昨年私はヘルツエンと同じやうに、瑞西ウリイ州の市民に歸化して置いた。併しこのことは何人も知らない。其處には最う小ない家を買つて置いた。私には未だ一萬二千ルーブルの金が殘つてゐる。私達は一緒に出掛けて、永久に其處で暮さうではないか。私は決して最う何處へも出掛けたくないのだ。

『それは狹い、溪谷で、山々が視望と思想を阻んでゐる極めて單調な場所だ。極めて憂鬱なところだ。私が其處を擇んだのは、唯だ小さな家が賣物に出たからなのだ。若し貴方の氣に入らなければ、私はそれを賣つて、何處か別な場所に別な家を買つてもいゝ。

『私の健康は勝れない。併し幻覺は向ふの空氣で癒ることゝ思つて居る。それは生理的方面のことだが精神的方面のことは貴方もすつかり知つて居る筈だ。けれども果して悉く知つてゐるか知ら？』

『私は貴方に白分の生涯の大部分を話して聞かせた。併し全部ではない。貴方にさへも全部は話さなかつたのだ！　序でながら、私は自分の妻の死に就いては良心上の責任を感じてゐるといふことを、此處に繰り返して置く。その後私は貴方に會はないから、それで一寸繰り返して置くのだ。私はリザベタ・ニコラエウナに對しても矢つ張り罪を犯して居るやうな氣がする。併しこのことは貴方自身よく御承知のことゝ思ふ。貴方は殆んどすつかり豫言したのだ。』

『貴方は寧ろ社のところへ遣つて來ない方がいゝ。貴方を呼び寄せるなぞといふことは恐ろしく卑劣な行爲だ。それに貴方には私なぞと一緒に、自分の一生を葬る必要は少しも無いのだ。貴方は私に取つて可惜しい女だ。氣のふさぐ時貴方の傍にゐると樂だつた。貴方にだけは自分のことを腹藏なく話すことが出來た。併しそんなことは何んの理由にもならない。貴方は自分を『看護婦』に決めて了つた――これは貴方自身の言葉だ。一體何んの爲めにそんな莫大な犧牲を拂ふのだ？　更に次のやうなことも篤と考へて御覽なさい――私が貴方を招く以上、私は貴方に對して何等の尊敬も拂つてゐないのだ。また貴方の承諾を期待する以上、貴方に對して何等憐愍の情を持つて居ないのだ。それにも拘らず私は貴方を招き、貴方の承諾を期待して居るのだ。孰れにしても貴方の返事だけは必要だ。何故と言ふに、私は出發を急がねばならないから。さういふ風になれば私は一人で出發する考へなんだ。

『私はウリイへ行つたところで何一つ期待して居ない。私は單に行つて見るのだ。私は何もわざ〳〵そんな陰氣臭い場所を撰んだ譯ではない。露西亞には何一つ私を繫ぐものがない――此處では外の悉ての

場所と同じく、總ゆるものが私に取つては他人なのだ。實際私は他の何處よりも露西亞で暮すことを不愉快に思ふ。併しその露西亞に於てすら、私は何物をも憎むことが出來ない！

『私は到る處で自分の力を試して見た。それは貴方が『自分自身を知る爲めに』と言つて、私に勸めたのだ。かうして私が自分自身の爲めに、また他人の爲めにその力を試して居る間は、生のあらん限り無限であるやうに思はれた。貴方の見てゐる前で、私は貴方の兄さんから打たれたのを凝然と我慢して居た。私は公然と自分の結婚を承認した。併し一體何にこの力を用ひたらいゝのか、これが遂に分らなかつた。私にも自信があり、貴方からも瑞西で是認して貰ひながら、未だに分らないで居るのだ。私は今でも昔と同じやうに、善いことを爲たいといふ希望を抱くことも、またそれに依つて悦びを感じることも出來る。同時に惡をも希望して、それに依つて矢つ張り悦びを感じることが出來る。併しその感じは二つながら何時も恐ろしく僅少で、强烈だつた例がない。私の希望は餘りに薄弱で、私を支導するだけの力がない。丸太に乘つてなら河を渡ることも出來るが、木片では到底駄目だ。こんなことを書くのも畢竟は、私のウイリ行きに何か希望でもあるのではないかと、貴方に考へられたくないからだ。

『昔と同じやうに、私は何人をも咎めはしない。私は耽溺の限りも盡して見た。そしてその爲めに自分の力を浪費して了つた。けれども私は放蕩を好みはしない。あの時だつて望んでは居なかつたのだ。貴方は最近私を監視してゐたが、私があの偶像破壞者どもを憎惡の目で眺めて居たのに氣が附いてゐますか。あの連中が希望を持つてるのが妬ましかつたのだ。併し貴方の心配は無用だつた、私にはあの連中

と何等の共通點もなかつたので、到頭彼等の仲間になることが出來なかつた。冗談にも面當ての爲めにも何方も私には出來なかつた。何も自分が物笑ひに成るのを恐れたからではない――私だつて物笑ひになる位いびく〳〵する筈がない――結局私が神士の習慣を持つてゐるので、そんなことをするのが忌はしかつたのだ。ところが若しあの連中に對してもつと愕惡や羨望を感じたら、或ひは彼等の仲間へ這入つたかも知れない。私に取つてそれが何んなに難事であつたか、そして何んなに兩途に迷つて惱んだかそれは貴方の判斷に任せて置く。

『愛する友よ！　私の發見した偉大なる優しき魂よ！　若しかしたら貴方は私に豐かな愛を惠み、貴方の美しい魂から流れ出る無量の美を私に注ぎ掛け、それに依つて最後に私の爲めに或る種の目的を打建てやうと空想して居るのかも知れない。それは不可ない、貴方はもつと愼重な態度を取るがいゝ。私の愛は私自身と同じやうに淺薄なものであらう。さうすれば貴方は不幸な身となるに決つてゐる。自分の鄕士と關係を失つた者は自分の神を、つまり自分の目的の悉々を失ふのだ、とこんなことを貴方の兄さんが言つたが、何んなことだつて議論するとなると果しのないものだ。けれども今日まで私からは、何等精神的な偉力もない否定以外には何物も生じなかつた。いや否定すらも私からは生じてゐない。悉々が何時も淺薄で無力なのだ。偉大な魂を持つたキリロフは思想と妥協することが出來ないで、到頭自殺して了つた。併し私の見るところでは、無論、あの男は自分の理性を失つたが爲めに、魂が偉大であり得たのだ。私には到底も自分の理性を失ふことが出來ない。そしてあの男程深く思想を信ずることが出來

ない。私には到底もあゝまで思想に執着することが出來ないのだ。何うしても、何うしても私には自殺することが出來ないのだ。

『自分のやうなものは自殺して了はなければならぬ、汚らしい蟲けらのやうに、この地球から一掃して了はなければならぬ、といふことは私にもよく分つてる。けれども私は自殺を恐れて居る。何故と言つて魂の偉大さを示すことが恐ろしいからだ。私にはそれが虛僞の上塗りであることがよく分つてゐる――無限な虛僞の連續に於ける最後の虛僞だといふことがよく分つてゐる。自己欺瞞が何んにならう？　單に魂の偉大さを弄ぶのではないか？　私は斷じて憤怒とか羞恥とかいふものを感じることが出來ない從つて絕望といふものも有り得ない。

『餘り長く書き過ぎて失禮しました。思はず知らず書い了つたのです。百頁書いたつて不充分だし、十行書いたつて澤山なことなのです。貴方を看護婦に賴むのは十行もあれば澤山なのだ。スウオレシニキを去つて以來、私は六つ目の停車場の驛長の家に住んでゐる。これは五年前ペテルスブルグの耽溺時代に知り合ひになつた男です。私が此處に住んで居ることは誰も知らない。この男の宛名で返事を下さい所書は封入して置きます。

ニコライ・スタウロギン』

ダーリヤ・パヴロウナは直ぐにウアルウアラ・ペトロウナのところへ行つて、この手紙を出して見せた夫人はそれを一讀した後で、最う一度一人でよく讀み返して見たいから、暫く彼方へ行つて呉れとダー

シヤに頼んだ。けれども直ぐまた彼女を呼び戻した。

『行くかい？』と、彼女は殆んど惜えたやうな調子でかう訊いた。

『參ります。』と、ダーシヤは答へた。

『支度をおし！　一緒に行かう。』

ダーシヤは訝かしげに夫人の顏を見遣つた。

『私が此處に殘つてゐたつて何も爲ることはないぢやないか？　何處で暮すのも同じことぢやないの？　私もウリイに歸化して、矢つ張り溪谷で暮しますよ……心配おしでない、邪魔はしないからね。』

二人は正午の汽車に間に合ふやうに、大急ぎで支度に掛つた。けれども三十分と經たないうちに、スクウオレシニキからアレキセイ・エゴリッチが遣つて來た。彼の言ふところに依ると、今朝突然ニコライ・フシオロドウキッチが一番の汽車で遣つて來て、現にスクウオレシニキに居るが、併し『何うも御容子が變で、何をお尋ねしても御返事がなく、部屋といふ部屋を殘らず歩いて御覽になつた後、御自分のお居間へ閉じ籠つてお了ひになりました……』とのことである。

『私は格別御命令を受けた譯ではありませんお知らせに參るのが何よりだと考へたので御座います。』とアレキセイ・エゴリッチは如何にも仔細ありげな容子をしてかう言葉を結んだ。

ウアルウアラ・ペトロウナは探るやうな目附で相手を見遣つたが、別段何も訊かなかつた。馬車は即座に用意された。ウアルウアラ・ペトロウナはダーシヤと一緒に出掛けた。夫人は途中で幾度か十字を

切つたと言ふことである。

邸内にあるニコライ・フシウオロドウキッチの居間の戸はすつかり開け放されて、當人の姿は何處にも見えなかつた。

『若しやお二階の方にでもいらつしやるのではございますまいか？』と、フオームシュカがおづ〳〵口を出した。

他の者は皆應接間に待つてゐるのに、何時になく四五人の召使がそろ〳〵とウアルウアラ・ペトロウナの後から蹤いて來た。彼等かこんな家風に反した不作法を敢てしたのは、今迄決してないことだつた。ウアルウアラ・ペトロウナもそれに氣が附いて居たけれど、何んとも言はなかつた。

彼等は二階へ上つて見た。そこには部屋が三つあつたけれど、誰の姿も見當らなかつた。

『若しや彼處へお上りになつたのぢやないでせうか？』と、誰かゞ屋根の戸を指しながら言つた。實際何時も閉つて居る屋根裏の戸が、開け放された儘になつてゐた。そこは屋根の直ぐ下になつてゐて、恐ろしく急な、非常に巾の狹い、長い椅子段を登つて行かねばならなかつた。そこにも矢つ張り一寸した小部屋があつた。

『私はあんなところへ登らないよ。あんなところへ登る筈がないぢやないか？』と、ウアルウアラ・ペトロウナは眞蒼になりながら召使の方を顧みてから言つた。彼等は夫人を見返したが、別に何んとも言はなかつた。ダーシヤはぶる〳〵と顫へてゐた。

ウアルウアラ・ペトロウナは椅子段を駈け登つて行つた。ダーシヤもそれに續いた。けれども夫人は屋根裏へ登り着くや否や、きやつと叫んでその儘悶絶して了つた。

ウリイ州の市長は扇の後ろにぶら下つてゐた。卓の上には『何人も罪する勿れ、余自らの業なり。』と鉛筆で認めた紙片が載つてゐた。それと並んで同じ卓の上には一挺の金槌と、石鹸の碎片と、大きな針（これは萬一の場合を慮つて用意して續いたものらしい）とが置いてあつた。ユコライ・フシウオロドウキツチが縊死して居る丈夫な絹紐は、明かに前から選擇して用意したものらしく、一面にべつとりと石鹸が塗つてあつた。悉べて周到な用意と　最後の瞬間まで續いた明確な意識とを物語つてゐた。

檢死に際して町の醫者達は信ずるところあるらしく、精神錯亂だなぞといふ考へを飽くまで否定した。

主婦

市橋善之輔譯

第一編

一

とう〳〵オルヂノフは宿を變へることに定めた。彼が宿つて居た家の主婦、へぼ役人の貧乏な中老の後家は、彼の止宿の約束の期間が切れる、明日にも成らない内に何故か知らぬがペテルスブルグを去つて、親戚のものと一緒に暮す爲めに遠い州へ出掛けやうとして居た。期限の切れる迄踏み留まり乍ら、若者は名殘惜しさうに自分の古い宿所のことを考へ、そこを立ちのかなければならないと思ふとぢりぢりした。といふのは彼は貧乏で、宿所といふものは高かつたから。主婦が立ち去つたあくる日、彼は帽子を取つて表へ出て、ペテルスブルグの裏町をさまよひ歩き、家の門に貼つてある、札といふ札にはすつかり眼を留め、どんな時にも、貧乏な借家人の部屋の片隅をめつける機會が餘計にある、一番汚ない人のうじや〳〵居るところを探して歩つた。

長い間彼は念を入れて探して居たが、俄かに、新しい、凡んど經驗したことのない、氣持に襲はれた。彼は最初は何氣なく茫然として、次には心を留めて、しまひには強い好奇心を持て自分の周圍を見た。

町の群衆とどさくさ、騒ぎ、運動、いろんな珍しいもの、自分の珍しい境遇自分の全生涯を、平和に穏かに憩ふことの出來る小じんまりした家を、勞苦に依り、汗に依り、外のいろんな手段に依つて得むとする無駄骨折で費す忙しいペテルスブルグ人には全くあきあきした、都會生活の下らない、日常の些細な事――それ等の下品な散文と侘しさが、オルヂノフの心には反對に靜かな喜びと平穏とを與へた。彼の青白い頬には一面にほんのりした櫻色が現はれ、彼の眼は新しい希望を有するものゝ如く輝きそめ、彼は冷たい新鮮な空氣を、深く腹一杯に吸つた。非常に彼は氣が輕く成つた。

彼は常に靜かな、全然孤獨の生活を送つて來た。三年前學位を取り、大いに自由の身と成つてから、彼は間接にしか知らなかつたある老人に會ひに行つたが、長く待たされてから初めて揃ひの仕着せを着た召使が、も一度彼の名を取次ぎ直してくれる事を承諾した。それから彼は暗い、高い、ひつそりした部屋、時がこわさずに置いた舊式の屋敷に今も見出すとの出來る例の物淋しい部屋に入つたが、その中に彼は、灰色の頭をした老人で、勳章をぶらさげた、元彼の父の友達であり、同僚であつた男で、彼の後見人だつた人を見た。老人は彼に紙幣の小さな一ねぢりを渡した。それは極く少ない高だつた。家の借金を拂ふ爲めに競賣に附して賣つた、先祖傳來の所有地から上つた、それがすべてだつた。オルヂノフは別に氣にも留めずに自分の家產を受取り、いささらばと後見人に別れを告げて町へ出た。寒い、陰氣な秋の夕だつた。若者は夢見心地で、一種ぼんやりした悲しみの爲めに心は張り裂けた。彼の兩眼には火のやうな輝きがあり、彼は熱が出て、熱くなるかと思へば寒くなつた。道々彼はこの御金で、二三年

は生活する事が出來る、切り詰めさへすれば四年間は生活する事が出來ると思つた。たそがれになつて霧雨が降つて來た、彼は最初に出くわした隅部屋を借り、一時間と經たない內にそこへ引つ越した。そこでは修道院にでも居るやうに、浮世を捨てたものゝ如く閉ぢこもつた。二年とたゝない內に彼はすつかり世捨人になつて了つた。

彼は氣がつかない內に、羞しがりで、非社交的な人間となつた。で、自分をひきつけつゝある、そして早晩免るゝ事の出來ない別種の生活――騒々しい、のべつの興奮、千變萬化の生活があるといふ事は、彼には思ひも依らなかつた。尤とも彼とても、さういふ生活の話を耳にしない譯には行かなかつたが、それを知らず又知らうともしなかつた。子供の頃から彼の生活は並外れて居た。そして今やます〳〵並外れて來た。彼は最も深い、飽く事を知らぬ情熱にとらへられたが、それは人間の全生涯を吸收する性質のもので、オルヂノフのやうな人には、實際的な日常の活動の領土に如何なる地位をも與へないやうなものだつた。この情熱とは學問であつた、で、それは彼の青春を消耗し、夜な〳〵の憩を、まわりの緩かな、人を酩酊させる毒で妨げ、彼から食慾や、彼の窒息するやうな隅部屋に入り込んだことのない新鮮な空氣を奪ひつゝあつた。だが、オルヂノフは自分の情熱に酩酊して居て、それに氣がつかなかつた。彼は若かつた。そしてこれ迄何も欲しく思つたものがなかつた。彼の情熱は彼を外的生活といふ點にかけては赤ん坊にし、人々の間に自分の或る位置を拵へる必要のある時に彼等をどける事が全然不可能になつた。或る種の利口な人々の學問は、彼等の手中にある一つの資本だが、オルヂノフに

取つては、われとわが身に向けた武器だつた。

復は勉強し、知らむと欲する論理的な、はつきりした動機よりも本能的な衝動に動かされたのであつた。そしてそれは彼がこれ迄して來た外の仕事、極く些細な事に於いてもさうであつた。子供の時にも彼は變な男で、外の學校友達と違つて居るやうに思はれた。彼は自分の兩親を知らなかつた。彼は彼の變な、非交際的な氣質で彼の學校友達を怒らせて、彼等から下品な、荒つぽい取扱ひを甘受しなければならなかつた。そしてその爲めに彼は實際、非社交的になり、不愛想になり、段々生活が隱遁的になつて來た。だが彼の孤獨の勉強には秩序も組織もなく、今に至るまでさういふものは無かつた、今も猶彼は藝術家の最初の有頂天、最初の熱病、最初の夢中の狀態に居た。彼は獨りで一つの體系を拵らへつゝありそれは彼の内に數年來展開されつゝあつた。そして新しい、はつきりした形に盛られたぼんやりした、曖昧な、然し不思議に心を鎔める、ある觀念の姿が漸時彼の靈に現はれつゝあつた。そしてこの形は彼の心をじり〳〵させ、表現を求めた。彼は今も猶おづ〳〵とではあるが、その新奇なる事、その眞理、その獨立は承知して居た。創作力は既に表はれ、それは力を集め、形を取りつゝあつた。だが具體の時は今猶遠く、恐らくは遙かかなたで、恐らくは全然不可能だつた！

扨て彼は押し默れる荒野から、喧しい、怒鳴り聲の聞える都會へ突然やつて來た世捨人、隱遁者の如くに町をさまよつた。何もかも彼には新しい、めづらしいものに思へた。だが彼は彼の周圍に波打ち、音立てゝ居る世間から離れて居たので、自分自身の變な氣持ちに驚きもしなかつた。彼は自分が超越し

て居る事に氣が付かない樣子だつた。それ所か彼の心中には喜しい氣持――長い斷食の後、肉や酒を眠の前に並べられた飢じい男の有頂天に似た一種酩酊したやうな氣持ちが萠え出して居た。尤とも勿論、宿所を變へるといふやうなつまらない事が、オルヂノフにしろ、如何なるペテルスブルグの住民をでも興奮させ、ぞく〳〵させるといふのは變な話だが、事實をいふと、實際的の目的を抱いて外出する等といふことはこれ迄彼には凡んど無かつたことである。

彼は益々興に乘つて町を歩き廻つた。彼はフラーナー（譯者註、のらくら者）のやうにいろんなものを眺め廻した。

だが今も猶、例に依つて矛盾した事には眼前にかくも輝しく展開して居る繪の内に、彼は本でも讀むやうに意味を讀みつゝあつた。あらゆるものが彼の注意を牽いた。彼は如何なる印象をも遁さず、往來の人の顏を考へ深さうな眼付きをして打ち守り、彼の周圍のあらゆるものゝ獨特な姿を注視し、人々の話に懇ろに耳を傾けることは宛かも孤獨の夜の靜かさの内に形造られたる色んな結論を、あらゆるもので確かめむとするかの如くであつた。屢々些細な事が彼に印象を與へ、或る觀念を生じ、そして初めて彼は生き乍らわれと自分をあゝして自分の部屋の内に埋めて居た事が腹立たしくなつて來た。こゝでは何もかもが迅速に動き、彼の脈搏は一杯で早く、孤獨に抑へつけられ、無理な、緊張した活動に依つて辛じて動き、持ち上げられて居た彼の心が今や速かに、落ちついて、大膽に動いた。それに彼がこれ迄知つて居た、といふよりも寧ろ、只藝術家の本能に依つて正しく見通して居た、彼に取つてはかくもめ

づらしいこの生活の内に押し入り度いといふ無意識なあこがれが起つた。彼の胸は愛や同情をあこがれる思ひで、本能的にどき〳〵し出した。彼は自分の側を通り行く人々を更に注意深く見た。だが彼等は見も知らぬ人々で、夢中になつて考へ事をして居たで、段々オルヂノフの呑氣な氣輕るさは知らない内に消失し出し、現實が彼の心を壓し、一種の畏怖の念を彼に招び起すやうになつた。彼は、初めて、いそ〳〵として病床から起きたが、運動でめまひがし、うつとりとなり、光や、眩光、生活のうづ卷、心を亂す群衆の騒しさや、いろんな色にうんざりしてくたばる病人のやうに新しい印象の食傷でうんざりし出した。彼はがつかりし、不幸な氣持ちになつて來た。彼は自分の生活、自分の仕事、猶又未來に對する恐怖で一杯になり出した。ある新しい觀念が彼の平和を打ちこわした。これ迄自分は孤獨であつた、誰も私を愛して呉れなかつた、又實際此方からも誰をも愛することが出來なかつたといふ考へが突然彼を訪れた。彼がかうして歩いて居る初めの内に偶然話を始めた通行人は彼を無禮な、變な顔して見た。彼は彼等が自分を氣違ひか、これは實際間違ひのないことだが極く風變りな奇人と思つたといふ事が分つた。彼は誰もかもがいつでも彼の居るところでは幾分落ち着かなくなること、子供の時にさへも、皆なが彼の夢見勝ちな、一徹な性質の爲めに彼を避けたこと、他人に對する同情がいつも彼には難しいことで厄介なことであり、人からも認められなかつた、といふのはそれは彼の心中に存在はしたが、その中に精神的の平等が認められなかつたからのことであること、自分と同い年の子供等と自分一人はまるで似もつかないので、子供の時にさへも彼を苦しめた事實を思ひ出した。今や彼は自分がいつも、しよ

つ中誰もかもに顧みられなかつたことを思ひ出した。

氣が付かない内に彼は町の中心から程遠きペテルスブルグの場末に來て居た。寂しい料理屋で兎に角御飯を濟せて、彼は表へ出て又さまよつた。又もや彼はいくつもの町や辻を通つた。段々行くと、青や黄色の長い垣根が擴がつて居た。彼は有福な家の代りに、すつかり損じた小さな家に出會するやうになつた。そしてそれ等にまじつて、大きな工場、長い烟突のある異樣な、煤け切つた赤い建物があつた。その周圍は荒地で、人影絶え、あらゆるものが物すごく不氣味な樣子をして居た。少なくともオルヂノフにはさう思へた。既に夕方になつて居た。彼は長い横町を出て、教區の教會が立つて居る辻へ來た。

彼はふら〳〵つとその中へ入つた。丁度禮拜式が終つたところで、教會は凡んど空虛、只二人の老婆が入口近くで跪いて居た。役僧で、灰色の頭をした老人が蠟燭を消して居た。沈み行く日の光は丸天井の狹い窓を通つて上から流れ込み、ある會堂を輝かしい光の海に浸して居たが、それは段々力弱くなり。丸屋根の下に集つた暗闇が黑くなればなる程、ラムプや明りのちら〳〵する蝋やきを反射して、鑛金したイーコンがあちこちに益々輝しく光り出した。ひどく意氣沮喪し、それに何だか息苦しいやうな思ひがしてオルヂノフは教會の一番暗い隅つこの壁にもたれて、暫らく茫然として居た。二人のむらのない洞聲見たいな足音が建物に響き渡つた時に彼は我に歸つた。彼は眼を擧げたが、進んで來る二人の姿を見ると、名狀し難い好奇心が彼をとりこにした。彼等は老人と、年若な女とであつた。老人は脊が高く今猶眞直で、丈夫さうに見えたが、瘠せて、病的に蒼白い顔をして居た。樣子を見ると、何處か遠い州

の商人に思へたかも知れなかつた。彼は毛皮の飾りのついた、長い、黒い、ゆつくりしたたれのある、他所行きらしい上衣を纏つて居たが、それをボタンを掛けずに着て居た。その下には上から下迄きつかりボタンを掛けた長いたれの露西亞式の着物が見えた。彼のむき出しの首はぞんざいに結んだ、燃えるやうな赤色のハンカチにおゝはれ、彼は兩手で毛皮の帽子を持つて居た。彼のまばらな、長い、白髪交りの顎髭は胸迄たれ下り、火の如き、熱病やみの如くに輝やく眼が、八の字になつた、出つ張つた眉毛の下から高慢ちきな、長い凝視を投げた。女は二十前後で、驚く可き程美しかつた。彼女は立派な、青い、毛皮の飾りのついた短衣を着、その頭は顎の下で結えた白繻子の布で蔽はれて居た。彼女は眼を伏せて歩き、一種悲しげな威嚴が彼女の姿全體に行き渡つて居り、彼女の子供のやうに柔かな、穏かな顔付きの可愛らしい輪廓にもはつきりと、うれいが現れて居た。この驚く可き夫婦には何處か變なところがあつた。

老人は教會の眞中にじつと立ち止り、教會には誰も居なかつたけれど四方に頭を下げた。彼の連れもさうした。それから彼は彼女の手を取つて、この教會が獻堂してある聖母の大きなイーコンのところへ連れて行つた。それは臺の金や寶石に寫つた蠟燭のまぶしい光で、祭壇の上は輝いて居た。教會に今も殘つて居た教會の役僧が恭しく老人に頭を下げ、老人も彼にうなづいた。女はイーコンの前にうつむきに倒れた。老人はイーコンの臺にかゝつて居る幕のふちを取つて彼女の頭にかぶせた。忍び泣きが教會中にこだました。

オルヂノフはこの場面の莊嚴さに心を牽かれ、せか〳〵してけりを待ちこがれて居た。二分後に女は頭を擧げたが、と又ラムプの明るい光が彼女の美しい顏にさした。オルヂノフはびくりとして、一歩前へ進んだ。彼女は既に老人に手を與へて、二人は靜かに教會を歩み出た。彼女の顏の優しい青白さに對してきら〳〵して居る長いまつ毛の下の濃い青色の眼から涙が湧き出で、青白い頰を傳つて居た。彼女の唇にはほゝ笑がほの見えたが、彼女の顏には子供らしい恐怖と、不思議なぞつとする思ひの跡があつた。彼女はおづ〳〵と老人に身を擦り寄せたが、彼女が感動してふるへて居ることが分つた。

彼にはめづらしい、樂しい、いつ迄も續く氣持ちに壓へ付けられ苦んで、オルヂノフは足早に彼等の後を追つ掛け、教會の玄關で彼等に追ひついた。老人は彼を好意のない、不作法な顏をして眺め、彼女も彼をちらつと見たが、ぼんやり、好奇心などなしに見たので彼女の心は宛かも何かかけ離れたことを夢中に考へて居るやうであつた。オルヂノフは自分で自分のやつて居ることが分らずに彼等の後について行つた。もう既に眞つ暗になつて居たが、彼は少し離れてついて行つた。老人と若い女とは眞直に町の門に通じて居る、行商の露店や、雜穀商や、居酒屋が立ち並んで居る長い、廣い、汚ない通りに曲り、門から大きい、混雜して居る外の通りへ行く事の出來る、四階建の建物の一廓の素晴しく大きい、黒くなつた壁に沿つて走つて居る、その兩側に長い垣根のある長い、狹い小路に曲つた。彼等は家に近づきつゝあつた、老人は振り返つて、いら〳〵してオルヂノフを見た。若者は射擊されたものゝ如く立ち止つた。彼自身も自分の衝動的な振舞の變てこな事を感じた。老人は自分が威嚇するやうににらんだのが

功能があつたことを確め度いと思ふやうにも一度振り返つてから、彼等二人、彼と若い女とは中庭の狭い門から入つて行つた。オルヂノフは引つ返した。

彼はひどく不機嫌で、一日無駄使ひをした、草疲儲けをした、そしてとゞの詰り馬鹿々々しくも、全く平凡なことを珍事のやうに大袈裟に考へたと思ふと、われと自分に腹が立つた。

朝の間彼は自分の隠遁者のやうな生活常態にたいして厳しく自分を責めはしたが、彼の内的、藝術的な世界ではなく、外的の世界で、彼の氣を散らし、彼に印象をあたへ、彼にぞつとするやうな思ひを與へるものは何に依らず避けるといふことが彼には本能になつて居た。今や彼は悲し氣に、後悔しておのが隠れ家の事を考へた。そして彼は意氣沮喪と、自分の落ち付かない境遇、並びに、眼前に横はる努力に就いての心配のとりことなつた。とう〳〵うんざりし、二つの考へを結び付けることが出來ずに彼は夜遅くなつて、自分の止宿に歸つたが、氣が付いて驚いたことには、彼は自分が住んで居る家をすんでのことに行き過ぎやうとして居た。啞然として、首を振り、ぼんやりして居るのは疲れて居るからだと思ひ、階段を登つて、とう〳〵自分の屋根裏の部屋に着いた。そこで彼は蠟燭をともしたが、暫らくすると、泣いて居る女の姿が彼の想像にはつきり浮んだ。その印象ははつきりとして強く、彼の心は合點の行かぬ感動と恐怖とで打ち震へ、夢中の、子供らしい後悔の涙で泣きぬれて居るかの穏かな、温和しい顔立ちをなつかしい思ひを抱いて再現したので、彼は眼がうるみ、熱い、ぞつとする思ひが手足を走るやうな氣がした。だがそのまぼろしは長くは續かなかつた。熱狂の後、夢中の後に反省が、やがてし

れつたい思ひが、次には力無き怒りが訪れた。彼は着物も脱がず、堅い寢床に身を投げた……

オルヂノフはいら〳〵した、おづ〳〵した、苦しい氣持ちで朝かなり遅く眼を覺した。彼は急いで用意をとゝのへ、凡んど無理やりに實際的な問題に心を集中し、前日の巡禮に選んだのとは反對の方向に向つて出發した。とう〳〵彼はシュビースといふ、チンヘンと呼ぶ娘と丈けで暮して居る貧乏な獨逸人の家に、小さい貸間を見つけた。敷金を受取るとシュビースは止宿人を呼ぶ爲めに門に打ちつけてある掲示を下し、オルヂノフの學問に對する熱誠をほめ、自分も彼と一緒に熱心に勉強すると約束をした。オルヂノフは今夜越して來るといつた。そこから彼は家へ歸らうとしたが氣が變つて外の方角へ曲つた。自信が戻つて、われながら自分の好奇心にほゝ笑まれた。じり〳〵して道が非常に長いやうに思へた。とう〳〵彼は前の晩に行つた教會へ着いた。夕の禮拜が行はれつゝあつた。彼は集つて居る人々を凡んどすべて見ることが出來る場所を選んだ。だが彼が探して居る姿はそこには見えなかつた。長い間待つて居てから、赤くなつて出て了つた。心にもなく湧く感情をきつぱり胸に疊み・しつこくわれと自分を抑へて、考への方向を轉じやうとした。日常の實際的な事柄を考へ、未だ御飯を食べなかつたことを思ひ出し、腹が減つて居ることに氣が附いて昨日食事をした居酒屋に入つた。知らず〳〵彼は込んで居る道や寂しい道を通り、町をのらくら歩き廻り、黄色くなりつゝある野を見晴して町が終つて居る寂しいところへとう〳〵出た。彼は死の如き沈默がその親しみなさで彼を打つたのでわれに歸つた。ペテルスブルグの十月によくある乾燥した寒い日だつた。程遠からぬところに小家があつた。そしてその側に乾

草堆が二つ立つて居た。肋骨の眼につく小馬が頭を垂れ、唇を突き出し、小さな二輪馬車のそばに馬具を附けずに立つて居り、何事をか考へて居るやうに見えた。番犬がうゝ〳〵唸り乍ら、こわれた車輪の側で骨をしやぶり、襯衣一つの三つになる子供は、むしやくしやした白い頭に櫛を入れて居たが、町から一人で來た知らぬ人を不思議さうな顔をして眺めた。小屋の後ろに野と小屋の庭とが見渡された。地平線上に、青空に對して黑い森の斑點があり、正反對の側には密集せる雪雲があり、それは空を横切つて續々鳴聲も立てずに動いて居る・飛び行く鳥の群を追つ掛けて居るやうに思へた。萬物寂として宛かも莊嚴に悲しく、胸騷ぎがする、秘かな心配をはらんで居るが如くであつた……オルヂノフは更にぐんぐん歩つて行つたが、佗しさが彼の心を壓した。彼は町に戻つたが、町から突然夕方の禮拜の爲めに鳴りつゝある沈んだ鐘の喧しい叫びが漂つて來た。彼は足を早めて一寸の間に昨日からあんなに親しくなつた教會へ再たび入つて行かうとした。

例の未知の女は既にそこに來て居た。彼女はつい入口のところに、禮拜者の群の中で跪いて居た。オルヂノフは乞食や、ぼろを纏つた老婆、病人や片輪が教會の戸口で、施しを待つてうぢや〳〵集つて居る間を通つて、例の女の側に跪いた。彼の着物は彼女の着物に觸り、熱切な祈りを口にする時に不規則に彼女の唇から洩れる息の音を聞いた。此前の通りに彼女の顔は限り知れぬ熱誠で打ち震へ、又もや涙が彼女の燃ゆるが如き頰を傳つたり、乾いたりして居て、宛かも何か恐る可き罪を洗ひ去るものゝ如くであつた。二人が跪いて居るところは眞暗で、狹い開いた窓からすから入つて來る氣流の中に搖れて居

るランプのぼんやりしたあかりが、彼女の顔にゆさぶれる光を投げたが、彼女の顔の目鼻立ちはかの若ものゝ記憶に刻印を捺し、彼は涙ぐみ、彼の心はぼんやりした、堪へ難い苦痛で裂けた。だがこの苦しみには一種特別な、烈しい喜びがあつた。とう〳〵彼はそれに辛抱が出來なくなり、彼の胸は忽ち、樂しい、ついぞ覺えのない欲求で打ちふるへ、痛み出し、すゝり泣きを始めて、彼は教會の冷たい敷石に熱のある頭を下げた。彼は氣持ちのいゝ苦痛でぞく〳〵する胸の惱みの外何ものをも見ず、感じなかつた。この極端に印象を受け易い性質、感じ易い性質、並びに抵抗力の缺如は孤獨の爲めに成長したのかも知れず、或ひはこの衝動的なる事は長い不眠の夜のうんざりする、息の詰るやうな、絶望的な沈默の内、無意識のあこがれ、じつとして居られない精神の興奮の中で成長して、遂に爆發し、出口を見つける程になつたのかも知れず、或ひは又單にさういふ莊嚴な瞬間が突然やつて來て、陰鬱な、息も詰るやうな日に、空全體が突然眞暗になり、あらしが雨と火とを乾き切つた土に降り注ぎ、エメラルド色の小枝に眞珠の如き雫をかけ、草や作物をなぎ倒し、可憐な花びらを地に壓し潰して、後で太陽の初光と共に萬物を甦らせ、太陽を迎へる爲めに立ち上り、意氣揚々として、氣持ちのいゝ、豐かな香を空に揚げさせ、新しい命を喜ばしめる如くに必然的なものであつたのかも知れない。

だがオルヂノフはどうしたのか譯が分らなかつた。彼は凡んど無我無中だつた。

彼は式が終つたことも凡んど氣が附かなかつた。そして、例の未知の婦人の後について、入口に集つて居る群衆の間を縫ふやうにして歩つた時に初めて正氣附いた。彼女のはつきりした、いぶかしさうな

眼に時々出會した。出て行く人々にのべつに遮られて、彼女は一度ならず彼の方に振り返つた。彼は彼女の驚きが段々大きくなり、突然火のやうに赤くなつたことが分つた。その時又もや例の老人が群衆の中から進み出て、彼女のかひなを取つた。又もやオルヂノフは彼の不機嫌な、嘲笑的な凝視にぶつかつた。と突然一種變な怒りが彼の心を捉えた。とう〳〵彼は暗闇の内に彼等を見失つた。で、人間業でない努力で彼は押し進んで教會を出た。だが新鮮な夕の空氣も彼を恢復さすことが出來なかつた。彼は呼吸が苦しく、息が詰るやうな氣がし、彼の心臓はのろく、烈しく鼓動し始め、宛かも胸をこわして了ふかの如くであつた。とう〳〵彼は實際かの見知らぬ人達を見失つて了つたといふ事を知つた。彼等は本通りにも居なければ小路にも居なかつた。だが既にオルヂノフには或る考へが浮び、心の中で、亂暴ではあるが實行すれば必らず成功するといつたやうな變な、きつぱりした目論見を立てゝ居た。あくる朝八時に彼は小路からその家へ行き、家の中の開いた下水溜見たいな、狹い汚ない裏庭へ入つた。庭で何かして居た門番は鋤の柄に顎を乗せてオルヂノフを見上げ、見下して居たが、何用かと尋ねた。その門番は二十五位の小柄な男で皺だらけで、ひどく老けた顔の韃靼人だつた。

『僕は宿を探して居るのだ。』とオルヂノフはせか〳〵していつた。

『どんな?』と門番はにやりと笑ひ乍ら尋ねた。彼はオルヂノフのことはよく知つて居るといつたやうな顏して彼を見た。

『造作附きの部屋が借り度いのだ。』とオルヂノフは答へた。

『あの庭にはありませんよ。』と門番は謎見たいに答へた。

『ぢやあこゝには?』

『こゝにもありませんよ。』門番は又鋤を取つた。

『なあに貨して呉れるだらう。』とオルヂノフは十コペックを受取り、それから又鋤を取つたが、一寸の間默つて居て『部屋はない』といふことをはつきりいつた。だが若者はそれを耳にしなかつた。彼は水溜りの中に置いてある、くさつた、ゆさぶれる板の上を歩つて、その庭からその内の小屋へ行く唯一つの入口、水溜りの中に溺れさうに見える黑い、汚ない、泥だらけの入口の方へ行つた。下には貧乏な棺作りが住んで居た。その氣の引き立つやうな仕事場を通つて、オルヂノフは幾分こわれて居る、つる〳〵したぐる〳〵ねぢれた梯子段をやつとこさで上つて、暗がりの中に麻布のぼろで蔽はれた重い、不細工な戸を探り當て、かけがねを見つけて、それを開けた。彼の誤まりではなかつた。彼の前には例の老人が驚きの眼を見張つて彼を見て立つて居た。

『何御用です。』と彼はだし抜けに、凡んどさゝやくやうに尋ねた。

『部屋はあいて居ますか。』オルヂノフはいはうと思つて居たことを凡んどすつかり忘れて了つて、さう尋ねた。彼は老人の肩越しに例の若い女を見た。

老人は默つて戸を閉め、オルヂノフを閉め出さうとし出した。

『御貸しするところはありますよ。』と若い女の親しい聲が突然いつか
老人は戸を離した。
『ひつそりしたところが欲しいので。』とオルヂノフは急いで部屋に入り、この美しい女に向つていつた。
だが彼は自分の未來の大家と主婦とを見て驚いて石化したやうに成つて立ち止つた。彼の面前で、だんまりの、驚く可き芝居が起りつゝあつた。老人は死の如く青ざめ、宛かも意識を失ひ掛けて居るかの如くであつた。彼は重苦しい、探るやうな眼付きで女をじつと見据えた。彼女も最初は眞青に成つたが、やがて、さつと彼女の顔は赤く成り、眼は異様に輝いた。彼女はオルヂノフを外の小さな部屋へ連れて行つた。
彼等のところは一つの可成り大きな部屋で出來て居り、それが二つの仕切りで三つに別れて居た。外側の部屋から彼等は眞すぐに狹い、暗い廊下に入つた。眞向ふに戸があり、それからは明かに仕切りの向ふ側の寢室へ入れるらしかつた。右手、廊下の一方の側から彼等は貸間へ入つた。それは狹つ苦しくて、仕切りと二つの低い窓とにはさまれて居た。日常生活に必要なものが、詰つて居たが、貧弱で、窮屈ではあつたが、清潔といふ點では辛抱出來た。道具といふのは飾の無い白テーブル、二つの飾りの無い椅子、壁の兩側にある戸棚だつた。鍍金した花環の中にある大きな、舊式のイーコンは片隅の棚の上にあり、その前にランプが燃えて居た、大きな、無細工な露西亞式のストーヴが半分はこの部屋に、半分

は廊下にあつた。こんなところに三人も住むことが出來ないのは明瞭なことだつた。
彼等は條件を相談し出したが、纏らず、御互ひにいつて居る事がまるで分らなかつた。二足離れたところでオルヂノフは彼女の胸の鼓動を聞くことが出來、彼は彼女が感動し、何だか恐怖でふるへて居るらしい事が分つた。とう〳〵彼等は或る約束を結んだ。若者はすぐに引つ越して來るといつて、老人をちらつと眺めた。老人は戸のところに立つて、相變らず眞青な顔をして居たが、靜かな、夢のやうなほゝ笑みが彼の唇にしのびやかに浮んだ。オルヂノフの眼に出會すと彼は又眉をひそめた。
『君は旅行券を持つて居ますか。』と彼はオルヂノフの爲めに廊下へ行く戸を開けてやり乍ら、突然大きな、ぞんざいな調子で尋ねた。
『えゝ。』とオルヂノフは不意を打たれて答へた。
『名前は?』
『ワシリイ・オルヂノフ。貴族です。何處へも出ないで、自分だけの仕事をして居るので。』と彼も老人の調子に傳染して答へた。
『わしもさうなので』と老人は答へた。
『わしはイリヤ・ミューリンといつて工藝家で。外に御用はありませんか。ぢや又。』
一時間後にはオルヂノフは既に新しい宿の人と成つて居たが、この事は自分にも意外、かの獨逸人にも意外の事で、彼は義理難いチンヘンと共に新しい下宿人が自分達を瞞したのではないかと不審がつて

居た頃だつた。

オルヂノフは何が何やら分らなかつたし、又分らうとも欲しなかつた。

二

彼は胸が烈しく鼓動して居たので、くら〳〵し、眼の前のものが青く見えた。無意識的に新しい宿で少ない持物を並べることにいそしんだ。彼はいろんな必要品の入つて居るふくろをほどき、本の入つて居る箱を開けて、それをテーブルの上に並べ出したが、間も無くさういふ仕事が手につかなく成つた。しよつ中彼の眼の前にはかの女の姿が現はれたが、彼女と出會した事は彼の生活全體を搔き亂し、彼の胸に抵抗し難い、烈しい有頂天を充し、非常な幸福が彼の餓死しやうとして居る生活に立ち所に漲り、頭はくら〳〵し、心が苦痛と、どうしていゝのかわからないのでうつとりと成つた。

彼女を見ることが出來ると思つて、彼は旅行券を出して、それを老人のところへ持つて行つた。然るにミューリンは碌樣戸も開けなかつた。彼から旅行券を受取り、『結構。御安心下さい。』といつて戸を閉めた。オルヂノフは不愉快に成つた。何故か知らぬが、老人の顏を見ることは厭だつた。彼の眼には人の惡い、人を馬鹿にしたやうなところがあつた。だが不快な印象は忽ち消失した。この三日間といふものオルヂノフは以前の沈滯狀態にひきかへて、千變萬化の生活をしたが、彼は反省する事が出來ず、實

際それを恐れて居た。彼の全生活は高揚と混沌との狀態にあつた。彼はぼんやり自分の生活が二つにこわれたやうな氣がした。あるあくがれ、ある期待が彼をとらへて、外の考へは少しも彼をわずらはさなかつた。

間誤々々して彼は自分の部屋に戻つた。炊事をするストーヴのそばで小さなせむしの御婆さんが忙しさうに働いて居たが、ひどく不潔で、ひどいぼろを纏つて居るので、可哀さうな氣を起させた。彼女はひどく不機嫌らしく時々小さな聲でぶつ〳〵いて居た。彼女は例の老人の召使であつた。オルヂノフは彼女に話し掛けて見たが、不機嫌の所爲に違ひない、一口も物をいはなかつた。とう〳〵御飯時に成つた。老婆はかまから玉菜のそつぷと、ぱいと牛肉とを取り出して、主人夫婦へ持つて行つた。彼女はオルヂノフのところへもそれを持つて來た。御飯が濟んでから死の如き沈默があたりを訪れた。

オルヂノフは一冊の本を取つて、以前に何度も讀んだ所の意味を飲み込まうと努め乍ら、長い間ページを引つ繰り返して居た。根氣負けして彼は本を投げ、又部屋を片づけ出したが、とう〳〵彼は帽子を取り、上衣を羽織つて町に出た。町の樣子等は見ず、出たらめ目に歩き乍ら、彼は矢張り、出來る丈け心を集中し、散らかつた考へを集めて自分の境遇を少し考へて見た。だがその努力が又もや彼を不幸と苦痛とに追ひ返した。彼は熱く成るかと思へば寒く成り、時には胸が烈しく鼓動するので壁に倚つ掛らなければならなかつた。『いや、死んだ方が增しだ。』と彼は思つた。『死んだ方が增しだ。』と彼は熱のあるふるへる唇でつぶやいたが、自分がしやべつて居る事がはつきり頭にあつた譯ではなかつた。彼は非常

に長い間歩つた。遂には體迄水に濡れて居ることを感じ、初めて雨が盛んに降つて居ることに氣がついて家へ歸つた。家から程遠からぬところで門番の姿を見た。彼は韃靼人が暫らく彼をめづらしさうに眺めて居たが、めつかつたと氣がついたので、又歩き出したのだと思つた。

『やあ！』とオルヂノフは彼に追ひついていつた。『君は何といふのかね。』

『皆さんが門番とおつしやいます。』と彼はにやりと笑つて答へた。

『こゝに長く門番をやつて居るのかね。』

『えゝ。』

『大將は工藝家かね。』

『さうなんでせうよ。』

『何をして居るのかね。』

『大將は病氣で、生きてゝ、神樣に祈つてます。それ丈けですよ。』

『ありやあ大將の細君かね。』

『細君といふのは？』

『大將と一緒に住んで居るのさ。』

『さうなんでせうよ。さいなら。』

韃靼人は帽子に觸つて、自分の巣へ行つた。オルヂノフは自分の部屋へ歸つた。老婆はぶつ〳〵こぼ

し乍ら戸を開けて呉れたが、かけがねを掛けると彼女が自分の生活を送るところなるストーヴの上へ又上つた。既に暗く成りかゝつて居た。オルヂノフは火を貰ひに出掛けたが、主婦の部屋へ行く戸が鎖がかつてあるのに氣がついた。彼は老婆に聲を掛けたが、彼女は肘を枕にし、ストーヴから、主婦の鎖をどうしやうといふのだといつたやうにきつと彼を見て居たが、何ともいはずにマッチの箱を投げて呉れた。彼は部屋へ戻つて又もや本やいろんなものゝ仕末をしやうとした。だが何時の間にか何が何やら分らなくなつて戸棚に腰掛け、自分では眠つたやうな氣がした。時々彼はわれに歸つて、自分の眠りは眠りではなく、病氣の苦しい無意識狀態なのだと思つた。彼は戸をたゝく音を聞き、それが開くのを聞いて老人と主婦とが夕の禮拜式から歸つたのだなと思つた。その時彼は彼等のところへ行かなければならぬ用があつたなと思つた。彼は立ち上つた。そして、俺は今彼のところへ行くところだと思つたが、老婆が床の眞中へ投げ下して置いた薪に躓いて倒れた。さうして彼はすつかり意識を失つたが、暫らく經つてから眼を開いて、氣が付いて驚いたことには彼はさつきと同じ戸棚の上に着物を着た儘横はつて居り、彼の體の上には優しい心遣ひを含み、神々しく美しく、そして靜かな、母親の如き涙に濡れて、あの女の顏が突き出て居た。彼女は彼の頭の下に枕を宛がひ、溫かいものを體に掛けて呉れた。そして優しい手が彼の熱のある額の上に置かれた。彼は『あり難う』といひたかつた。彼はその手を取り、それを自分の乾き切つた唇に押し當て、それを涙で濡らし、いつ迄も〳〵接吻して居たかつた。彼はいろんな事がいひ度かつた。だが何といつていゝか分らなかつた。その瞬間彼は死んでもいゝと思つた。だが

彼の腕は鉛のやうで、いつかな動かうとしなかつた。彼は痺れたやうな氣がし、血が、彼が床に寢て居る儘彼を高いところへ連れて行くやうに、血管中にどき〳〵して居るのゝ外何にも感じなかつた。誰かゞ彼に水を呉れた……とう〳〵彼は無意識に陷つた。

彼は朝の八時に眼を覺した。金色の日光は綠色の、古びた窓から束に成つて降り注ぎ、落ちついて、病人は手足がゆつくりした。彼は靜かで穩かで、限り無く幸福だつた。誰か自分の枕下へ來たやうな氣がした。彼は眼を覺して、心配さうに自分の廻りを探した。彼はその友を抱いて、生れて初めて、『今日は』と優しく挨拶したいものと切に願つた。

『まあ何て何時迄も寢ていらした事でせう！』とあの女の優しい聲がした。

オルヂノフはあたりを見廻した。とかの美しい主婦の顏が日光のやうに鮮かな親しい微笑を浮べて彼の上にのし掛つて居た。

『何て長い間わづらつていらした事でせう！』と彼女はいつた。『もう大丈夫です。御起きなさいまし、何だつて自分から奴隷に成つていらつしやるの、自由はパンよりもおいしく、日光よりも美しいわ。御起きなきいまし。』

オルヂノフは彼女の手を捉えて、熱心に握り締めた。何だか未だ夢を見て居るやうな氣がした。

『待つてらつしやい。御茶をこさへて上げましたから。御茶が欲しくありませんか。召し上るといゝのよ。體がよく成るから。私も病氣してたから、知つてゝよ。』

『えゝ、何か飲むものを下さい。』とオルヂノフは弱々しい聲でいつて立ち上つた。彼は未だ非常に弱つて居た。脊中がぞつと寒く成り、手や足が痛んで、こわれたやうな氣がした。だが彼の心には輝きがあつた。そして日の光は彼を一種莊嚴な、靜かな喜びで溫めて居るやうに思はれた。彼は自分に新しい、猛烈な、信ずる事の出來ないやうな生活が始まりつゝある氣がした。彼は頭が少し渦卷いて居た。

『あなたはワシリーとおつしやいましたね。』と彼女は尋ねた。『私の間違ひかも知れませんが、昨日主人があなたをさう御呼びしたやうに思ひますが。』

『さうです。そしてあなたは？』とオルヂノフは彼女に近寄り乍らいつたが、凡んど立つて居る事が出來なかつた。彼はよろ〳〵した。

彼女は彼の腕を捕へて笑つた。

『私カテリナと申します。』と彼女は大きな、はつきりした青い眼で彼の顏を見乍らいつた。二人は手を握り合つて居た。

『あなた、私に何かおつしやり度いことが御ありでせう。』と彼女はとう〳〵いつた。

『知りません。』とオルヂノフは答へたが、眼の前が暗く成つて來た。

『まあどうなすつたの？　ね、くよ〳〵なさいますな。この日の當るテーブルに腰掛けていらつしやい。溫和しくしてゝ、私に連いていらしちや厭ですよ。』と彼女は若者が彼女を引き留めやうとするやうな所作をするのを見て附け加へた。『又すぐ參りますから。いくらでも又御會ひ出來ますよ。』間もなく彼女は

御茶を持つて來てそれをテーブルの上に置き、彼の向ふつ側に座つた。
『さあ、召し上つて下さい。』と彼女はいつた。『頭痛がしますか？』
『いえもう頭痛はしません』と彼はいつた。『何だかよく分りません。或ひは未だ頭痛が殘つて居るかも知れません。……私は要りません、何にも……澤山です。澤山です！……私はどうしたのか自分乍らよく分りません。』と彼は息を切らし、とう〳〵彼女の手を見つけていつた。『こゝに居らして下さい。何處へも行つちやあ厭です。御手を貸して下さい……眼の前が眞暗です。私はあなたを太陽を見るやうに見て居ます。』と彼はそれ等の語をおのが胸から引きちぎるかのやうに語り乍ら無中で凡んど喪神するやうに成つていつた。涙で唇が詰りつゝあつた。
『御可哀さうに！　あなたは優しい人と暮したことが無いらしいのね。あなたは一人ぼつちでいらつしやるのね。御親戚はないのですか。』
『一人もありません。私は孤獨です……心配しないで下さい。何でもない事です！　大分よくなりました。すつかりよく成りました。』とオルヂノフは錯亂したやうに成つていつた。部屋がぐる〳〵廻りをして居るやうな氣がした。
『私ももう幾年となく身寄りのものに會つたことが無いのですよ。あなたは私の顏を何だか……』と彼女は暫らく默つて居てかういつた。
『あなたの顏を何ですか。』

『あなたは私の顏を、私の眼があなたを溫めて居るかなぞのやうに御覽に成つて居てよ！　ね、あなたがどなたかを御愛しに成る時……私一目見てからあなたが忘れられなく成りましたわ。あなたが御病氣の時には又看病して上げてよ。でも病氣に成つちやあ厭ですよ。きつとね。御病氣がよく御成りに成つたら私達は兄弟のやうに暮しませうよ。いゝでせう。神樣が下さらなければ、妹を拵へる事は難しい事でせう？』
『あなたはどなたです？　あなたは何處からいらしつたのです。』とオルヂノフは弱い聲でいつた。
『私はこの邊のものでなくつてよ。……十二人の兄弟が暗い森に住んで居たが、ある美しい娘がその森道に迷つたといふ話は御存知でせう。娘は兄弟のところへ行き、その家にあるいろんなものを兄弟の爲めにきつかりしてやり、いろんなものに自分の愛を殘しました。兄弟達は家へ歸つて來て、姉妹が今日自分達のところへ來たことを知りました。彼等は彼女を呼んだので、彼女は彼等のところへ出て行きました。彼等は皆彼女を姉妹と呼び、彼女に自由を許し、彼女は彼等と平等に成りました。あなたその御伽噺を御存じですか。』
『知つて居ます。』とオルヂノフは小聲でいつた。
『この世は樂しいわ。あなたこの世が樂しくつて？』
『樂しいとも。いつ迄も〳〵生きて居たいものだ。』とオルヂノフは答へた。
『私はよく分らないのよ。』とカテリナは夢見る如くいつた。『私死に度い氣もするのよ、この世は樂しい

でせうか？　愛すること、善い人達を愛すること、さうよ……まあ、あなた又小麥粉のやうに白く成つたことね。』

『えゝ、めまひがする……』

『待つてらつしやい。私寢卷と枕とを持つて來てこゝへ寢床を拵へて上げますから。御休みなさい。私の夢を見てね。快く成りますから。御婆さんも病氣よ。』

彼女はさういひ乍ら、寢床を拵へ出した、微笑を浮べて時々オルヂノフを打ち守り乍ら。

『まあ何て澤山本を持つていらつしやる事でせう！』と彼女は箱をどけ乍らいつた。

彼女は彼のところへ行き、その右手を取り、彼を寢床へ連れて行つて、さしこの薄圍でくるんでやつた。

『本を讀むと人間が駄目に成るといつてよ。』と彼女は考へ深さうに頭を打ち振り乍らいつた。『あなた本がお好き？』

『好きです。』とオルヂノフは答へたが、自分は寢て居るのか覺めて居るのか分らなかつた。カテリナの手をしかと握り締めて、俺は起きて居るぞと思つた。

『私の主人は澤山本を持つてゝよ。見て下さいな！　宗教上の書物だといふことよ。しよつ中讀んで聞かせて呉れてよ。私あとであなたに御見せしますから、主人が讀んでくれることの譯を聞かせて下さい。』

『で？』とオルヂノフはきつと彼女に眼を据え乍ら、小聲でいつた。

『あなた御祈りは御好きなの？』と彼女は暫らく默つて居てから彼にいつた。『ね、私はいつも心配で……』

彼女ははつきりいはなかつた。彼女は考へ込んで居る樣子だつた。とう〳〵オルヂノフは手を彼女の唇へ擧げた。

『何だつて私の手をキツスなさるの？』（さういつて彼女は頰を櫻色に染めた。）『さあキツスなさい。』と彼女は笑つて、兩手を差し出し乍らいつた。それから一方の手を引つ込めて、それを燃えるやうな額に當てた。それから髪を撫で、つくろひ出した。彼女は一層赤く成つた。遂には寢床の側の床に座つておのが頰を彼女の頰に押し當てた。彼女の溫かい、うるほひのある吐息は彼の顏を擽つた……とう〳〵オルヂノフは錆けた鉛のやうな熱い涙が頰を傳ふのを覺えた。彼は段々體が參つて來て、手を動かすことも出來なく成つた。その時戸をたゝく音が聞え、續いて棧の軋む音が聞えた。オルヂノフは老人が仕切りの向ふつ側から入つて來る物音を聞くことが出來た。それから彼はカテリナが慌てず、物音に耳を傾けもしずに起ち上つて自分の書物を手にする物音を聞いた。彼は彼女が去り際に自分の體の上で十字を切つて呉れるのを感じた。彼は眼をつぶつた。突然長い燃えるやうな接吻が彼の熱のある唇を焦した。ナイフを胸に突き刺されたやうな氣がした。彼は微かな叫びを擧げて無意識狀態に陷つた……それから不思議な生活が彼に始つた。

心がはつきりしない時は不思議なむだな興奮、苦闘、苦痛に充ちた長い、果しなき夢の内に暮すこと

を宣告せられて居るのだといつたやうな考へが彼に閃いた。怖く成つて彼は自分の心にのしかゝつて居る不幸な宿命論に抵抗して見たが、緊張した、必至の爭鬪の最中に又もやある不思議な力が彼を打んなぐり、彼は自分が又もや記憶を失ひつゝあること、眼前に通る事の出來ない底知れぬ深淵が口を開けて居ること、苦痛と絶望と悲鳴を擧げてわれと自分の體をその中に投げ込みつゝあることをはつきりと感じた。又彼は體中に生活力が痙攣的に勢を加へ、過去が明るく輝き、現在にうれしき瞬間が凱歌を奏して反響し、眼が覺めて居乍ら遙か彼方の未來を夢想する時、語にいひ盡されぬ希望が命を與へる露を含んで靈の上に下る時、體はさ許り多くの印象を脊負ふには餘りに弱く、命の糸が切れつゝあるとを感じはすれど同時に自分の全生活を希望と新しい氣持ちで迎へる時――さういふ時には堪へる事の出來ぬ、『破壞的』な幸福を味ふのであつた。時々彼は昏睡狀態に陷ることがあつた。さうすると、この二三日中にあつたことが繰返され、こわれた、ぼやりした姿の集りをなして彼の心をよぎつたがそのまぼろしは不思議な、謎見たいな形で訪れるのであつた。時には又病人はこれ迄あつたことを忘却し、元の主婦の居る元の宿に居ないことを不思議がりもした。彼は老婆が部屋の暗い隅に時々微かなゆさぶれる光を漲らすストーヴのところへ、しよつ中獨語をいひ、時々彼卽ち、彼女が餘り長い間本を見て居るので氣違ひに成つたと思つた變な下宿人を見乍ら、火の消える前に燃え殘りでふるへる、骨張つた手を溫める爲めに黄昏時によくやつて來たやうに何故やつて來ないのか分らなかつた。

又彼は外の宿へ引つ越したことを思ひ出すこともあつた。だがどんな風にして引き移つたのか、自分

は一體どうしたのか、何だつて引つ越さなければならなかつたは分らなかつた。そのくせ彼の靈全體はのべつの、制し切れぬあくがれで氣絶する許りではあつたが……だがどう成り行くことか、何が彼を導びき苦めて居るか、彼を窒息させ、彼の血を燃し盡したこの恐る可き火ば誰が點じたのか、これ又彼の知らず、彼の思ひ出す能はぬ事だつた。屢々彼は一心に或る影を捉えやうとし、屢々彼は枕邊に輕い足音、音樂の如く快き、優しく、はぐゝむやうなさゝやきを耳にした。誰かのうるほひのある、揃はない吐息が彼の顏を撫で、體中を愛を以てぞく〳〵さへ、熱い涙が彼の熱ある頰にしたゝり、突然しつこい、優しい口つけが彼の唇に拵された。とそれから、彼の生活は消すことの出來ない苦痛の内にしほれ、彼の周圍の生活、世界はぢつと立ち止つて居るやうに思へ、何年も前から死んで居るやうに思へ、萬物が千年の長い夜に包まれて居るやうに思へた……

さうすると幼時の優しい、穩かに流れ行きし幾年が、又もや朗かな喜び、消し難き幸福、人生最初の樂しき驚き、陽氣な精靈の群を伴つて歸つて來るやうに思へた。彼等は彼が摘む花毎にその下に羽ばたきし、アカシヤの間の小家の前の繁茂せる綠の草地で彼とたはむれ、波がぴしや〳〵といふ音を聞き乍ら何時間も〳〵その側らに座つて居たことのある洪大な水晶の如き湖水から彼に打ち微笑み、長い平和の夜に彼の母が彼の上に身をかゞめ十字を切り、彼にキツスし、樂しい子守唄を歌ふとき、好意を以て彼の小さな小屋の上に色鮮かな虹の夢を撒き散らし乍ら彼のまわりを翼をさら〳〵いはせて歩き廻つて居るのであつた、だがその時突然或るものが姿を現はし、子供らしい恐怖で彼を壓へ、彼の生活に初めて

悲しみと涙の廻りの緩かな毒をもたらし、おぼろげに彼は或る未知の老人が彼の未來全體をとりこにして居ることを感じ、打ふるへ乍ら彼は老人から眼を離すことが出來なかつた。そのいけない老人は凡んど何處へも追いて來た。彼はひよつくり現はれ、柴林のいろんな灌木の下から欺いて子供にうなづき、彼を嘲弄し、意地惡な惡情のやうに彼の手の中でしかめ面したり笑つたりする人形と成つて現はれ、子供の殘忍な學校友達を皆な彼に反逆させ、或ひは學校の腰掛けに小さい連中と一緒に腰掛けて居て、彼の文法の本のあらゆる字からしかめ面してひよつこり顏を出すのであつた。それから又彼が寢て居る時にはかの惡老人は彼の枕下に座つて居た。……彼は金やサフアイヤの翼が彼の小屋のあたりにさら〳〵音立てゝ居た陽氣な精靈を追つ拂ひ、彼のあれな母親を永久に彼から連れ去り、彼の子供らしい想像には何の事か分らないが、恐れと子供らしからぬ感情で彼をぞく〳〵させ、さいなめる、長い、不思議な御伽噺を毎夜彼にさゝやき出した。だがいけない老人は彼のすゝり泣きや依賴にも注意しず、話を續けるので彼は無感覺に成り、無意識に陷るのであつた。それから子供のオルヂノフは突然大人のオルヂノフを眼覺し、數年が見えない內、氣が附かない內に過ぎ去つていつたのだ。彼は突然自分の眞の境遇を知つた。彼は突然自分が孤獨なる事、世間全體に對して緣無きものなる事、人の家の片隅にたつた一人で居て、變な胡散臭い連中に取り圍まれのべつに集つて來て彼の暗い部屋の彼方此方の隅でさゝやき、火の近くにしやがんで骨張つた手をあぶり、彼を指して居る老婆にうなづいて居る敵に取り圍まれて居ることを知つた。彼は困却し不安に成つた。彼はこれ等の人々が誰であるか、何故彼等がこゝに居るか、何

故彼自身この部屋に居るかそれを知り度く思ひ、借家人は誰か如何なる人か、自分の大家は誰かといふ事も知らずに或る力ないけれども譯の分らぬ力に引つ張られて曲者の居る暗い洞穴に迷ひ込んだのと推測した。彼は不審な思ひに苦しめられ出した——すると突然夜の靜かさの內に又もや長い、さゝやくやうな話が始まり、或る老婆が消え掛つて居る火の前で、白い、雜色の頭を悲し氣に動かし乍ら靜かに凡んど自分にも聞き取れないやうな聲でそれをさゝやいて居た。だが——又もや彼は恐怖に支配された——その物語は彼の前に形を取り、顏を拵へて立ち現れた。彼は逆上つてはぼんやりした子供らしい幻に至る迄あらゆるものを見た。彼のあらゆる考へ、あらゆる夢、この世のあらゆる經驗、本で讀んだもの、ずつと前に忘れてとつたもの、あらゆるものが生返り、あらゆるものが一緒に成り、姿を現して、彼の前に巨大な形を作して立ち現はれ、彼の周圍に動き集つた。彼はおのが前に立派な、素敵な庭が擴がるを見、彼の眼前に町が出來、それが又こわれ、墓地が死人を吐き出して、死人は生き返り出した。種族や人民が彼の眼の前で生じ又消失した。しまひには彼のあらゆる考へ、あらゆる非物質的な空想が今や彼の病床の廻りに形を現じ、凡んどその考へが浮ぶと同時に形を現した。遂に彼は自分が非實體的の觀念を考へて居るのではなく、全世界、全創造物の內あり、遁れ場のないこの無限の不思議な世界の內に原子の如く運び行かるゝを見、この全生活は反抗し獨立して永遠の無限の嘲弄で彼を壓倒し、苦しめ追つ掛けつゝあつた。彼は自分が死に掛つて居り永久にとけて塵や灰に變りつゝあり、而かも復活する希望すらないことを感じた。彼は逃げやうとしたが全宇宙に彼をかくまつてくれる片隅だにも無かつた。とうと

う絶望し切つて彼は大變な努力をして叫び聲を擧げて眼を覺した。

彼は眼を覺したが冷たい氷のやうな汗に濡れて居た。周圍には死の如き沈默があつた眞夜中だつたから。だが依然として彼には何處かで不思議な御伽噺が續いて居り、實際しやがれ聲が彼のよく知つて居る何事かに關する長い物語を語つて居るやうに思へた。彼は暗い森、大膽な山賊、勇敢な壯士・凡らくはステンカ・ラジン（譯者、註カテリナ大帝の治世中コサック兵の叛亂の首領）のこと、愉快さうな醉つ拂ひの船頭、美しい乙女、母なるヴォルガ――それ等の話を聞いた。それは御伽噺では無かつたか。彼は實際それを聞いて居たのか。丸一時間といふもの彼は眼を明いたまゝ、身動ぎもしず、苦しい、然し無感覺の內に横に成つて居た。遂に彼は氣を附けて起き上り、重い病氣の後に自分の力が立ち歸つたことを喜び感じた。錯亂は終り、現實が始まらうとして居た。彼はカテリナと話をして居た時と同じ着物を着て居た事に氣が附いた。だから彼女が彼のところを離れた朝から幾らも經つて居ないに違ひなかつた。決心の火が彼の血管中を走つた。自分の寢床がその近くに置いてある仕切りのてつぺんに何の必要があつてか打ち込んである大きな釘を無意識的に探り、それをとらへて體の重みをそれに托し、凡んど認め難い程の光が彼の部屋に忍び込んで居る隙間迄巧く體を持ち上げた。彼は眼をその穴に當てがひ、興奮で凡んど息切れしてのぞき出した。

老人の部屋の隅には寢床があり、その前には切れが掛り、舊式の綴方から判じると宗教上の書物らしき本の積み重ねてあるテーブルがあつた。片隅には彼の部屋にあるのと同じ舊式のイーコンがあり、ラ

ンプがその前に點つて居た。寢床にはミューリンが病み、苦痛で疲れ果て、紙のやうに眞青に成り、毛皮の膝掛に蔽はれて臥つて居た。膝の上には一冊の本が開いてあつた。寢床のそばの腰掛にはカテリノが横たはり、かひなを老人の胸のあたりに置き、頭を彼の肩の上にかしげて居た。彼女は注意深い、子供の樣に驚いた眼で彼を眺め、期待で息切れし、ミューリンが彼女に語つて居る事を飽く事を知らぬ好奇心で聞いて居る樣子だつた。時々語手の聲は高く成り、彼の蒼白い顏は生き〳〵して來た。彼が顏を曇らし、眼が輝き出すとカテリナは恐怖と期待とで眞つ青に成るやうに思へた。それから微笑の如きものが老人の顏に現れるとカテリナは優しく笑ひ出すのであつた。涙が彼女の眼に現れる事もあつた。さうすると老人は優しく子供見たいに彼女の頭を撫で、彼女は雪のやうに輝くむき出しのかひなで一層しつかり彼を抱擁し、更にいとひほし氣に彼の胸に擦り寄るのであつた。

オルヂノフは今猶これを自分の夢の一部分と考へることもあつた。彼は實際それを信じた。だが血が彼の頭に上り、こめかみの血管は苦しく動悸した。彼は釘を離し、床を離れ、よろめき乍らおのが血の內に燃え立つた衝動を理解せず氣違ひのやうに歩つて戸のところへ行き烈しく押した。錆びた鐵棧は矢庭に開いて、彼はすさまじい音を立てゝ老人の寢室の眞中に飛び込んだ。彼はカテリナがびくりとしてふるへ、老人の眼が低く成り行く額越しに怒りを含んで輝くのを見た。老人の顏全體が突然の怒りで變てこに成つた。彼は老人が依然として彼を見張り、急いで壁に懸つて居る鐵砲を手探りするのを見た。それから彼は怒りでふるへる覺束ない手で眞すぐに彼の胸に向けられたる銃身のきらりと輝やくのを見

た。……どんと發射の音がしたが次に荒々しい、凡んど人の聲とは思はれない叫び聲が聞え、烟が散ると、恐る可き光景がオルヂノフの眼にぶつかつた。全身ぶる〳〵もので彼は老人の上に身をかゞめた。ミューリンは床の上に横はり、痙攣でもがき、その顏は苦悶の爲めにねぢれ、動いて居る唇には泡が出て居た。オルヂノフはこの不幸な男がひどい癲癇に襲れたのだと思つた。彼はカテリナと彼を助けに飛びついた……。

三

夜つぴてい落ちつかなかつた。あくる日オルヂノフは弱つて居り、今猶熱が去り切らなかつたけれども早朝に外出した。庭で彼は又もや門番に出くわした。今日は粗韃人は遠くから彼に向つて帽子を擧げめづらしさうに彼を見た。それから氣を落ちつけやうとするもの〻如くオルヂノフがゆつくり彼に近附いて來るのを訝しさうに眺め乍ら箒で仕事を始めた。

『昨夜何にも物音に氣がつかなかつたかい。』とオルヂノフが尋ねた。

『氣が附きました。』

『あれは一體どういふ人かね。あれは何といふのだね。』

『自分が部屋を借りたのだ。あなたが御存知の筈だ。私は赤の他人でさあ。』

『君は私と話をして呉れる積りかね。』とオルヂノフは病的にいら〳〵し、われを忘れて大聲を擧げた。

『わしが何をしましたかね。あなたが惡いのです——あなたの御蔭で皆な驚きましたぜ。下に棺屋が住んで居ますが、奴はつんぼですが、それで居てすつかり聞きました。奴の女房もつんぼですが、女房も聞きました。すつと向ふの隣りの庭でも皆なが聞きました。私は監督のところへ行きます。』

『僕も行くのだ。』とオルヂノフは答へて、門へ行つた。

『御好きなやうになさるがいゝ。自分が部屋を借りたのだから……旦那、旦那、御待ちなさい。』

オルヂノフは振り返つた。門番は挨拶の爲めに自分の帽子に觸つた。

『何かね！』

『あなたが監督のところへいらつしやるなら、私は老人のところへ行きます。』

『何だつて。』

『引つ越した方がようございますよ。』

『御前は馬鹿だ。』とオルヂノフはいつて、又歩き續けやうとした。

『旦那、旦那、御待ちなさい。』門番は又も手を帽子に觸れてにやりと笑つた。『御聞きなさい、旦那、怒つちや厭ですよ。何だつて可哀さうなものをいぢめるのです。可哀さらなものをいぢめるのは罪ですよ。それは神樣の掟ではありません——分りましたか。』

『君も聞き給へ。さあ、それを御取り。ね、あれや一體どういふ人間かね。』

『あれがどういふ人間だつて？』
『さうだ。』
『御金を下さらなくつたつて御話しますよ。』
かういつて門番は箒を取り上げ、一二度振り廻してから止めて勿體振つてオルヂノフの顔をじつと見た。
『あなたはいゝ方です。若しあなたがいゝ人間と一緒に住んで居たくないといふのなら御好きなやうになさるがいゝ。これが私が申し上げたいことなのです。』
さういつて粗韃人は一層意味あり氣に彼を見て、又亂暴に掃除を始めた。
とう〳〵何事かをしてのけたといふ見えをして彼は變な風にオルヂノフに近附き大層意味あり氣げ風をして、
『かういつた譯で。』といつた。
『何だつて？』
『變なのです。』
『何だつて？』
『流れつちやつたんです。さうです！　流れつちやつたのです！』と彼は更に變な調子で繰り返した。
『あれは病氣です。大將は舟を持つて居ました。大きなのをね。二つも三つも。ヴオルガ河に居たもので

す。私もヴオルガ河から來たのですよ。大將は工場も持つて居ましたが燒けて了ひました。それで氣が觸れたのです。』
『氣違ひか？』
『飛んでもないこと！……』と粗韃人は大袈裟に答へた。『大將は何でも知つて居ます。澤山の本を讀みました。そりやあ澤山の本をね。大將は何でも讀んで居ます。そして外のものに眞理を語つて聞かせます。二留持つて來るのもあれば三留持つて來るのもあり、四十留持つて來るものもある。さうすると大將は本を見て、眞理をすつかり語つて聞かせます。そしてすぐにテーブルの上に御金を置くのです——御金を出さなければ見て呉れないのです。』
かういつて粗韃人はミューリンの事に大の熱心で沒頭して、心から愉快に笑つた。
『ぢや何かい。大將は運命を告げる、つまり豫言をするのかい。』
『ふむ！……』と門番は急速に頭を振つてつぶやいた。『大將は眞理を語るのですよ。大將は御祈りをするのですよ。そりやあうんとね。さういふ風にすると、あれが——何といつていゝか——あれが大將に現れるのですよ。』
さういつて粗韃人は又もや意味あり氣な所作をした。
その時誰かゞ門番を外の庭から呼んだ。そして小さな、腰の曲つた、灰色の頭をした、羊の皮を纏つた男が現れた。彼はつまづき乍ら、地べたを見て、うめいたり、小さい聲で獨言をいつたりし乍ら歩つ

て來た。彼は老いぼれて了つて居るやうに見えた。

『旦那、旦那！』と門番はオルヂノフにそゝくさと會釋し、まご〳〵して小聲でいつた。そして帽子を脱いで、かの老人に會ひに行つた。老人の顏はオルヂノフに取つて見覺えがあるやうに思はれた。何しろ彼は何處かでつい近頃彼に會つたことがあつたのだ。

だが何も異つた事がないと思つて彼は庭を出た。門番は彼には頭からつま先まで惡者ですう〳〵しい奴に思へた。

『あの大惡者め、人を馬鹿にしやがつた！』と彼は思つた。『何の事だか分りやあしない！』

彼はかういひ乍ら町へついた。

段々彼は外の考へにひたり出した。印象は不愉快、その日は灰色で寒く、雪片が舞つて居た。又もや若者は熱病の身震ひに襲はれたのを感じ、それに彼は足下の地べたが震へつゝあるやうな氣がした。突然不愉快なくせに又快き、聞き覺えのある聲が調子の揃はぬテノールで彼に挨拶した。

『ヤロスラフ・イリイッチ。』とオルヂノフはいつた。

彼の前に背の低い、がつしりした、頰べたの赤い、一見三十前後と覺しき、灰色の眼をした男が輕微笑を湛へて立ち、着物はといへば……ヤロスラフ・イリイッチがいつもして居るなりをして居た。彼はひどく親し氣に彼に手を差し出して居る。オルヂノフはヤロスラフ・イリイッチと丁度一年前に、全たく偶然な機會に、凡んど町中で知り合ひに成つた。二人は何の事なしに知り合ひに成つたがそれとい

ふのも一つは機會の所爲、今一つはヤロスラフ・イリイッチが何處でゞも善良な、生立の好い人々を拾ひ集めることに掛けての異常な性質と、才能と振舞ひの優美さが彼等を少なくとも上流に屬するものたらしめる立派な教育のある友達を好むことゝにあつた、ヤロスラフ・イリイッチは極めて氣持ちのいゝテノールを持つて居たが、それで居て極く親しい友達と話をする時にも彼の音調には並外れてはつきりした、力强い、壓倒的なところがあり、それは如何なる言譯をも許さないやうに思へたが、これは恐らくは單に習慣から來たものだらう。

『一體全體……』とヤロスラフ・イリイッチは世にも眞面目な、夢中な喜びの表情をして叫んだ。

『私は此方に住んで居ます。』

『ずつと此方に御住ひでしたか。』とヤロスラフ・イリイッチは段々高い調子で續けた。『それを私が知らなかつたなんて！ 私達は御隣り同志ぢやありませんか！ 私は今この近くに居ます。私は一月前にリヤザシ州から歸りました。まあ君をとつつかましちやつたね！』さういつてヤロスラフ・イリイッチは至極人の好さゝうな笑ひ方をした。『セルゲイエフー』と彼は印象的な聲で叫んだ。『クラソフのところで待つて御出で。俺の居ないところで袋に觸らせちやあいけないよ。そしてオルスフェーブのところの門番を起してすぐに事務所へ來るやうにいつて呉れ。一時間の内には俺も行くから。』

そゝくさと誰かにこの命令を與へてから、洗練されたヤロスラフ・イリイッチはオルヂノフのかひなを取つて彼を近くの料理屋へ連れて行つた。

『あんなに長く會はなかつたのだもの、二言三言話さないでは氣が濟まない。ね、どうして居ます？』
と彼は變てこに體を低め、凡んど恭々し氣にいつた。『いつものやうに御勉強ですか。』
『えゝ相變らず。』とオルヂノフはある陽氣な考へにおとなはれて居ながら答へた。
『いや、結構な事だ！』かういつてヤロスラフ・イリイッチは熱心にオルヂノフの手を握つた。『君は社會の一つの名譽に成るだらうよ。君の生活に好運が授かる事を祈るよ……君に會ふことが出來て本當に好かつた！　何て屢僕は君のことを思つたことだらう。何て屢僕は『彼は何處に居るのか。私達の善良な氣高い、面白いワシリー・ミハリッチは。』といつたことだらう。』
二人は特別の部屋に入つた。ヤロスラフ・イリイッチは小びるを誂らへ、ウオッカを頼み、そしてオルヂノフを優し氣に眺めた。
『この前會つたときからうんと本を讀んだ。』と彼はおづ〳〵した、少し猫撫聲で語り始めた。『僕はプーシュキンのものをすつかり讀んで……』
オルヂノフはぼんやりした目付きで彼を見た。
『人間の情熱を驚ろく可き程理解して居るね。だが何よりも君に御禮をいはなくちゃならない。君は氣高くも正しい考へ方を知らず〳〵の内に注入して呉れて僕に大したことをして呉れたよ。』
『なあに僕は……』
『いや、まあ僕のいふ事を聞いて呉れ給へ。平素から僕は尊敬するが當然なところで尊敬を拂ふ事が好

きだ。そして僕は少なくともこの感情が現はれたことを誇りとするよ。』
『實際君は自分自身に對して不公平だよ、僕は實際……』
『いや僕は實に公平だよ。』とヤロスラフ・イリイッチは異常に熱心を以て答へた。『僕か君と何んで比較に成らう。』
『いやどうも。』
『本當だよ……』
次に沈默が來た。
『君の忠告に從つて僕は下らない連中と交際を絶つて幾分か自分の行儀のがさつなところを改めたぜ。』とヤロスラフ・イリイッチは何だかおづ〳〵した猫撫聲で又も語り始めた。『仕事が無い時は大部分家で座つて暮し、夜は何か爲めに成る本を讀むのだ……ワシリイ・ミハリッチ、僕には只一つの願望があるのだ。といふのはわが祖國に對して少しでも御役に立ち度いといふね……』
『僕はいつも君を實に立派な人間と思つて居たよ。』
『君はいつも僕の心に慰安を與へて呉れるよ……』
ヤロスラフ・イリイッチはオルヂノフの手を熱心に握り締めた。
『君は何も飲まないのね。』と彼はいつたが、彼の熱狂は少し靜まつた。
『飲めないのだ。病氣だから。』

『病氣だつて？　ふん、本當かね。何時から――何處が惡いのだね。何なら、僕が……どういふ醫者にかゝつて居るのかね。何なら僕が教區の醫者に話して見やう。僕が一つ寄つて見やう。先生は非常に巧いのだから。』

ヤロスラフ・イリイツチは既に帽子を取らうとして居た。

『どうもありがたう。僕は見て貰ひ度くないのだから。僕は醫者は好きぢやないから。』

『何だつて？そんな調子で立て通せるものぢやあないよ。だがその醫者といふのは實に巧いものだぜ。』

とヤロスラフ・イリツイチは哀願するやうに語り續けた。『いつかも――まあ僕の話を聞いて呉れ給へ――いつかも貧乏な大工がやつて來たのだ。『道具で手を傷して了ひました。どうか一つ御診察を……』といふのだ。セーミョン・パフニューチッチはその可哀さうな奴がゑそに成りさうなのを見て、傷した手の切斷に掛つたが、私の見てる前でやつたが、そのやり方がそりやあ……つまり、非常に鮮やかなので、惱める人類に對する同情さへなかつたら、全くどうもめづかしいから、見てるのが樂しみだつた位だよ、だが何處でどうして君は病氣に成つたのかね。』

『引つ越しをしたからさ……私は未だ起きた許つかしなのだ。』

『だが君は未だ非常にいけないよ。外へ出ちやあいけないのだ。ちや君はもと居たところには居ないのだね。だが何だつて引つ越したの。』

『お上がペテルスブルクに居なく成るといふので。』

『ドムナ・サヴイシュナが？　本當かね？　實に立派な、氣立の好い女だつたぜ！　君は知つてるかね。僕は凡んど息子の有する尊敬を彼女に對して抱いて居たぜ。もう最後の近いあの生命には僕等の先祖の穩かな威嚴見たいなものがあつたよ。あの女を見ると、僕等の頭の白い、いかめしい古い傳說の權化を見るやうな氣がしたよ……私のいふのは……かう非常に詩的なところがあつたよ！』とヤロスラフ・イリイツチは羞恥を感じ、耳朶迄赤くして語を結んだ。

『さうだ。いゝ女だつたよ。』

『だが一體君は今何處に落ちついて居るのだい。』

『こゝからそんなに遠くないよ。コシュマロフのビルデングの中さ。』

『僕は大將を知つて居るよ、立派な老人だよ！　僕は凡んど彼の親だといつてい〻位だ。立派な古强者だ？』

ヤロスラフ・イリイツチの唇は熱狂で打ち震へた。彼はウオツカをもう一杯とそれにパイプを持つて來いといつた。

『君はちやんと部屋を借りたのかい。』

『いや造作附きの部屋を間借りしたのだ。』

『誰の部屋の間を借りたのだね。その貸した男のことも僕は知つて居るかも知れない。』

『ミューリンといつて工藝家さ。背の高い老人で……』

『ミューリンと――ふん、裏庭の、棺作りの上だね？』
『さう〳〵、裏庭だ。』
『ふむ！　どうだい。いゝところかね。』
『あゝ。未だ越した許つかりなのだ。』
『ふむ！……私が言度いのは只、ふむ！……何も變つたことに氣が附かなかつたね。』
『實際……』
『いや……君があそこが氣に入つたのなら、あそこに居たらいゝと思ふよ……僕は何も……たゞ僕は、君に注意して置き度いのだが……だが君の性格を知つて居ると……あの老工藝家の印象はどうだつたかね。』
『大將はすつかり病人のやうだが。』
『あゝ奴は非常に苦しんで居るのだ……だが君は何も氣が附かなかつたかね。大將と話をしたことはないのかね。』
『あまり話したことはないよ。大將は厭にむつとしてゝ人づきが惡いのだから。』
『ふむ！……』とヤロスラフ・イリイツチは考へ込んだ。『奴は不仕合せな男だ。』と彼は夢見る如くにいつた。
『奴が？』

『あゝ不仕合せだよ。だがそれと一緒に恐ろしく變な、面白い男だよ。だが、君が別に奴に煩はされないのなら……いや失敬、こんな話許りして居て。だが僕は變に……』
『いや僕も好奇心が起きたよ……一體奴はどんな男かね。それに僕は大將と一緒に住んで居るのだから……』
『彼奴はもと非常な金持ちだつたつていふ事ぢやないか。多分君も聞き込んだことだらうが、奴はあきないをして居たのだ。だがいろんな不仕合せないきさつから貧乏に成つちやつたのだ。大將の船は幾艘もあらしでこわれて、荷船諸共なくなつて了つたのだ。工場も、近親が管理して居たのだと思ふが、同じく不運で燒失して了つて、その身寄りのものはその火事で燒け死んで了つたのだ。非常な損害に違ひないぜ！　それからといふものミューリンは泣きの涙でふさぎ込んで居るてゝ事だ。氣違ひになりあしないかと皆なは心配を始めたんだが、ある商人でこれもヴォルガ河を通る船の持主と喧嘩をした時なんぞ突然變な、思ひも掛けないやうな仕草をして、その事件は大將が正眞正銘の氣違ひだといふ想像を許さなければ說明が附かないのだ。どうも僕も氣違ひだと思ふよ。彼の變てこな習慣に就いては二つ三つ悉しい事を聞いた事があるが、とう〳〵突然に怒り狂ふ運命の意地惡な仕草としか思はれない實に變な、何といつていゝか見遁しに出來ない事件が生じたのだ。』
『一體どんな事？』とオルヂノフは尋ねた。
『狂氣の發作に襲はれて、前から非常に氣に入りの若い商人を殺さうとしたつていふ事だ。發作が治る

と非常に顚倒して了つてすんでの事に自殺しやうとしたのだ。少なくとも世間ぢやあそういつて居るよ。それからどうなつたか知らないが、何年も罪滅しの難行苦行をして居るのだつてことは知つて居る……だがどうしたつてえの。下手な話で厭に成つたのかね。』

『いや何、決して……君の話ぢやあ罪滅しをやつて居るとの事だが、大將は一人ぢやないぜ。』

『さうかね？　大將は一人だつて事だつたが。何しろ、それには、誰も掛り合ひは無かつたのだ。だが僕はその後は知らないのだ。僕が知つてるのは只……』

『何？』

『僕が知つて居るのは只――いや、何ももう別段これ以上御話することはないのだが……僕がいひ度いのは只、若しも君が何か變なことを、又は彼に普通のものと異つたことがあつたらそれは只次から次へと彼の身に振りかゝた不仕合せの所爲に過ぎないつてことだ……』

『あゝ奴はとても信心家振つてやがるからな。』

『僕はさうは思はないよ。奴は非常に苦んだから、奴は實際誠實な男だと思ふよ。』

『だが今は奴は勿論氣が違つてはしないよ。奴は確かだよ。』

『そりやあ勿論だ。それは保證出來る。誓つたつていゝ。大將はまんみの人間だ。只君が間違ひなく觀察した通り、奴は此上なく變てこで信仰家なのだ。實際奴は實に理の分つた男だよ。奴はてきぱきと、憶せずに、それや巧く話をするよ。過去の多事な生活のあとが今も顏に殘つて居るよ。變な男だが、本

は實によく讀んで居るよ。』

『しよつ中、宗教上の書物を讀んで居るやうだが。』

『あゝ奴は神秘家なのだ。』

『何だつて？』

『神秘家だ。だがそれは內所だぜ。これも內所だが一時は彼を嚴重に監視して居たものさ。あの男は彼奴のところへよく行くものに大變な影響を與へたものだ。』

『どんな影響を？』

『だが君は信じはすまい。ね、昔は奴この建物に住んではゐなかつた。アレキサンドル・イグナシエーヴイツチといふ尊敬す可き市民で身分のある男で、一般の尊敬を受けて居るものが中尉と一緒に好奇心から彼に會ひに來た。二人がやつて來て通されると、奴はしげ〳〵二人の顏を伺ひ出す。奴は普通よろしい、御用を勸めませうといふ氣に成ればその人の顏をしげ〳〵見守るが、でないと追つ拂つちまふ。而かもその追つ拂ひ方が至極亂暴だてえ事だ。奴め二人に『何御用で御座いませう』て尋ねるのだ。『いや、私達が申し上げずとも、御考へ下さつたらあなたには御分りで御座いませう。』とアレキサンドル・イグエーヴイツチが答へる。『私と一緒に向ふの部屋へ御出で下さい。』それから奴二人內誰が自分の盡力を必要として居るかを告げた。アレキサンドル・イグナシエーヴイツチはそれから後の事は話さなかつたが、紙のやうに眞つ白になつて奴のところから出て來た。さういふ事が身分の高い有名な婦人にも

あつた。その女も彼に會つて紙のやうに眞白になり、涙に濡れ、彼の豫言彼の語に壓倒せられて出て來た。」

『變だな、だが奴今でもそんな事をして居るかね。』

『嚴重に禁止されて居るよ。驚く可き事があつたよ。ある若い騎兵の旗手が、有名な家庭の希望でもあり喜びでもあるのが奴を嘲弄したのだ。『何を笑つて居るのです。』と老人が怒つていつた。『三日間の內に御前はかうなるぞ！』といつて奴死體の形に兩腕を胸の上に組み合したのだ。』

『で？』

『僕はそれを信じやうとは思はないが、奴の豫言が事實と成つて現れたと云ふ事だ。奴にはある天賦があるぞ、君……君は僕の無邪氣な話を聞いて笑ひ度いだらう。僕は教養といふ點に掛けては君の方がずつと先生だと云ふ事は知つて居るが、儀は奴を信じて居る。奴は山師ぢやあない。プーシュキンも作品の中に同じやうな出來事の事を述べて居る。』

『ふむ！　僕は君のいふことに反對しやうとは思はない。奴は一人で暮して居るのぢやあないと君がいつたと思ふが。』

『よくは知らないが……娘が一緒に暮して居ると思ふが。』

『娘だつて！』

『あゝ、或ひは細君かも知れない。女が大將と一緒に居るてえ事は知つて居る。女をちらと見た事はあ

るが、よくは見なかつた。』

『ふむ！　變だね……』

若者は思案を始め、ヤロスラフ・イリイツリチは彼の事を優しく考へ出した。彼は昔の友達に會つたこと、彼に非常に面白い事を心行く許り話した事、その兩方で感動して居た。彼はワシリー・ミハリツチに眼を据へ、煙草をくすらして居たが、突然あたふたして飛び上つた。

『もう丸一時間に成るね、時間を忘れつちやつてた！　いやワシリー・ミハリツチ、更めて僕は二人が一緒に成る事が出來た好機會に感謝するが、もう僕は立ち去らなくちやあならない。君の書齋を訪問してもいゝのかね。』

『どうぞ・是非。その內僕も出掛けるよ。』

『そいつはうれし過ぎて凡んど信じられないね。あり難いね。實に！　僕がどんなにうれしいか君には信じられぬ位だ！』

二人は料理屋を出た。セルゲエフは既に宙を飛んで彼等に會ひに來て、口早にウイリアム・エメリアウイツチがもう出掛けたがつて居ると報せた。實際いきな、輕快な二輪馬車の疳の强い、二頭の蘆毛の馬が現れた。馬具を附けた馬は殊に立派だつた。ヤロスラフ・イリイツチは大仲好しの友達の手を握り締め、帽子に觸つて、飛び行く馬車を迎へに赴いた、途中彼はオルヂノフの方に別れを告げる爲めに一二度振り返つて頭を下げた。

オルヂノフはひどく疲れ、手足がひどく參つたので、凡んど足を動かす事が出來なかつた。這ふやうにして家へ歸つた。門のところで又も門番に出會したが、門番は側目も觸らずに彼とヤロスラフ・イリイッチとの別れを見守り、遠方から彼に頭を下げて居た。だが若者は默つて彼のそばを通り過ぎた。家の戸のところで彼はミューリンの部屋から地べたを眺め乍ら出て來る灰色の頭の男にいやといふ程ぶつかつた。

『主よわが罪を許し給へ！』その男はコルクの如く身も輕やかに飛び違つて、さう小聲でいつた。

『御怪我はありませんでしたか。』

『いや、御挨拶で痛み入ります……あゝ主よ、主よ！』

その柔和な小さな男はうめいたり、何かあり難い事を一人でつぶやき乍ら、氣を配つて階段を下りた。これはこの家の『旦那』で門番がひどく恐れ、敬つて居たものだつた。その時初めてオルヂノフは引つ越しの時ミューリンのところで初めて會つたことを思ひ出した。

彼は頭が變に成り、混亂した。彼は想像と感受性とが極度迄緊張したことを知り、われと自分を信用しないことに心をきめた。段々彼は一種の無感覺に陷つた。重苦しい抑へつけるやうな感じが彼の胸にのしかゝつた。彼の心は一抔痛いところだらけのやうに痛み、彼の心はだんまりの、慰めなき涙に充ちて居た。

又もや彼は彼女が拵へた寢床に倒れて耳を澄した。彼は二つの吐息を耳にした。一つは病人の重苦し

いきれ〳〵の吐息、今一つは靜かではあるが不規則な、宛かもその胸が同じあこがれ、情熱を鼓して居るが如き吐息だつた。時々彼は彼女の衣擦れの音や靜かな、輕やかな足音を聞いた。そしてそのかすかな足音迄も彼の胸のぼんやりとはして居れどいと苦しき、されど又心地よき痛みとを反響した。遂には彼はすゝり泣きや制し難き溜息、更に又祈りの聲を聞き分けることが出來るやうな氣がした。彼は彼女が絶望の極手を揉み絞り乍らイーコンの前に跪いて居るのを知つた！……彼女は誰であつたか。誰の爲めに祈つて居たのだらうか。如何なる絶望的の情熱に依つて彼女の胸は引き裂かれたが。何故なれば彼女の胸は痛み、悲しんで、か許り熱く絶望的の涙に濡れたるぞ。

彼は彼女の語を思ひ出し始めた。彼女が彼にいつたことは皆今猶彼の耳の中に音末の如く鳴り響き、彼の胸は一つ〳〵の記憶、彼女の語を一つ〳〵彼が愼んで繰り返す毎に愛に充ち、ぼんやりした重苦しい鼓動を以て答へた。彼がこれ等を夢に見たといふ考へがちらりと彼の心に閃いた。だが同時に彼女の熱き吐息、彼女の語、彼女の接吻の印象がはつきり彼の想像に甦つたので彼の全身が氣絶するやうな苦しみで痛んだ。彼は眼を閉ぢてぼんやりして了つた。何處かで時計が鳴り、段々遲く成り行き、黄昏が近づきつゝあつた。

突然かういふ氣がした。――又もや彼女が彼の上に身を屈め、朗かな幸福な喜びの輝やく涙で濡れ、暑い眞晝の無限の土耳古國見たいな天井のやうに靜かで明るい、彼女の極端にはつきりした眼で彼の顏を見守つて居る。彼女の顏は意氣揚々たる平和で輝き、彼女の微笑は無限の幸福の莊嚴さで溫かだつた。

彼女は非常な同情、實に子供らしい衝動で彼の肩に倚つかゝつたので喜びのうめきが彼の疲れた胸から洩れた。又もや胸を引き裂く如き音末が彼の聽覺を打つやうな氣がした。彼はつい近くの彼女の吐息にエレキを掛けられ、溫かい空氣をぐん〳〵吸ひ込んだ。苦しまぎれに彼は兩手をのばし、溜息をし、眼を開けた……彼女は彼の前に立ち、彼の顏のところ迄屈んだが、彼の顏は恐怖に打たれたるものゝ如く眞青で、涙に濡れ、感動で打ち震へて居た。彼女は何か知ら彼に告げて居た。半ば腕を露はし、手を握り締め、揉み絞り乍ら歎願して居た。彼は彼女を抱き締めた。彼女は彼の胸の上で震へた……。

第二編

一

「なあに？　どうしたの。」とオルヂノフはすつかり眼を覺し、今猶彼女を强く、熱切に抱き締め乍らいつた。「カテリナ、どうしたのです。なにさ。」

彼女は赤い顏を彼の胸に隱し、下うつむいて靜かにすゝり泣いて居た。長い間彼女は口を利くことが出來ず、ひどい恐怖に打たれて居るものゝ如く打ち震へて居た。

「私ね……私ね」と彼女はあへぎ乍ら凡んど聞き取れない聲でやつとかういつたが、はつきり物をいふことが凡んど出來なかつた。「私どうしてかうなつたのか分らないのよ……」彼女は彼を更にしつかり力强く抱き締め、烈しい感情の突發で彼の肩や手や胸をキツスした。遂には絶望したものゝ如く顏を兩手で隱し、跪いて、顏をひざの內に埋めた。オルヂノフが名狀し難き苦しみの餘りいらし〳〵て彼女を立たせ、彼女を自分の側らに座らせると、彼女の顏全體が羞しさで眞赤になり、その涙しつゝある兩眼は許しを求め、われともなしに彼女の唇に戲るゝ笑も彼女の新しい感情の烈しさを凡んど鎭めることが出

來なかつた。今や彼女は又も恐怖に打たれたるもの、如く見え、おづ〳〵して彼の手を拂ひのけ、頭を垂れて彼のせはしない問ひにおづ〳〵した聲で返答した。

『あなた怖い夢を見たのでせう?』とオルヂノフはいつた。『何か幻を御覽になつたのでせう?……えゝつ? あの人があなたを嚇したのでせう。……あの人は錯亂して、覺えがたいのですよ。あなたが聞いちやならないやうなことをいつたのでせう? 何か聞きましたか? えゝつ?』

『いゝえ、私寢ちやあ居なかつたのよ。』とカテリナは努めて自分の感情を抑へつけていつた。『ちつとも私眠氣がさしませんでしたのよ。そしてあの人はしよつ中默つて居て只一度私を呼んだゞけよ、私行つて名を呼んで話し掛けて見ましたの。私驚いちやつたのよ。あの人は眼を覺さず、私のいふことが聞えやしないのですもの、あの人はひどく惡いのですよ、主よ彼を御救ひ下さい! だから私悲しくなつちやつたのよ、本當に悲しく! 私は何度も〳〵御祈りしたのよ。さうしたらこんな氣持ちになつて了つたのよ。』

『叱つ、カテリナ、靜かになさい! 昨日あなたは驚いたでせう……』

『いゝえ、私昨日驚ろきやしなかつたわ!……』

『外にこんな氣持ちになつたことがあつて?』

『あるわ。』さういつて彼女はがた〳〵震へ、子供のやうに彼に身を擦り寄せた。『ね』と彼女は泣いぢやくりを堪へ乍らいつた。『無闇に私はあなたのところへ來たのぢやありません。じつと一人で居ることが出來なかつたのも無意義なことではなかつたわ。』と彼女は感謝するもの、如く彼の手を握り締めて繰り返した。『人の悲しみを思ひやつて涙を流すことはもう御止しなさい! あなたが寂しく力無く、誰もあなたの側に居ない暗い日の爲めに涙をとつときなさい!……ね、あなたこれ迄に戀人が御ありになつて?』

『いゝえ……あなたより前に戀人は知りませんでした……』

『私の前にですつて?……あなた私を戀人と思つて下さる?』

彼女は突然驚いたやうに彼を見て、何かいはうと思つたか默つて、下うつむいて了つた。段々彼女の顏全體が突然に又もや火のやうに眞赤になり、彼女の眼は今猶まつ毛に溫かき忘れられたる涙をくゞつて更に明るく輝やき、何かの問が彼女の唇にうろついて居ることを見て取ることが出來た。內氣な羞しさを含んで彼女は彼を一二度見たが、又さしうつむいた。

『いゝえ、私あなたの初戀の女にはなれませんわ。』と彼女はいつた。『いゝえ、いゝえ。』と彼女は考へ深さうに頭を打ち振り乍らいつたが、又もや靜かにほゝゑみが彼女の唇に忍び寄つた。『いゝえ』と彼女は遂には笑ひ乍らいつた。『私あなたの戀人にはなれませんわ。』

その時彼女はちらりと見たが突然彼女の顏にわびしさが現はれ、絕望的な悲しみが突然彼女の顏に影を投げ、にわかに絕望が內から、彼女の心から頭をもたげたので、オルヂノフは彼女の不思議な悲しみに對する說明し難い、苦しい同情に壓倒され、名狀し難く惱ましい氣に彼女を見た。

『まあ私のいふことを御聞きなさい。』と彼女はおのが手で彼の手を握り締め、泣いじやくりを抑へやうと努め乍ら彼の心を絞るやうな聲でいつた。『まあ私のいふことをよく御聞きなさい！　心を鎭めて、今の氣持を拂ひのけて下さいな。その方があなたの爲めに好いのよ。心が輕く樂しくなり、おそろしい敵から身が護れて、優しい妹を持つことが出來てよ。私あなたの來て欲しいと思ふ時に來て大事にして上げてよ。さうすればあなたと親しくすることが疚しくなくなるわ、この二日間といふもの、あなたがあの殘酷な病氣で臥つて居らした間あなたの御側に居て上げたぢやありませんか！　私あなたの妹ですわ！　無闇に私達は兄弟の誓ひを立つんぢやありませんわ。物好きに私あなたの爲めに聖母に涙を流して御祈りしませんよ！　世界中を御歩きになるがいゝわ。世界中の事が隈なく分つたつて私の持つて居るやうな愛が見つかりつこはありやしなくつてよ。若しあなたの心が求めて居るものが愛ならばね。私あなたを眞心を籠めて愛して上げてよ。今愛して居るやうにいつ迄も〳〵愛して上げてよ。私があなたを愛するのはあなたの心が純潔で、隱し立てがないからよ。初めてあなたをちらりと見た時、すぐにあなたは私の家の御客さんだ、待ち焦れて居た御客さんだてえことが分つたからよ。あなたが私達のところへ來たいと思召したのも不思議ぢやあないわ。私があなたを愛するのはあなたが私を御覽になる時、あなたの眼は愛に充ち、あなたの心中を語り、眼で何事かをおつしやる時にはすぐに私にはあなたの心中が分り、あなたが愛して下さるからには命も自由も棒げ度くなるからよ。心が分つた人の爲めには奴隷になることも樂しいのですもの……だが私の命は自分のものではなく人のもの……そして私の自由は

縛られて居るのですもの！　私を妹だと思つて下さい。そして私の兄さんになつて下さいな。不幸な時も、がつかりしちやつた時には私をあなたの胸に抱いて下さい。只ね、あなたのところへ來るのが羞しくなく、かういふやうに長い夜をあなたの側で座つて居ることが出來るやうに心掛けて下さいな。分つて？　私に心を許して下さつて？　かうして申し上げて居ることを分つて下さつて？……』

彼女はもつと何かいはうと思つたが彼をちらりと見て手を彼の肩に掛け、とう〳〵力無く彼の胸に倒れ込んだ。彼女は聲が出なくなつて痙攣的、熱情的の泣いじやくりに顫り、胸は高まり、顏は夕の日沒の如く輝いた。

『カテリナ』とオリヂノフはさゝやいた。眼の前が暗くなり、凡んど息することも出來なくなつた。『カテリナ』と彼はいつたが何をいつて居るのか自分で自分のいつて居ることが分らず、われとわが身が分らず、息をすると呪文が解け、今起りつゝあるいろんなことがこわれはしないかと思へて震へて居た。萬事を彼は現實といふよりも寧ろ幻のやうに思つた。それ程彼の周圍のものはぼんやりして居た！『私は分らない。あなたのおつしやることが分らない。今私におつしやつた事が覺えがない。心が暗いし、胸が痛い！』

この時彼の聲は感動で途切れた。彼女は更にしつかり、更に一心に、更に熱情を以て彼に縋り附いた。彼は立ち上つたが、最早我慢がし切れなかつた。夢中になつたゝめに粉々になり、疲れ切つて跪いた。遂に痙攣的の泣いじやくりが彼の胸から苦し氣に洩れた。彼の胸から眞すぐに出たその聲は竪琴の絃の

如く震へ、底知れぬ夢中と幸福の溢れだつた。

『あなたは誰です。あなたは。どこからやつて來るのです。』と泣いじやくりを制し乍ら彼はいつた。『どの天から私の世界へ舞ひ込んだのです。あたりが夢見たいであなたが信じられません。まあさ默つて、私に話させて下さい。殘らず洗ひざらひに。ずつと前から御話し度かつたのですよ……あなたは誰ですあなたは。どうして私の心が分りましたか。おつしやつて下さい、あなたはずつと前から私の妹でしたか……あなたの御身に關することを殘らず話して下さい、今迄何處にいらしたのです、あなたが住んで居たところは何といつたか聞かせて下さい。最初そこで何が御好きでしたか。何が樂しかつたか。何が悲しかつたか。暖かでしたか。空は澄んでましたか。……あなたは誰が御好きでしたか。私より前に誰があなたを愛しましたか。あなたの心は初め誰にあこがれましたか……あなたは御母さんがありましたか。御母さんはあなたをちやんと可愛がつて呉れましたか。それとも私のやうにこの世を寂しいものと思ひましたか。あなたは昔つから今のやうでしたか。あなたはどんなことを夢想して居ましたか。未來に對してどんな幻を抱いて居ましたか。何が實現され、何が實現されませんでしたか。——すつかり話して下さい……あなたの乙女心は初め誰にあこがれ、誰にそれを捧げましたか。私はその爲めに何を捧げなければならないのですか、あなたを得る爲めには何を捧げなければならないのですか……いつて下さい、私の愛する人、私の光、私の妹どうしたらあなたの心をわがものにすることが出來ますか……』

又もやその時彼の聲は切れ、彼は頭を垂れた。だが彼が眼を擧げた時、だんまりの恐怖が彼の心を凍

らせ、頭の髪の毛が突つ立つた。

カテリナは紙のやうに眞青になつて座つて居た。彼女はきつとして宙をにらみ、その唇は死骸の如く青く、眼はだんまりの、苦しい惱みの爲めに朦朧として居た。彼女は靜かに立ち上り、二足前に進み出金切聲を擧げてイーコンの前に身を投げ伏した……ふるへる、辻褄の合はぬ語が彼女ののどから洩れた、彼女は意識を失つた。恐怖で打ち震へてオルヂノフは彼女を立たせ、自分の寢床へ連れて行つた。氣違ひのやうになつて彼は彼女の上に身を屈めた。暫らく經つてから彼女は眼を開き、寢床の上に起き上りあたりを見廻して彼女の手を捉えた。彼女は彼を引き寄せ、今猶青き唇で何かいはうと思つたが、彼女の聲はいつかな彼女の命令に從はうとはしなかつた。遂に彼女はわつと許りに泣き出した。熱い涙がオルヂノフの冷たい手を焦した。

『苦しい〳〵。私死にさうよ！』と彼女は必死の苦しみでやつといつた。だが彼女のいふことを聞かない舌は一語も發することが叶はなかつた。彼はオルヂノフを絶望的な顏して見やつたが、彼には彼女が分らなかつた。彼は彼女に接近して身をかゞめ、聞耳を立てた……やつと彼は彼女のさゝやきをはつきり聞いた——

『私は腐敗しました。——皆なが私を腐敗させました。皆なが私を滅茶々々にしつちまひました！』

オルヂノフは頭を擧げ、ひどく驚いて彼女を見た。恐しい考へが彼の心に閃いた。カテリナは彼の顏が痙攣的に動くのを見た。

『さうよ！　腐敗しちやつたの。』と彼女は語を續けた。『ある惡い人が私を腐敗させて了つたの。あの人が私を滅茶苦茶にして了つたのよ！……私あの人に自分の靈を賣つちやつたの。何だつてあなたは御母さんのことなんぞおつしやるの。何だつて私をいぢめたいと思召したの。神樣、神樣があなたの審判者になるといゝ！……』

暫し後には彼女は靜かに泣いて居る。オルヂノフの胸は命にもかゝはるやうな苦しみで鼓動し、痛んで居た。

『あの人は』と彼女は抑壓したやうな、變な聲でいつた。『あの人は死んだら御前の罪深い靈を取りに來るといつて居るのですよ。……私はあの人のもの、私は私の靈をあの人に賣つて了ひました。あの人は私をいぢめ、自分の本を讀んで聞かせるのですよ、あの人の本を御覽なさい！　これがあの人の本ですあの人は私が許され難い罪を犯したといふのですよ。御覽なさい……』

さういつて彼女は一冊の本を示した。オルヂノフはそれが何處から出て來たか氣が附かなかつた。彼はそれを機械的に取つた――それは以前に彼が偶然見たことのある古い異端の書物のやうに全部が寫本だつた。だが今や彼は外のものは見たり注意を集中したりすることが出來なかつた。彼は書物を手から落した。彼は落附かせやうと思つて優しくカテリナを抱いた。『まあ靜かに』と彼はいつた。『皆ながあなたを怖がらせたのですね、私があなたと一緒に居ます。私と一緒に休んで居るといゝ。』

『あなたは何にも御存知ないわ。』と彼女は熱心に彼の手を握り締め乍らいつた。『私はいつもかういふ風

ですの！　私はいつも心配ですわ……私本當にあなたをひどい目に會はせましたのね！……』

『ぢや私あの人のところへ參りますわ。』と彼女は暫らく經つてから息をついていつた。『あの人は只何とかかとかいつて慰めて呉れることもあれば本を取り出して――一番大きいのをね。讀んで聞かせることもあるのですよ、あの人はしよつ中そりやあ怖い、恐しいものを讀んで居るのですよ！　私は何のことか分らず、いつて居ることが皆目分らないのですの。それで居て怖く成り、あの人の聲を聞いて居るとあの人ではなく、誰か外のもの、誰かいけないもの、どうしたつて柔げやうのない、懇願することも許されないものがしやべつて居るやうな氣がして心がそれは重苦しく成つて燃える……かういふ悲しい思ひが私を訪れる時よりももつと重苦しいわ！』

『あの男のところへ行つちやあいけない。何だつてあの人のところへ行くのです。』とオルヂノフは自分のいつて居ることを凡んど意識しずにいつた。

『何だつて私はあなたのところへ來たのでせう。さう御尋ねだとすると、それだつても私には分らないのですよ。……だがあの人は私にしよ中いつて居るのですよ。『祈るといゝ。祈るといゝ！』といつてね時には暗い夜に起きて長い間何時間もぶつ續けに御祈りをすることもあつてよ。ねむく成ることもあるが恐怖がのべつに私の眼を覺し、しよつ中眼を覺しては私のまはりにあらしが集りつゝある、害惡が私のところへ來掛つて居る、いけない事が私をちり〴〵に引き裂き、私を苦める事だらう、私の祈りは聖者達には屈かず、彼等は私を殘酷な悲しみから救つて呉れないだらうと思ふのですよ。泣いてる内に私

の靈は引き裂け、私の體全體が粉々にこわれるやうな氣がします……さうすると又私は御祈りを始め、イーコンから聖母がいとほし氣に私を見下す迄祈りに祈るのですよ。それから私は立ち上つて、もうへと〳〵に成つて眠りに就くのですよ、イーコンの前に跪いた儘床の下で眼を覺すこともあるのですよ、さうするとあの人が眼を覺して私を呼び、私を慰めたり、あやしたり、喜ばせたりして呉れることもあるのですよ。さうすると、私も氣分がさはやかに成り、どんな災難が振り掛つてもあの人と一緒に居れば怖くないのですよ。あの人は強いのよ！　あの人のいふことには力があるわ！』

『だがどんな惱みがあなたにあるのですか。』……さういつてオルヂノフは絶望して兩手を揉み絞つた。

カテリナは恐しく青く成つた。彼女は許される見込みのない、死刑の宣告を受けたるもの〻如き顏して彼を見た。

『私？　私は呪はれて居るのですよ。私は人殺しです。私の母が私を呪つたのですよ！　私は自分の母の仇だつたのですよ！……』

オルヂノフは何ともいはずに彼女を抱いた。彼女はふるへ乍ら彼に擦り寄つた。彼は痙攣的な身震ひが彼女の全身をよぎるのを感じ、彼女の靈が彼女の體から分れ行きつ〻あるやうな氣がした。

『私は母をしめつぼい土の中へ、かしまつて了つたのです。』と彼女は思ひ出の恐ろしさに壓倒され、取り返しのつかぬ過去の幻影に沒頭していつた。『私はずつと前からそれが話したかつたのですよ、あの人はしよつ中、賴んだり、叱つたり、怒つたりして禁じて居たのですが、時には仇か敵かなんかのやうに

あの人自身が私の惱みをつつくのですよ、夜になると今のやうに、すつかり心に甦つて來るのですよ。まあ聞いて下さい！　昔、ずつと昔の事でした。何時だつたか覺えがない。そのくせ昨日のことのやうに、昨日の夢のやうに眼の前に現はれて、夜つぴて私の心を責めさいなむのですよ。厭なことがある時間が二倍にも感じられるものですわね、こゝへ座つて下さい。私の側へ座つて下さい。私の悲しみをすつかり御話しますから、私は呪はれて居るもの、母の呪ひで打ち倒されるがいゝ……私は自分の命をあなたの御手にゆだねます……』

オルヂノフは彼女を制しても見たが、彼女は手を合はせてどうか聞いて呉れと賴み、更に興奮して話し出した。彼女の話には聯絡がなく、彼女の心の亂れがその語の内に感じられたが、オルヂノフには話がよく飲み込めた。といふのは彼女の命が彼の命と成り、彼女の悲しみが彼の悲しみと成つたから。彼女の敵が彼の前に立ち現はれ、彼女の語る語と共に姿を現し、大きく成り行き、いはゞ疲れを知らぬ力で彼の心を壓倒し、意地惡く彼を惱ましつ〻あつたから、彼の血ば騷ぎ、彼の胸に溢れ、彼の理性をぼんやりさせた。彼の夢のかの惡き老人（オルヂノフはさう思つた）が彼の眼の前に生きて居た。

『今夜見たいな夜でした。』とカテリナは語り出した。『たゞもつとあらしがひどくつて、森の風がこれ迄聞いたことがない程ひどく吠えて居ました……その夜でした、私の破滅が始まつたのは！　窓の前の樫の木が折れましたが、年取つた、灰色の頭の乞食が私達の戸口へ來て、その樫の木は小さな子供の頃から覺えて居るが、あの樫の木は昔も今も變りがないと申しました……その晩に——今でも覺えて居ます

が――私の父親の船があらしの爲めに河で難船し、御父さんは病氣で苦んで居ましたが漁夫が工場へ駈けつけて來ると一緒に馬車で出掛けました。御母さんと私と二人でぽつねんと座つて居ました。私は眠うございました。御母さんは或る事を悲んでひどく泣いて居ました……そして私は何を悲んで居るか承知して居ました！　御母さんは病氣が治つた許つかりのところで、未だ色が青く、しよつ中私に經かたびらの用意をして呉れなぞといひ〳〵して居たものです。突然眞夜中に門をたゝく音が聞えました。私は飛び上りましたが、ぎくりとしました。御母さんは大聲で何かいひましたが、私は御母さんの方を見ませんでした。だつて怖かつたのですもの。私は明りを持つて、門を開けに參りました……あの人ぢやありませんか！　私は怖く成りました、だつて私はあの人が來ると、ひやりとしたもので、物心の附いた子供の頃からさうなんでしたもの！　當時はあの人も髪が白くはありませんでした。顎ひげはちやん見たいに黑く、眼は石炭見たいに燃えて居ました。その時迄あの人は私を優しい顏をして見たことがたつた一度もなかつたのですよ、あの人は私に尋ねました。『御母さんは御宅ですか』つて。小さい門を閉めて、私は父は家に居ませんよつて答へました。あの人は『それは知つて居ます』といつて突然私を見るのですよ。何といつていゝか、變な顏して、そんな顏して私を見たのはそれが初めてゞしたよ。私はずん〳〵歩きましたが、あの人は動かうともしないのです。『何故御入りに成らないのです。』『一寸考へる事があるので。』その時は既に二人は部屋の方へ行かうとしてたのです。『御母さんが御在宅かと聞いたのに、何だつて御父さんは居ませんよと御つしやつたのです。』私は何とも申しませんでした……御母さ

んはぎくりとしましたが、あの人のところへ駈けつけました。あの人は御母さんをろく樣見もしないのです。私はそれ等の事をすつかり見ましたのよ、あの人は濡れ鼠に成つて身震ひして居ました。あらしに十五哩も追つかけられたのですが、何處から來たのか何處に住つて居るのか、それは御母さんも私もまるで知らなかつたのですよ、私達は九ケ月程も彼に會ひませんでした……彼は帽子を投げ、手袋を脫ぎ、イーコンに向つて御祈りもせず、主婦に會釋もせず、火の側に腰を下しました……』

カテリナは何が彼女の上にのしかゝり、壓えつけてゞも居るやうに、手で顏を撫でたが、暫らくすると彼女は頰を擧げて、又も語り出した――

『あの人は御母さんに粗鞣語で話を始めました。御母さんは知つて居ましたが、私には一語も分りませんでした。彼が來ると外の時には二人は私を去らせたものですが、今日は御母さんは自分の子供に何もいふ勇氣がなかつたのです。汚ない精神が私の心を手に入れ、私は心中得意に成り乍ら母を見て居ました。私は二人が私を見て私の事を話して居ることが分りました。御母さんは泣き出しました。私は彼がナイフを攫まうとするのを見ましたが、その當時一度ならず彼は御母さんと話をして居てナイフを攫まうとするのを見たことがありました。私は飛び上つて彼の帶をとらへ、そのいけないナイフを彼からもぎ取らうと致しました。彼は齒ぎしりして大聲を擧げ、私を擊退しやうと致しました。彼は私の胸を打ちましたが、私を振り放しはしませんでした。私その場で死ぬかと思ひましたわ。だつて眼がぼんやりして來たのですもの。私は床に打つ倒れましたが聲は立てませんでした、凡んど眼が見えなかつたけれ

ど私は彼を見ました。彼は帶を取り去り、袖を捲くり上げ、私を打んなぐつた手でナイフを取り出し、それを私に呉れました。『さあ、切つて了ひなさい。たんと御樂しみに成るがいゝ。私は御前さんを馬鹿にしたが、私はその詫びに地べた迄頭を下げてもいゝ。』私はナイフをわきへどけました。血が私を窒息させ出し、私は彼を見ませんでした。、私は自分が唇を開けずに笑ひ、おどすやうに御母さんの悲しげな眼をまつすぐに見入つたことを覺えて居ます。ずう〳〵しい微笑が御母さんが靑く成り、死んだやうに成つて座つて居る間私の唇を離れませんでした……』

注意を張り詰めてオルヂノフは彼女の聯絡のない話を聞いて居た。初めの爆發の後彼女の興奮は段々鎭まり、彼女の語は靜かに成つた。この哀れなるものはおのが思ひ出の爲めに心を奪はれ、悲しい思ひは果しなき擴がりの上にとけて流れた。

『彼は會釋もしずに帽子を手に取りました。私は又明りを取つて、病中ではあつたが、彼を送らうとした御母さんの代理に私が送りに出ました。私達は門に着きました。私は彼の爲めに小さな門を開け、默つて犬を追つ拂ひました。見ると帽子を脫いで私に會釋をするのです。胸を探つて赤いモロッコ革の箱を取り出し、掛け金を開けるて。覗くと大きな眞珠です。私への贈りものなのです。『町にいゝ人があります。』と彼が申すのです。』その女にやらうと思つて買つたのだけれど、そこへは持つて行つてやりませんでした。美しい姉さん、受取つて置いてください。自分の美しさを大事になさい。足のしたに踏み潰してから受取つていたゞきたいもので。』私それを受取りましたが踏んずけやうとは思ひませんでした

それ程大したものかなんかのやうに思ふのは厭だつたので、一語もいはずまむしかなんかのやうにそれを受取りました。私家へ入つてお母さんの前でそれをテーブルの上に並べました。その爲めに私はそれを受取つたのですよ。御母さんはハンケチのやうに眞白に成り暫らく默つて御出でした。御母さんは私を怖がつてゞも居るやうな樣子で話をするのです。『カーチヤ、これは何なの?』で私は答へるのです。『あの商人があなたへといつて持つて來たのです。私何にも知らないわ。』見ると御母さんの眼から涙が流れて居るのです。御母さんは息をすいて居るのです。『私ぢやあないよ。カーチヤ、いけない子だね。私ぢやありませんよ。』私は御母さんがそれはもう本當に悲しさに靈が消えてなくなりさうにさういつたのを覺えて居ます。私は眼を擧げましたが、御母さんの足下に身を投げ伏したいと思ひましたが、突然惡魔が私に敎へました。『さう? あなたでなきやあ大方御父さんに呉れたのでせうよ。御父さん歸つて來たら、それを御父さんに上げませう。私商人が來て居たが、商賣物を忘れて行つたと申しますわ……』さういつたら御母さん何て泣いたことでせう。……『私が御父さんにどういふあきんどが來たが、何のあきなひで來たか話しますよ。……私が御前の御父さんに話します、私生兒め! 御前はもう私の娘ぢやありません、この蛇め! 御前はいま〳〵しい子だ!』私は何とも申しません。涙も出ないのです。……私は自分の部屋へ行つて夜つぴてあらしを聞き、自分の考へをその吹きすさむ勢ひとともに鳴らせて居ました。

『それから五日過ぎました、五日後の夕方御父さんは陰氣な恐ろしい顏して入つて來ました。御父さん

は道で病に苦んだのでした。私は御父さんの腹が繃帶で卷いてあるのを見ました。私は御父さんの敵が御父さんを道で要擊して、御父さんをへと〳〵にして、病を引き起させたのだと思ひました。私も御父さんの敵は誰かつてことは承知して居ました。それはよく知つて居ました。御父さんは御母さんには一語もいはず、私の事も尋ねませんでした。御父さんは職人を殘らず呼び集めて彼等に工場を去らせ、家をいけない眼付（譯者註、往時の迷信にて一瞥以て能く災害を加へ得べしと信ぜられし一種の目付）から守護させました。その時私は心中家にはいけないことがあるのだなと思ひました。私達は待つて居ましたが夜は來ました。あらしの吹く、雪の夜が、私怖く成つちやつたのよ。私は窓を開けました。顏はほてり、眼からは涙が出、落ちつかない心は燃え、私興奮して了つてたのよ。私その部屋を去り、遠く雷や稻妻の生れる光りの國へ行つて了ひ度かつたわ。私の乙女心は皷動し、波打つて居ました。……と突然眞夜中に私はうと〳〵してたのですが、それとも、私の心に霧が下りて、にわかに混亂させて了つたのかも知れませんが ——『開けて下さい！』といつて窓をたゝく音がするのです、見ると窓のところに人が居るのです。繩で上つて來たのです。私はすぐにその客が誰かといふことが分つたので窓を開けて、私の隱れ家に入れたのです。それはあの人でした！ 帽子も脫がず、腰掛に腰を下して、追つ掛けられてゞも來たやうにあえいだり、ふうと息を吸つたりするのです。私は隅つこに立つて、われ乍ら自分の眞青に成つたのを知つて居ました。『御父さんは御家ですか？』『え〳〵。』『御母さんも家に居ます。』『靜かに。聞えますか。』『聞えます。』『何です？』『窓の下の風の音です！』『ね、美しい娘さん、あな

たはかたきの頭を切り取つて了ひたいとは思ひませんか。御父さんを御呼びなすつて、私の命を取つて下さいませんか。私はあなたの自由に任せます。こゝに綱があります。さうしたいと御考へなら結えて下さい。あなたが受けた侮譽の侮辱をなさつて下さい。』私は默つて居る。『どうです？ 何とかおつしやつて下さい。』『何です？』『私は私の敵が死んで了ふこと、昔の戀人と永久に別れを告げて、自分の心を新しい戀人、あなたのやうに美しい娘さんの足下に置き度いと思つて居るのですよ……』私は笑ひましたが、彼のいけない語が私の間にどういふ風に響いたかは分りません。『美しい御娘さん、私を下へ連れて行つて下さい。私の勇氣を試させて下さい。御主人に敬意を表させて下さい。』私は全身ぶる〳〵して齒はがた〳〵しましたが、心は赤熱した鐵のやうでありました。私は參りました。私は彼の爲めに戸を開き、彼を家へ入れましたが、敷居のところで思ひ切つて申しました。『さあ、あなたの眞珠を御受取り下さい、又と私に贈物を下さいますな。』さういつて箱を彼の後ろへ投げて遣りました。』

かういつてカテリナは一息ついた。或る時は彼女は色青ざめて、木の葉の如くふるへ、又或る時には逆上したが、今や話を止めた時には兩頰は火で輝やき、眼は涙をくゞつて閃めき、胸は苦しい、不揃ひの吐息で高まつた。だが突然彼女は又もや色青ざめ、聲は悲し氣な震へを帶んで低く成つた。

『そこで私は一人ぼつちに成りましたが、あらしが私に卷きつくやうな氣がしました。突然叫び聲が聞えます。職工が庭を横切つて工場に驅けつけ。『工場が火事だ』といふ聲が聞えます。私は矢つ張り隱れて居ました。皆なが家から驅け出しました。私は母と殘りました。私は母がこの世と別れをしさうでこ

の三日間といふもの死の床に横はつて居ることを知つて居ました。私はそれを知つて居たのですよ！

……突然私の部屋の下で叫び聲が、子供が寝て居る最中におびえた時のやうな微かな叫び聲がしました が、あとはひつそり閉として了ひました。私は蠟燭を吹き消しました。私は氷のやうにぞつとしました 手で顔を隠しました。見ることが怖かつたのです。突然近くに叫び聲が聞えて皆なが工場から驅けつけて來るのです。私は窓から乘り出しました。見ると私の大事な父親を運んで行くのです。皆なが『大將はつまづいたのだ。梯子段から眞赤に成つて居る大釜の中へ落つこつちやつたのだ、だから惡魔が大將を突き落したに違ひないのだ。』といつて居るのが聞えるのです。私は寝床にぶつ倒れ、恐怖で痺れて待つて居ましたが、誰を又何を待つて居たのか分らない、たゞその時は悲しい思ひに壓倒されて居ました 私はどれ丈けの間待つて居たか覺えがありません。突然いろんなものが搖ぎ出し、頭が重く成り、眼が 烟の爲めにひり〳〵し、私はもうぢき死ぬのだと思ふとうれしかつたことを覺えて居ます。突然私は誰 かゞ私の肩を持つて引き上げて呉れるのに氣が附きました。私ぢつと樣子を見ました。あの人は體中や けどをして、カフタンは觸ると熱く、烟が出て居ました。

『美しい御娘さん。私はあなたの爲めに參つたのですよ。あなたが私を不幸に落したやうに今度は私を 困難から救ひ出して下さい。私はあなたの爲めに靈をなくしたのですよ。御祈りしたつて、この呪ふ可き夜をつぐなふ事は出來ません！ 二人一緒に御祈りしませうね！』彼は笑ひました。あのいけない人 が。『人に出會はないで外へ出る道を敎へて下さい！』と彼が申しました。私は彼の手を取つて連れて行

きました。二人は廊下を通つて行きました。――鍵は私が持つて居ました。――私は物置へ行く戸を開 けて窓を指しました。その窓は庭に臨んで居ました。彼は强い腕で私をとらへ、私を抱いて、私と一緒 に窓から飛び出しました。二人は手に手を取つて走りました。長い間走り續けました。見ると二人は茂 つた暗い森の中に居ました。彼は聞き耳を立てた。『カーチヤ、私達を追つかけて來るものがありま す よ、美しい娘さん、私達を追つかけて來るものがありますよ。だが、今私達は命を捨てゝは成りませ ん！ 美しい娘さん、愛と永遠の幸福の爲めにキツスして下さい！』『どうしてあなたの手は血で濡れて 居るのですか？』『私の手が血で一杯だつて？ 私はあなたのところの犬を突き刺したのですよ。だつて 彼奴は等遲く行くと厭に大きな聲で吠えたのだもの。さあ御出でなさい！』

『二人は又走り續けました。私達は路で御父さんの馬を見ましたが、馬は馬勒をこわして、厩を驅け出 したのでした。だから馬も燒かれまいと思つたのでせう。『カーチヤ、私と一緒に御乘り。神樣が私達に 助を寄越して下さつたのだ。』私は默つて居た。『厭ですか。私は異敎徒ではありません。不潔な異敎徒で はありません。さあ、御望みなら十字も切ります』さういつて彼は十字を切りました。私は馬に乘つて 彼に身を擦り寄せ、彼の胸にもたれて何もかも忘れ、宛かも夢を見て居るやうな氣持ちでしたが、眼を 覺して見ると、私達は廣い〳〵河の岸に立つて居ました。彼は馬を下り、私を下して、彼の舟が隱して あるあしのところへ行きました。二人は乘らうとしました。『いや、さいなら、いゝ馬よ。新しい主人の ところへ御出で、古い主人は皆御前を見捨てるのだから！』私は御父さんの馬のところへ驅けて行き、

別れに際して彼を熱切に抱いてやりました。それから二人は乘り込み、彼は擢を取りましたが、間もなく、岸も見えなくなりました。そして岸が見えなくなると私は彼が擢を置いて、あたりを見廻すのを見ましたが、あたりは見渡す限り水でした。

『萬歳』と彼は申しました。『恐ろしい母なる河よ。汝は神のすべ給ふ人々に飲みものを、而して予には食べものを與ふ！　いへ、わが不在の間、汝わが物品を守りしや、わが商品は安全なりや。』私は默つて座つて、眼を伏せて胸を見て居ましたが、私の顔は焰の如く羞恥で燃えました。さうすると彼は『すざまじき、强慾なる河よ。汝は何を奪ふも自由なり。たゞわれをしてわが誓ひを守り、わが價知れぬ眞珠を愛撫せしめよ！　美しい娘さん。只一語おつしやい。太陽の光をあらしの中に送り、暗い夜を光りで散り〳〵にして下さい！』

『彼は且つ笑ひ且つしやべつて居ました。彼の心は私の爲めに燃えて居ましたが、私は羞しくつて彼の嘲弄が辛抱出來ませんでした。私は何とかいひ度いとは思ひましたが怖かつたので默つて居ました。『ぢやあまあそれでいゝや！』と彼は私がおづ〳〵考へて居るのに對してさう答へました。彼は悲し氣に、悲しみが彼をも訪れたかのやうに物いひました。『力づくでは何にも取ることが出來ない。神樣が御前についていらつしやることを祈るよ。高慢な人、私の鳩、私の美しい娘さん！　あなたの私に對する憎しみは强いらしい。でなくともあなたのぱつちりした眼に好意が見出せません！』私は聞いて居て惡意にとらへられました。惡意と愛に促へられました。私は心を鬼にしました。私は申しました。『あなたが私

のところへいらしつたことが樂しいか樂しくないかそんなことは私知りませんわ。暗い夜に乙女の室を恥かしめ、永生の罪で自分の靈を賣り、氣違ひ染みた心を訓練することが出來なかつた何處かの馬鹿な恥知らずの娘に御聞きに成るといゝわ。私の悲しみの涙に御聞きに成るといゝわ。ぬすとのやうに人の悲しみを呑氣に話し、乙女心を嘲弄する人に御聞きに成るといゝわ！』私はさう申しましたが、もう辛抱がし切れなく成りました。私は泣きました……彼は何にもいはず、變な顔して私を見るので私は木の葉のやうにふるへました。『まあ私のいふ事を御聞き。』と彼は申しました。『美しい娘さん』彼の眼は異樣に輝きました。『私のいふことはいゝ加減の事ではない。私はあなたに嚴かな誓ひをする。私に幸福を與へて下されば下さる丈け私は紳士に成ります。若し私を愛することが出來ないのなら、何ともおつしやらなくつて宜しい。くよ〳〵することはない。只あなたの烏羽玉の眉毛を動かして下さい。あなたの黑い眼を轉じて下さい。あなたの小指を一寸動かして下さい。さうしたらあなたの愛と黃金の如き自由を御返しゝますかち。だけれどさうなつたら私の高慢な、御高く止つた美しい人、さうなつたらそれが私の最後の日ですよ。』私はもうそれを聞いて脈で〳〵堪らなかつたわ……

この時カテリナの話は深い感動の爲めにさまたげられた。彼女は息を吸ひ、何か新しい考へに對して打ち微笑み、話を續けやうとしたが突然彼女の輝やく眼は彼女の上にこらされたるオルヂノフの病的な凝視に出會した。彼女はびく〳〵とし、何かいはうと思つたが血が彼女の顏に漲つた……彼女は兩手で顏を隱し、氣絕したやうに枕に打ち伏した。オルヂノフは全身ぶる〳〵ものだつた！　苦しい氣持、

堪えることの出來ない、說明することの出來ない、興奮が毒のやうに彼の血管中に走り、カテリナの物語の一語々々と共に大きく成つた。望みなきあこがれ、熱心な、辛抱することの出來ない情熱が彼の想像を占領し、彼の感情を煩はしたが、同時に彼の心は辛い、無限の悲しみの爲めにいよ〳〵壓迫せられた時にはカテリナに話は止めてくれろと叫び、足下に身を投げ伏し、涙を流してもとのやうな愛の苦しみもとのやうな純粹の、絕對的のあこがれを返してくれと賴みたく成ることもあつた。彼は既に久しき前に乾いた頰の涙をなつかしく思つた。胸には痛みあり、熱の爲めに苦しく抑へつけられて、彼の惱める靈に涙のなぐさめを與へることが出來なかつた。彼はカテリナが彼に話して居ることが分らず、彼の涙はこの哀れな女を興奮させた感情を怖がつて居た。その時彼は自分の情熱を呪つた。それは彼を窒息させ、疲れ切らせた。彼は血ではなくとけた鉛が彼の血管中を走つて居るやうな氣がした。

『あゝ！　それが私の悲しい事ぢやあなくつてよ。』とカテリナは突然頭をもたげていつた。『今御話したことが私の悲しみぢやあなくつてよ。』と彼女は突然の新しい感情から銅のやうに鳴る聲で話を續けたが彼女の心は秘かな、溜め涙で引き裂かれて居た。『それが私の悲しみぢやあないわ。苦しみぢやあないわ惱みぢやあないわ！　この世の中で外に御母さんを持つことが出來なくつたつて自分の母親の爲めに何心遣ひをするものですか！　御母さんが最後の恐ろしい時に私を呪つたつてそれが何でせう。昔の金色の生活、温かい部屋、乙女の自由、それが何でせう。自分を惡魔に賣り、靈を破壞者の手に投げ、幸福の爲めに許す事の出來ない罪を犯したつてそれが何でせう。あゝその爲めに私は破滅しましたが、それ

が私の悲しみぢやあないわ！　だが私に取つて辛いこと、私の心を引き裂くものは、私が彼の恥を知らぬ奴隷であること、恥知らずとはいひ條恥辱や不名譽が私にはなつかしいこと、私のがつ〳〵した心には悲しみを喜びか幸福かなんかゝやうに思ひ出すことが好きな事ですわ。それが私の悲しみですわ。何の力もなく、自分の受けたる害惡に對して怒ることも出來ないのが！……』

この哀れなものは息せき、痙攣的な、ヒステリー的な泣きじやくりは彼女の語を中斷し、熱いせつない吐息は彼女の唇を燒き、彼女の胸は高まつたり低くなつたりし、彼女の眼は理解し難き怒りで輝いただがその時彼女の眼は非常な魅力で輝き、あらゆる線、あらゆる筋肉が非常に情熱的な感情の洪水、堪へられない、信じる事の出來ない美しさで震へたのでオルデノフの陰氣な考へはすぐに失せ果てゝ彼の心の眞誠な悲しみは沈默した。で彼の胸は彼女の胸に押しつけられ、それと一緒に狂亂的な感情に沒頭し、その嵐、その無限の情熱の突發と調子をそろへて波打ち、それと共に氣絕したいとさへ熱望した。カテリナはオルデノフの惱ましげな眼に出會し、一種の微笑を浮べ、彼の胸は倍の火で燃えた。彼は凡ん、自分が何をして居るのか分らなかつた。

『私を許して下さい。私を憐んで下さい。』と彼は震へる聲を整のへ、彼女の方へ屈み、手を掛けて彼女の肩に恁れ、近くで、非常に近くで彼女の眼に見入つたので、二人の吐息は雜つて一つに成つた。『あなたは私に死ぬやうな思ひを與へて居ます。私はあなたの悲しみは分らないが、私の心は惱んで居ます……あなたが何の爲めに泣いて居やうともそれが私に取つて何ですか！　かうして欲しいと御思ひのこと

を仰つて下さい。私それをしますから、私と一緒にいらつしやい。二人で一緒に參りませう。私を殺さないで下さい、私を！……』

カテリナはじつと彼を見て居たが、彼女の燃ゆるが如き頰の涙は乾いて居た。彼女は彼を止め、手を取らうと思ひ、何か言はうと思つたが、何といつていゝか分らなかつた。笑ひがその中から洩れさうな變な微笑が彼女の唇に浮んだ。

『未だすつかり御話が濟んで居ないわ。』と彼女は遂に調子のそろはない聲でいつた。『でも私のいふ事を聞いて下さるでせうか。妹のいふことを御聞きなさい。あなたには未だ妹の辛い悲しみがよく分つて居ないわ。私彼と一緒にどんな風に一年を送つたか、それを御話したく思ひますが、その話はしません……一年間經ちました。彼は仲間と一緒に河を下つて行きましたが、私はあの人が御母さんといふ人と一緒に殘されて、港で彼を待つて居ました。私は一月二月と彼を待つて居ましたが、ある若い商人に會ひ彼を一目見て自分の黃金時代が過ぎ去つたことに思ひ及びました。『妹よ、愛するものよ。』と彼は私に二言ものいつてから申しました。『私はアリョーシャだ。あなたの許婚だ。年取つた連中が二人を子供の時いひなづけにしたぜ。あなたは忘れつちやつたのだ。考へて御覽なさい。私はあなたの地方のものだ。』『あなたの地方で私のことを皆なが何といつて居ますか。』『皆なの噂ぢやああなたが不行儀なことをして、乙女のつゝしみを忘れ山賊、人殺しと仲好くしたといつて居ますよ。』とアリョーシャは笑ひ乍ら申しました。『そしてあなたは私の事を何と仰つしやいましたか。』『私はいろんな事を申し上げる積り

で此方へ參りました。』――さういつたが彼は心が亂れました。『私はいろんな事を申し上げる積りで居ましたが、あなたに會つたので私の心は死んで了ひました。あなたは私を殺しました。』と彼は申しました『私の靈も買つて下さい。受取つて下さい。美しい娘さん。よし私の心や私の愛を嘲らうとも。私は今みなしごです。私は自由です。私の靈は私のもので人のものではありません。私は自分の記憶を抹殺して了つた何處かの女の人のやうにそれを誰にも賣つたことはありません。心を買つて貰ふ丈けの話ぢやあない只で上げます。だから安い買物だてえことは明瞭だ。』私は笑ひましたが、何度も〳〵彼は私にそんな話をしました、といふのは丸一月彼はそこに住み、商品をほつたらかし、人々を棄てゝたつた一人で居ましたから、私は彼の寂しい涙が可哀さうに成りました。そこで私は或る朝彼に申しました。『アリョーシャ、夜に成つたら、港の下の方で待つてゝ下さい。御一緒にあなたの御宅に參りますから。私自分の生活に疲れて寂しいのですよ。』そこで夜に成ると私は包みを縛りましたが、私の心は痛み、騷ぎました。ところが主人が知らせも豫告もなしに入つて來たぢやありませんか。『やあ、行かうぢやないか。河に嵐が起るらしいから、』かうしちやあ居られないから。』私は彼のあとについて行きました。私達は河へ參りましたが、彼の仲間のところ迄行くのには中々あるのです。見ると、小舟が一艘あつて、その中で私達が知つて居る人が人待ち顏に漕いで居るのです。『アリョーシャ、今日は。御機嫌好う。何だつて漕にぼや〳〵して居るのです。急いで船に歸りたいと思つて居るの。どうか私と家內とを私達の仲間へ、私達のところへ渡して下さい。小舟を歸らせつちやつたところへ持つて來て泳ぎを知らないと來てるか

ら。』『御乘んなさい。』とアリョーシャは申しましたが、彼の聲を聞くと私氣絶せむ許りに成りました。『奥さんも一緒に御乘んなさい。風は持つて來いですし、あなた方が乘るところもありますから。』私達は乘り込みました。暗い夜で星は隱れ、風は吠え、波は高く、私達は岸から一哩も漕ぎ出しましたが、三人とも默つて居ました。

『嵐だ。』と私の主人が申しました。『面白くない嵐だ！　今吹きすさんで居るやうな嵐はこれ迄河で一度も會つたことがない！　この舟では難しいだらう、三人は脊負ひ切れまい！』『さうだ。難しいだらう。』とアリョーシャが答へました。『どうも一人が大變な厄介に成つた。』と彼が申すのですが、その聲は竪琴の絃のやうに震へて居ます。『ね、アリョーシャ、私は君を小さい子供の頃から知つて居た。君の親父は私の仲間で私達は一緒に飯を食べたものだ。どうだ。アリョーシャ、君は舟を捨てゝ岸へ着くことが出來るか。それとも無駄死にする積りか。命を捨てる積りか。』『着くことは出來ません。君だつても、若し水を一杯飲まうものなら、君は岸へ着くことが出來るかどうか。』『着くことは出來ない。さうしたらそれが最後だ。荒れて居る河に抵抗することは出來ないし！　御聞き、カテリナ、私の大事な眞珠！　私は斯う云ふやうな夜を覺えては居るが、波はのた打ち廻つては居なかつたし、星は輝やいて居たし、月は明るかつた……御前に尋ねたいものだが、御前は忘れたかね。』『覺えて居ますよ。』と私は申しました。『さうか。御前がそれを忘れないのなら、或る大膽な男が美しい娘に告げた、愛することの出來ないものからは彼女の自由を取り返してやるといつた約束を忘れはしまいね――えゝつ』『えゝ、それも忘れは

しません。』と私は死んだものゝやうに成つて申しました。『あゝ、御前は忘れなかつたのか！　ところで今、私達はこの舟の中で大變な場合に遭遇して居る。私達二人どちらかゞ死ぬ可き時が來てはしないかどうだ、おい、どうだ、私の鳩、鳩のやうに優しい聲で二人に聞かせて呉れ、どちらが……』

『私その時何とも申しませんでしたわ。』とカテリナは眞青に成つて小聲でいつた……

『カテリナ！』しやがれた、洞穴に響くやうな聲が二人の上に響き渡つた。オルヂノフはびくりとした戸口にミューリンが立つて居た。彼は毛皮のひざ掛け丈けを身に纏ひ、死んだやうに色青ざめ、二人を凡んど魂の抜けたやうな眼で見詰めて居た、カテリナは段々色青ざめ、彼女も彼を見呪文に縛られたるものゝ如く茫然として見詰めた。

『カテリナ、此方へ御出で。』と病人は凡んど聞き取れないやうな聲でいつて、部屋を出て行つた。カテリナは未だ老人が自分の前に立つて居るかのやうに依然として空を詰めて居た。だが突然彼女の兩頬はさつと赤くなり、彼女は靜かに寢床から起きた。オルヂノフは二人が初めて會つた時の事を思ひ出した。

『あなた、又明日ね！』と彼女は異樣に笑ひ乍らいつた。『ぢやあ又明日！　御話を切つたところを覺えてゝ下さい。』『二人の内どちらかを選ぶといゝ。美しい娘さん、どちらが御前には大事なの？　それともどちらが大事でないの？』覺えてゝ下さいますか。一晩待つて下さいますか。』と、彼女は手を彼の肩にのせ、彼をいとほし氣に眺め乍ら繰り返した。

『カテリナ、行つちやあいけない、あなたの身の破滅に赴いちやいけない！　あれは氣違ひだ。』とオルヂノフは彼女の爲めにふるへ乍ら呼いた。

『カテリナ！』といふ聲が壁越しに聞えた。

『何ですつて。あの人が私を殺すとでもいふのですか。些らない！』とカテリナは笑ひ乍ら答へた。『御休みなさい。私の大事な人、私の情深い鳩、私の兄さん！』と彼女はいとほし氣に被の頭をおのが胸に押しつけて言つたが、涙が彼女の顏をうるほした。『もう涙はおしまひよ。私の愛する人、眠つてあなたの悲しみを追つ拂つて下さい、明日は機嫌よく眼を覺して下さい。』さういつて彼女は彼を強くキツスした。

『カテリナ、カテリナ！』とオルヂノフは彼女の前に跪き、彼女を引き止めやうとし乍らさゝやいた。

『カテリナ！』

彼女は振り返り、微笑みを浮べて打ちうなづき、部屋を出て行つた。オルヂノフは彼女がミューリンのところへ入り叩く物音を聞いた。彼は息を殺し耳を澄したが、何の物音も聞えなかつた。老人は默つて居た。それとも又無意識に陷つて居たのかも知れなかつた……彼は彼女のところへ行きたかつたが、足がよろ〳〵した……彼はへと〳〵になつて寢床に倒れ込んだ……

二

眼を覺して何時頃なのか長い間分らなかつた。明方なのか夕方なのか、彼の部屋は依然として暗らかつた。彼はどれ位の間眠つたのか確に分らかつたが自分の眠りが、健全な眠りでないことを感じた。氣が付いて彼は眠りや夜の幻を追ひ遣るやうに自分の顏を撫でた。だが彼が床を歩かうとすると彼は自分の體がまるでこわれてゞも居るやうに感じ、彼の手足は彼のいふことを聞かなかつた。頭は痛み、ぐる〳〵舞ひをして、寒くなるかと思ふと又熱が出たりした。意識と共に記憶は立ち返り、一瞬間に記憶の中で昨夜あつたことをすつかり經驗し直すと、彼は心が震へた。彼の胸は彼の考へに呼應して烈しく鼓動し、彼の感じは燃えて新鮮で、カテリナが立ち去つてから一晩、長い間ではなく一分間位しか過ぎ去つてないやうな氣がした。彼は自分のまなこが依然として涙に濡れて居るのを感じた――それともそれは彼の燃ゆる胸から泉の如くにほとばしり出た新しい、新鮮な涙だつたらうか。そして變な話だが、彼の惱みは彼に取つて氣持ちよくさへあつた。尤とも彼はかくも烈しき感情を又こらへることは出來ないといふ事は全身にぼんやりと感じては居たが。凡んど死を意識し、それをうれしい客に會ふ如き氣持ちで迎へる積りで居る瞬間もあつた。彼の感じは過度に緊張し、彼の情熱は眼を覺して烈しく打ち寄せ、有頂天が彼の靈をとりこにしたので命は緊張の爲めに活氣を得、今にもこわれて粉々になり、暫しゆら

めいて、永遠に消えさうに思へた。凡んどその瞬間に彼の惱みに答へ、彼の震へる胸に返答するもの丶如くカテリナの親しい耳障りの好い銀ころが鳴り響いた――喜びの時、靜かな幸福の時に人の心に知れるのか心中の音樂の如くに、彼のすぐそば、凡んと枕の上で歌が始まつたが、初めの内は靜かで悲し氣だつた……彼女の聲は或ひは高まり或ひは沈み、突然隱れるやうに消失したりして、惱める胸に絕望的に隱されたる、みたされざる、窒息させられたる欲望の惱みを優しく歌ひ、それから又夜啼鳥の如き震へ聲に流れ込み、ほしいまゝな情熱で震へ燃えて、愛の幸福の最初の瞬間の如き有頂天の眞の海、力强い限り無き音の歌にとけ込んだ。

オルヂノフにもその歌は分つた。それは單純で眞誠で、ずつと昔にぢかな穩かな純粹なはつきりした感情で作られたものだつたが、彼はそれを忘れたので、そのしらべ丈けを聞いた。歌の單純な無邪氣な文句の中から彼の胸を充すかのあこがれと反響し、彼は理解することが出來なかつたけれど、はつきり充分な意識を以て彼に反響した彼の情熱の最とも神秘な微妙さと反響する外の語か聞いた。そして或る時には彼は情熱の中で絕望的に氣絕し掛つて居るもの丶最後のうめきを聞き、それから又鎖を切つて喜んで自由に足械の除かれた愛の涯しなき大洋の中へ飛び込むもの丶喜びを聞いた。それから彼は戀人の最初の誓ひ、彼女の顏が初めて赤くなつた時の香ばしき羞恥、祈り、涙、不思議なおづ〳〵したさ丶やき、それから又、高慢で、自分の力を喜び、ヴェールも掛けず、開けつ放しで、聲高な笑ひ聲と共にどろんとした眼をきよろ〳〵させるバツカス信者の情熱を聞いた……

オルヂノフは御終ひ迄辛抱出來ず、寢床から起きた。歌はすぐに止んだ。

『御早うも、今日はも、もう遲いのよ。』とカテリナの聲が鳴り響いた。『今晩は、御起きになつて私達のところへいらつしやい。上機嫌で御眼ざめなさい。私達は御待ちして居るのよ。私も主人も二人りとも惡い人間ぢやあないのよ。あなたに欲意で任へる召使よ、若し未だ腹が立つて居るのでしたら、憎しみを愛で消して下さい、何とか機嫌のい丶ことをいつて下さいよ！……』

オルヂノフは彼女がさういふとすぐに部屋を出たが、老人の寢室へ行くのだとは凡んど意識しなかつた。戸が開いて、日光の如く輝やかしくかの不思議な主婦の黃金のほ丶笑が彼に閃いた。その時彼は彼女の外誰をも見ず、何ものをも聞かなかつた。忽ち彼の全生命、彼の喜び全體は彼の心中のある一つのもの――わがカテリナの輝かしきすがたにとけ込んだ。

『私達がさいならを交してから』と彼女は彼に手を興へていつた。『もう二度夜明けが過ぎましたのよ。二度目の夜明けが今立退かうとして居るところです。窓の外を御覽なさい。乙女の心の二度の夜明けのやうに』と笑ひ乍らカテリナは附け加へた。『初めてその寂しい乙女心が彼女の胸の中でものいふ、最初の羞恥で顏を赧める夜明、今一つは乙女が最初の恥を打ち忘れ、火の如く輝き、乙女心を窒息させて赤い血を顏に追ひやるもう一つの夜明……さあ、私達の家へ御入りなさい！　何だつて戸口に立つていらつしやるの。主人が挨拶をしたがつて居ます！』

音樂の如く鳴り響く笑ひと共に彼女はオルヂノフの手を取つて、部屋へ案內した。彼はおづし〳〵て

了つた。彼の胸に怒り狂つて居る熱も火も、一瞬間に消失し、一寸の間彼はまご〳〵して眼を伏せ、彼女を見るのが怖かつた。彼は彼女が驚く可き程美しく彼女の燃ゆるが如きまなこを正視する事が出來ないのを感じた。彼はこれ迄かくも美しきカテリナを見たことがなかつた。初めて笑ひと喜悅とが彼女の顏に閃めき、彼女の黑いまつ毛のうれしげな涙を乾して居た。彼の手は彼女の手の中で震へた。そして若し彼が眼を擧げたならばカテリナが勝ち誇つた笑を浮べ混亂と情熱とで曇つて居る彼の眼に、ぱつちとした眼を据ゑて居るのを見たことだらう。

『御起きなさいまし。』と彼女は遂に眼を覺させやうとするかの如くにいつた『私達の御客さん、兄弟見たいな御客さんに挨拶をなすつて下さい。御起きなさい。高慢な、頑固な方、さあ、起きて御客さんの白い手を取つてテーブルに座つていたゞきなさいまし。』

オルヂノフは眼を擧げたが、初めてわれに歸つた樣子だつた。その時初めて彼はミューリンのことを考へた。死が近づいた爲めにぼんやりしたやうに見える老人の眼はじつと彼を見詰めて居た。胸に痛苦を抱いて彼はこの前その眼が今のやうに苦痛と怒りとで、しかめた黑い張り出して居る眉毛越しに彼を見て居たことを思ひ出した。頭が少しくら〳〵して來た。彼はあたりを見廻し、初めていろんなことが明瞭に分つた。ミューリンは未だ寢床に寢て居たが、さつと着物も着て既に今朝起きて外出もして來たのだつた。これ迄のやうに彼は赤いきれを首の廻りに卷き着け、足にはスリツパを履いて居た。發作は止んだ樣子で只彼の顏は依然として恐しく靑く且つ黃色かつた。カテリナは彼の寢床のそばに立ち、テ

ーブルに手をついて、二人をじつと見守つて居た、だが歡迎の微笑は彼女の顏を去らなかつた。何事も彼女がサインして爲される樣な鹽梅だつた。

『あゝ！　あなたですか。』とミューリンは體を引き起し、寢床に座つていつた。『あなたは私の下宿人だ私はあなたに御許しを乞はなければなりません。いつかは鐵砲でいたづらをしたりして知らず〳〵あなたに罪を犯し惡いことをした。あなたも悲しい病氣にとつつかれて居るなんて誰が申すことが出來ませう。私には時々あるのですよ。』と彼は顏をしかめ、われともなしにそつぽを向いてしやがれた、苦しさうな聲で附け加へた。『私の病氣は戸をたゝかずに忍び入る夜のぬすつとのやうにやつて來るのですよ！いつかもすんでの事にナイフであれの胸を突き刺しさうでした……』と彼はカテリナの方に向つてうなづいていつた。『私は病人です發作が起つて、私をとらへる——いや、そんな話は止しませう。御座んなさい——これからは歡迎しますよ。』

オルヂノフは矢つ張り彼をじつと見詰めて居た。

『本當にどうぞ腰かけて！』と老人はいら〳〵して叫んだ。『腰かけて下さい。さうした方がカテリナにいゝのなら！　あなた方は同じ腹から生れた兄弟のやうですね！　戀人同志のやうに仲が好いですね！』

オルヂノフは腰を下した。

『いや大しな妹が出來ましたね。』と老人は笑ひ乍ら語を續けて、二列の白い實に丈夫な齒を見せた。『仲好くなさるがいゝ。どうです、あなたの妹さんは御美しいですか。えゝつ？　如何です。さあ、あれの

頬の燃えて居るところを御覧なさつて下さい。よく御覧になつて、あれの美しさを讃美する歌を全世界に歌つて下さい。あなたがあれの爲めに心を痛めていらつしやる事を明かにして下さい。』

オルヂノフは顔をしかめ、怒つて老人を眺めたので、老人も辟易した。盲目的な怒りがオルヂノフの心に打ち寄せた。或る動物的な本能に依つて彼は自分のそばに恐しい敵が控へて居ることを感じた。彼はわれ乍らわが身が分らず、彼の理性は彼に仕へることを拒絶した。

『見ちやあいけません。』といふ聲が脊中でした。

オルズノフは振り返つた。

『惡魔があなたを誘惑して居るのでしたら見ちやあいけません。見ちやあいけないといふのに。あなたの愛するものを憐れんで下さい。』とカテリナは笑ひ乍らいつて、突然後ろから彼の眼を兩手で蔽つた。それからすぐにその手を拂つて自分の顔を兩手で隱した。だが彼女の顔色は指をくゞつて洩れるやうに思へた。彼女は兩手を外し、やつぱり火のやうに赤面して居たが、二人の笑ひと、もの問ひたげな馬鹿に陽氣に身震ひ一つせずに對しやうとした。ところが二人とも默つて彼女を見た。オルヂノフは戀に痳痺して、かくも恐しい美しさに突き刺されたのは初てだといつたやうであり、老人は冷かにじつと見て居た彼の青さめた顔には唇が青くなり、かすかすに震へて居ることの外何にも見えなかつた。

カテリナは最早笑はずして老人のところへ行き、本や書類やインキ入れやその他テーブルの上にあつたものをすべて取拂ひ、それ等を窓敷の上に並べ出した。彼女の吐息は忙しなく不整ひで、時には胸が

苦しいやうに深い息を吸つた。一杯になつた彼女の胸は渚の波のやうに或ひは高まり、或ひは低くなつた。彼女は眼を伏せたが、その眞黑なまつ毛は輝かしい頬の上に鋭どい針のやうにきら〳〵して居た……

『年若な女王だ。』と老人はいつた。

『わが大君！』とオルヂノフは全身ぶる〳〵ものでさゝやいた。彼はおのが上に老人の眼が止つて居るのを感じてはつとなつた――その鋭どい、意地惡な、冷かに人を見下したやうな流し眼が一瞬間彼の上に稻妻の如く閃いた。オルヂノフは席から立ち上らうと思つたが、或る見えない力が彼の足を縛つて居るやうな氣がした。彼は又腰を下した。時には夢ではないかと思のて手をつねることもあつた。彼は自分が惡魔に締め殺されつゝあるやうな、眼は猶苦しい熱のある眠りの内に閉されて居るやうな氣がしただが變なことには彼は眼を覺さうとは思はなかなつた！

カテリナはテーブルから古い布を取り拂ひ、箱を開けて金をちりばめ、はでな絹糸のぬひがある立派な布を取り出して、テーブルの上に敷いた。それから戸棚から舊式の先祖傳來のものらしい玉手箱を取り出し、テーブルの眞中に据えて、そこから三つの銀の大盃を取り出した。一つは主人の分、一つは客の分、今一つは自身の分だつた。それから眞面目な、凡んど沈んだ樣子で老人と客とを見た。

『三人の内誰か他の二人に好意を持つて居ない方がありますか。』と彼女はいつた。『よし誰かゞ他の人に親しく　くとも、その誰かも私には親しいのよ。ですから、その方も私と一緒に盃を擧げるといゝわ。

あなた方の内どちらも私には本當の兄弟のやうに親しいわ。ですから私達は皆なして愛と調和とを祈つて盃を擧げやうぢやありませんか。』

『盃を擧げて暗い考へを酒の中で溺死させなさい。』と老人は變な聲でいつた。『カテリナ、御注ぎなさい。』

『注ぎませうか。』とカテリナはオルヂノフを見て尋ねた。

オルヂノフは默つて盃をさし出した。

『御待ち！　若し誰かゞ秘密と空想とを有するならば、その願望の成就せむことを！』と老人は盃を擧げ乍らいつた。

皆なは盃を鳴らして飲んだ。

『あなた、今度はあなたと一緒に飲ませて下さい。』とカテリナは老人の方を向いていつた。『若しあなたが私に溫情があるなら、私達は盃を擧げやうぢやありませんか！　私達は過ぎ去つた幸福の爲めに飲まうぢやありませんか。私達は私達が送つた年月に挨拶をしやうぢやありませんか。私達の幸福を眞心と愛とを以て祝はうぢやありませんか。あなたに私に對する溫情が御ありでしたら、あなたの盃に注がせて下さい。』

『御前の酒は強いが、御前はろく樣唇をぬらしもしないのだね！』老人は笑つて、又盃を差し出し乍らいつた。

『では私も戴きますが、あなたは飲み乾して御しまひなさい。……あなたは何だつて陰氣なことを考へていらつしやるの。陰氣な考へは胸を痛めるのが落ちですわ！　考へ事をするときつと悲しくなるわ。幸福だと考へずに暮すことが出來るわ。御飲みなさい。』と彼女は續けていつた。『あなたの考へを溺死させなさい。』

『さういふ風に防禦するからには悲しみがどつさり御前の心中に醱酵したに違ひない！　だから御前は矢庭にけりをつけたいと思つて居るのだ。一緒に飲みますよ！　ところで失禮ですが、あなたは悲しい事がありますか。』

『あつても私は自分の胸にしまつて置きます。』とオルヂノフはカテリナをじつと見詰め乍ら小聲でいつた。

『あなた、御聞きになりましたか。長い間私は自分自身のことが分らなかつた。何にも思ひ出しませんでしたが、或る時が來たらいろんなことを思ひ返しました。過ぎ去つたことを又自分の不滿な心の中でもう一度經驗しました。』

『さうだ。過去丈けを思ひ偲ぶといふことに成れば不幸だ。』と老人は夢見る如くにいつた。『過去とは何ぞ。飲み乾したる酒の如し！　過去に何の幸福があらう。上衣はもうぼろ〳〵に成つた。うつちやるがいゝ。』

『新しい上衣を算段しなくちやならないわ。』とカテリナは作り笑ひをして相槌を打つたが、金剛石のや

うな二滴の大きな涙がそのまつげにかゝつて居た。『人間といふものは一寸の間に生涯の事を忘れることは出來はしません。ところで娘心は生活に熱中して居ます――娘心と歩調をそろへることは出來はしません。私のいふことが分りましたか。御覽なさい。涙があなたの盃の中へ入りました。』

『そしてあなたは悲しみで澤山の幸福を買ひましたか。』とオルヂーフはいつたが、彼の聲は感情で震へて居た。

『ぢやあなたのところには幸福の賣物がうんとあるに違ひない。』と老人は答へた。『おせつかいにくちばしを入れなさるところを見ると』といつて彼は高慢ちきな顏してオルヂノフを眺め乍ら意地惡く、聲も立てずに笑つた。

『相應のものを買取りました。』とカテリナは苦しさうな不愉快さうな聲で答へた。『澤山だと思ふ人もあれば少ないと思ふ人もありますわ。或るものは何ものも受取らずにあらゆるものを與へ、他のものは何物をも約束しないのに、從順な心はその――他のものに從ひます！　あなた、誰も御咎めに成つちやあいけません。』と彼女は悲し氣にオルヂノフを眺め乍ら語を續けた。『人といふものはいろ〳〵ですわ。生活が面白いづくめの人を御存知でせうか。盃に一杯御注ぎ下さい。私が初めてあなたを知つた時のやうにあなたの大事の娘、あなたの温和しい、從順な奴隷の幸福を祈つて御飲み下さい。あなたの盃を御擧げ下さい！』

『それがいゝ！　御前の盃も一杯になさい！』と老人は酒を飲みながらいつた。

『御待ちなさい！　飲むことを止めて、それより一寸一言……』

カテリナはテーブルに兩肘ついて情熱的な、燃ゆるやうな眼でじつと老人を見た。異樣な決心が彼女の眼にひらめいた。だが彼女の擧動は靜かに、その所作は亂暴で、意表の外に出て、迅速だつたり、彼女はすつかり興奮して居た。それは驚く可き程だつたが、彼女の美しさは彼女の感動・彼女の活氣と共に增すやうに思へた。彼女のせはしない吐息は少しくその鼻の穴をふくらまし、白い、眞珠の如き二列の齒を露はした微笑の爲めに半ば開きたるその唇から流れ出た。その胸は高まりそのぐる〳〵卷きにした髮の毛は彼女の頭を三めぐりして、亂雜にその左の耳の上にかゝり、その燃ゆるが如き頰の一部分を蔽ひ、汗の玉が彼女のこめがみに現れた。

『あなた、私の運命を告げて下さい。御父さん、醉つ拂はない內に私の運命を判じて下さい。さあ私の白い手の平を出しました。――皆ながあなたのことを魔法使ひといふのも無理はありませんわ。あなたは書物の御研究をなすつて魔術はよく御存知ですわ！　さああなた、あはれな私の運命を聞かして下さい。だけど嘘をいつちやあ厭ですよ！　さあ、御分りに成る事をその儘聞かせて下さい。あなたの娘には幸福がありませうが。あなたは娘を許しては下さいませんか。娘の路にいけない、悲しい運命の下ることを祈らうとなさるのですか。自分の家として温かい隱れ家を持つことが出來るでせうか。それともわたり鳥のやうにいゝ人々の間に家庭を求めて廻り、結局一生涯寂しいみなし子として送るでせうか。誰が私の敵か。誰が私を愛さうと思つて居ますか。誰が私に對して陰謀を企てゝ居ますか、私の温かい

若い心は孤獨の内にその生命を開き、おしまひ迄しぼれて居ませうか。それとも仲間をみつけて、新しい悲しみの來る迄それと調子をそろへて喜ばし氣に鼓動するでせうか！　海を渡り、森を越え、如何なる青空に私の美しい鷹が住んで居るか、どうぞ教へて下さい。そして彼は熱心に仲間を探して居るのでせうか。彼は待ち焦れて居るでせうか。食ふやうに私を可愛がつてくれませうか。じきに私に倦きはしますまいか。私をだましはしますまいか。どうぞ包まず話して下さい。それから私はいつ迄もあなたと一緒に日を暮し、味氣ない隅つこに座つて不思議な書物を讀んで居なければならないでせうか。あなたに低く頭を下げ、いささらばと別れを告げ、あなたのパンと鹽とを感謝し、飲みものや食ひものを與へて下さつたこと、御話を聞かして下さつたのを感謝するのはいつの日でせうか。……だがどうぞ包まず話して下さい。嘘を吐いちやあ厭ですよ。時は來ました。立ち上つて下さいまし。』

彼女の興奮は最後に近づくにつれて愈々増大したが突然彼女の聲は彼女の心が心中の大あらしの爲めに運び去られたかの如く感動の爲めに切れた。彼女の眼は輝やき、上唇は微かに震へた。意地惡な嘲弄が一語々々の下に蛇の如く忍んで居るのが聞き取れたが、その笑ひ聲には涙の音が含まれて居た。彼女はテーブル越しに老人の方にかゞみ、そのつやのない眼をむさぼるやうにまじ〳〵と見入つた。オルヂノフは彼女が語り終ると彼女のが胸突然鼓動し出したのを聞いた。彼は彼女を一眼見ると夢中に成つて大聲を擧げ、腰掛けから立ち上らうとした。だが老人のちらりとしたべつ見が又彼をその席に結びつけた。輕蔑と、嘲弄するやうな、じれつたい、腹の立つやうな不安と、それから同時にずるい、意地惡な

好奇心、それ等が一種異樣にこんぐらがつたものが彼のちらりとしたべつ見の中にひらめいたが、それはきまつてオルヂノフを身震ひさせ、その心に不愉快と苦しみと始末におへない怒りとを充すものだつた。

考へ込み、一種悲し氣な好奇心で老人はカテリナを眺めた。彼の胸は貫ぬかれた。大變なことが語られたのだから。だが彼の顏は眉一つ動かなかつた！　彼女が語り終るとにつこり笑つたゞけだつた。

『はねの生えそろつた小鳥、はねをばた〳〵させて居る鳥！　御前は一度にいろんな事を知りたいのだね。それよりも私の盃になみ〳〵と注いでくれるといゝ！　そして先づ平和と好意の爲めに乾盃しやうでないと誰かの唇い凶眼の爲めに巧く豫言が出來なくなるから。惡魔は力强し！　罪惡は決して遠からず！』

彼は盃を擧げて飲んだ。飲めば飲む程青く成つた。彼の眼は赤い石炭のやうに燃えた。その熱を病んだ光、そして彼の顏に突然に現はれた死人の如き青白さは又病の發作が近いといふ徴候だつた。その酒は强かつたので一杯開けたらオルヂノフの視覺は段々ぼんやりして來た。彼の熱病的に燃える血は最早引つこたえることが出來ず、心臟に突進し、彼の理性をみだし昏くした。彼の不安は層一層烈しく成つた。增し行く興奮を鎭める爲めに彼は盃を滿し、無意識に又ちよび〳〵やり出したので血管中の血が更に早く走り出した。彼は錯亂したやうに成つたので、注意を極度迄緊張させたが、不思議な老人と主婦との間に起つて居ることを凡んど理解する事が出來なかつた。

老人は盃をテーブルにがしやんとたゝきつけた。

『カテリナ、注いで御呉れ！』と彼は叫んだ。『いけない娘、もう一杯注いで御呉れ。溢れる程注いで御呉れ！　年寄りを平和にして置いて御呉れ。打つちやつといて御呉れ！　さうだ。もつと注いで御呉れもつと〳〵！　一緒に飲まうぢやないか！　何だつてそんなに、ちよつぴりとしかやらないの。それとも私の眼のあやまりかな。……』

カテリナは何か返答をしたが、オルヂノフには彼女のいつたことがはつきり聞えなかつた。番人は彼女がいひ終るのを許さなかつた。彼はおのが心にのしかゝつて居ることをすつかり抑へつけることが出來ないやうに彼女の手をしつかり促えた。彼の顏は青ざめ、彼の眼は或る時はぼんやりして居るが又或る時には火の如く輝いた、彼の唇は震へて白く成り、調子のそろはない苦しさうな聲で、しかし時には異樣な有頂天の閃めきがあつたが――彼は彼女にいつた。

『御前の小さい手を私に御貸し！　御前の運命を話さうぢやないか。殘らず聞かせて上げやう。わしは實際魔法使だ。だからカテリナ！　御前のいふことは間違ひではない。御前の黃金の如き心がいつたことは本當だ。わしだけがその心の魔法使ひだ。單純な娘らしい心！　わしは御前に事實を隱しはしないだが御前に分らないことが一つある。といふのは魔法使の私は御前に知慧を敎へることは出來ない！知慧は娘が欲しがりはしない。だからすつかり事實を聞いても分らない、腑に落ちない樣子をして居る！　その心は淚にとけつゝあつても、その頭は狡猾な蛇だ。彼女は困難の間にも自分で自分の道をめ

つけて縫ふやうに進み、おのが狡猾な意志を貫ぬくだらう！　或るものは彼女は頭で獲ち得る、頭で獲ち得ることの出來ないものは男の心を美しさでくらまし、その黑いまなこで酩酊させるだらう――美は力に打ち克つ。鐵の如き心もちり〳〵に引き裂かれるだらう！　お前は惱みや悲しみを知りたいといふのか。人間の悲しみは重苦し！　だが艱難は弱き心には適しない。それは强き心の親友だ。强き心は血淚を忍びやかに流せども、恥を忘れて善き人々になぐさめを乞ひはしない。娘よ。御前の悲しみは砂につきたる城のやうだ、雨が洗ひ去り、太陽が乾かし、あらしはそを持ち上げて吹き去つて了ふ。もつと話さう。御前の運命を話さうぢやあないか。御前を愛する人ならば誰にでも御前は奴隷に成るだらう御前は自分から自由を束縛するだらう。御前は自分を質に入れて、受け出しはしないたらう。お前はいゝ時に見切りをつけることが出來ないだらう。御前は種蒔きするが、御前の破壞者が穗をすつかり取り入れるだらう！　私の優しい子供、私の小さな黃金の如き頭、御前は眞珠の如き淚を私の盃の中にこぼしたが、御前はそれに滿足することが出來なかつた――すぐに御前は百しづくも流した。快きことは更に語らず、自分の痛ましい生涯のことを誇つた！　だがそれを、といふのは淚、天の露を思ひ偲ぶ必要は御前にはなかつた。御前の眞珠の如き淚は殘酷な悲しみ、あしき空想が御前の心を嚙む悲しき夜に喜んで立ち歸るだらう。それからその淚に誘はれて外の淚が御前の温かい心にしたゝるだらう。温かい淚ではなくとけた鉛の如き血の淚が。それは御前の白い胸を血に染めるだらう。そして陰氣な日の訪れるわびしい、重苦しいあした迄、御前は小さな寢床の中で轉々とし心の血を流すが、次のあかつき迄はそ

の新しは傷を癒すことは出來ないだらう。カテリナ、私の盃に注いで御呉れ。私の鳩、もう一杯注いで御呉れ。私の賢き忠告の爲めに注いで御呉れ。何もいふ必要はない。』彼の聲は弱く、震へて來るやうに成り、泣きじやくりが彼の胸から溢れさうだつた。彼は酒を注いで、ぐいとそれを歡み乾した。それから又盃をがんとテーブルの上に置いた。彼のぼんやりしたまなこは又焰で輝いた。

『あゝ！　好きなやうに暮すがいゝ！』と彼は叫んだ。『過ぎ去つたことは過ぎ去つたことだ。この重い盃に酒を注いで御呉れ。酒が反抗的な頭を叩つ切るやうに。全心がその爲めに死ぬるやうに！　私をあかつき知らぬ長い夜に憩はせ、私の記憶をすつかり消失させるがいゝ。私はすつかり飲んでしまつたではないか。私はすつかり生きてしまつたではないか。だから商人の品物は古くなり、あんまり長い間積んで置いたので貝で呉れてやるしかない！　だけど商人は進んで捨て賣りしやうとは思はない。彼の敵の血が流されねばならず、罪なきものゝ血も流されねばならぬ。買手は手を打つ爲めには自分の命を與へなければならないのだ！　盃に一杯注いで御呉れ。カテリナ、もう一杯注いで御呉れ！』

だが盃を持つて居た手は硬く成つたやうで動かなかつた。彼の吐息は苦しく困難で、彼の頭は下つて行つた。最後に彼はその光りなき眼をオルヂノフに据えたが、眼も遂にはぼんやりして、まぶたは鉛で出來て居るやうに垂れ下つた。死んだやうな青い色が彼の顔一面に擴がつた。……暫しの間猶も物をいはうとするものゝ如く彼の唇はぴく〳〵して顫へたが突然大きな熱い涙がまつ毛に宿り、それから靜かに青い頬を走り下りた……

オルヂノフはもう我慢が出來なかつた。彼は立ち上り、よろめき乍ら、一歩前へ進み、カテリナのところへ行つて、その手を捕へた。だが彼女は彼に氣が附かない樣子で彼に見向きもしなかつた……

彼女も意識を失つた樣子で、或る一つの考へ、或る固着した考へがすつかり彼女をとりこにしたやうな鹽梅だつた。彼女は眠れる老人の胸に沈み、白い腕を彼の首に絡みつけて、輝やける、熱病やみのやうな眠を釘附けにされたるものゝ如く彼の上に据えた。彼女はオルヂノフが彼女の手をとらへたことにも氣が附かない樣子だつた。やつと彼女は彼の方へかうべを廻らして、長い間、探るやうな凝視をこらした。やつと彼女は分つた樣子で、苦しさうな驚いたやうなほゝ笑が物憂げに、いはば苦し氣に彼女の唇に浮んだ……

『行つて下さい。』と彼女は小聲でいつた。『あなたは醉つ拂つていけないんだ。あなたは私の御客さんではありません……』それから又老人の方を向いて、じつと彼を見守つた。

彼女は彼がする一息々々とを氣持好げに眺め、そのうたゝねを眠で育くんで居るかの如くだつた。彼女は息をすることも恐れて居る樣子で、一杯に成つた鼓動する胸を抑へるやうにし、その顔には狂的な尊敬が現れて居たので、絶望と激怒と、どうすることも出來ない怒りとが同時にオルヂノフの心をとらへた……

『カテリナ！カテリナ！』と彼は萬力のやうに彼女の手をとらへて呼んだ。

苦しさうな樣子が彼女の顔に現はれた。彼女は又頭を擧げて彼を嘲弄的に、人を見下げたやうな高慢

ちきな顔して見たので、彼は殆んどじつと立つて居る事が出來なかつた。それから彼女は眠つて居る老人を指し、彼の敵の愚弄が彼女の眠に變つたかのやうに彼女は又オルヂノフに咎めるやうなべつ見を向けたが、それは彼の胸に氷のやうな震へを送つた。

『何だつて？奴は私を殺すだらうね。』とオルヂノフは激怒の爲めにわれを忘れて叫んだ。或る鬼神が彼の耳に彼は彼女を了解したとさゝやいたやうな氣がした……そして彼は心からカテリナの固着した觀念を嘲笑した。

『若しあなたが私の靈が欲しいのでしたら、私はあなたの商人からあなたを買ひ取りませう。なあに、奴は私を殺しはしますまい！……』オルヂノフの全身を凍らせた不變の笑ひがカテリナの顔に殘つて居た。その限りなき諷刺が彼の心を引つ裂いた。自分で自分のして居る事が分らず、凡んど意識しずに彼は壁に倚つ掛つて釘から老人の素敵な舊式のナイフを外した。驚いたといふ樣子がカテリナの顔に浮んだやうに見えたが同時に怒りと輕蔑とが同じやうな力で彼女の眼に寫つた。オルヂノフは彼女を見る氣持ちが惡く成つた……彼は誰かゞ狂亂して居る彼の手を押して、狂的なことをしろと促がして居るやうな氣がした。彼はナイフを拔き取つた……カテリナはじつと息を殺して彼を見守つて居た……

彼は老人をちらりと見た。

その時彼は老人の眠が開いて笑ひ乍ら彼を見て居ると思つた。二人の眠がぶつかつた。暫らくの間オルヂノフは彼をじつと見詰めて居た。……突然彼は老人の顔の全體が笑ひ出し、惡魔的な、靈を凍らす

やうなくす〳〵笑ひが遂に部屋に反響したと思つた。或る恐しい、暗い考へが蛇のやうに彼の頭の中に匐ひ込んだ。彼は身顫ひした。ナイフは彼の兩手から落ち、がちやんと音立てゝ床に落ちた。カテリナは茫然として居るのと、夢魔、重苦しい動かすことの出來ない幻とからさめたものゝ如く叫び聲を擧げた……老人はひどく色青ざめ、寢床から靜かに起き上つて、ナイフを荒々しく部屋の隅に蹴り込み、カテリナは色青ざめ、死んだやうに成つて動かずに立つて居た。彼女のまぶたは閉りつゝあつた。彼女の顔はぼんやりした、引つこたえる事の出來ない苦痛で震へた。彼女は顔を兩手で隱し、心を引き裂くやうな叫び聲を擧げて殆んど息も絕え〳〵に成つて老人の足下に倒れ込んだ……

『アリヨーシヤ、アリヨーシヤ！』といふ聲が彼女のあへいで居る胸から出た。

老人は彼女をその力强い腕に抱いて、凡んど壓し潰さむ許りに胸に抱き締めた。だが彼女が彼の胸に頭を隱すと、老人の顔は動いて遠慮のない、ぞう〳〵しい笑ひに變つたのでオルヂノフの心は恐怖で壓し潰された。あはれな、がつかりした心の欺瞞、策略、冷たい悟氣深い壓制——それこそ恥かしくもなくあらゆる假面を投げ捨てたかの笑での内に彼が讀んだものだつた。

『彼女は氣違ひだ！』と彼は木の葉の如く打ち震へ、恐怖で痳痺して家を驅け出した。

三

あくる朝八時にオルヂノフは色青ざめ、心は亂れ、昨日の興奮の爲めに未だぼんやりしてヤロスラフ・イリイツチのところの戸を開けたが（何故か知ら自分でも分らなかつたが、彼に會ひに行つた。）その部屋にミューリンが居るのを見ると仰天してよろ〳〵後退りし、戸口に石化したやうに成つて立つた。老人はオルヂノフよりももつと色青ざめ、ひどく體工合が惡くて凡んど立つて居ることも出來なかつた。それにも拘らず――ヤロスラフ・イリイツチは訪問して呉れたことを非常に喜んで座れとすゝめたに拘らず、老人は座らうとはしなかつた。ヤロスラフ・イリイツチもオルヂノフを見て驚きの叫びを擧げたが、凡んど同時に彼の喜びは消失し、テーブルとそれに隣れる椅子の眞中で突然當惑にとらへられた。何といつていゝか、どうしていゝか分らなかつた樣子ではあつたが、こんな困難な場合に煙草をくゆらし、客に自分で智惠をしぼつて何とか切り拔けたらいゝといつたやうに放つて置くのは失禮だといふことを充分に感じた。而かも（それ程彼は混亂して居た。）彼は一心に、實際一種の熱心ですば〳〵煙草をくゆらして居た。オルヂノフは遂に部屋へ入つた。彼はミューリンをちらりと見たが、前日の意地惡なほゝえみのやうなものが老人の顏をよぎつた。それは今日も亦オルヂノフを激怒で身震ひさせた。だがあらゆる敵意はすぐに消失し水に流れ、老人の顏は全く近寄ることが出來ない、控え目な樣子に成つた。彼はオルヂノフに低く頭を下げた……といつた譯でオルヂノフはやつと夢が覺めたやうな氣がした。樣子が知り度くて彼はじつとヤロスラフ・イリイツチを見たが、彼は落附がなく、混亂し出した。

『入り給へ。』と彼はとう〳〵いつた。『入り給へ。入つて僕に名譽を與へて呉れ給へ。そして、これ等の

日用品に、何の――何のしるしをつけて呉れ給へ……』とヤロスラフ・イリイツチは眞紅なばらのやうに赤く成り乍ら部屋の片隅を指していつた。まご〳〵し、いら〳〵して、彼の世にも力ある語ももつれ火を失ひ、彼は大きな音をさせて部屋の胴眞中へ椅子を動かした。

『御邪魔に成らなければいゝが』とオルヂノフはいつた。『二分間許り……』

『飛んでもない?』どうして邪魔なものか。まあ一抔御茶を飲んで貰はうぢやないか。おい誰か居ないか……あなたも御茶を飲んで下さるでせう。』

戴きますといふしるしにミューリンはうなづいた。

ヤロスラフ・イリイツチは召使を呼び、入つて來ると、もう三抔つくつて來いと嚴重にいひ渡してからオルヂノフのそばに腰打ち掛けた。暫らくの間彼は石膏の小猫見たやうに、左右に――ミューリンからオルヂノフ、オルヂノフからミューリンといつたやうにかうべを廻らした。彼の立場は極めて不愉快だつた。彼は何か、少なくとも一方に、彼の考へで極めて優美なことをいひたさうな樣子だつた。だが如何に努力しても何かいふ事が全然不可能だつた……オルヂノフももじ〳〵して居た。二人が一緒に話し出すこともあつた……ミューリンは默つて二人をめづらしさうに打ち守り、ゆつくり口を開いて、齒を現はした……

『私がやつて來たのは』とオルヂノフは突然いつた。『ある非常に不愉快な事情の爲めに、今の宿を去らなければならなくなつて……』

『まあ、何て變なことだらう?』とヤロスラフ・イリイツチが突然口をはさんだ。『白狀するがこの御老人が今朝君の意向を話して下さつた時にはあつけに取られて了つたよ。だが……』

『話したのですか』とオルヂノフは驚いてミューリンを打ち眺めていつた。

ミューリンは顎ひげを撫でゝこつそり笑つた。

『さうだ。』とヤロスラフ・イリイツチが答へた。『尤とも僕の間違ひかも知れないが。だが僕は敢へて君にいふが――僕の名譽に掛けて責任を持つことが出來るがこの御老人のおつしやつたことには君に對する誹謗的なことはちつともなかつたよ……』

かういつてヤロスラフ・イリイツチは赤面し、努力しておのが感動を鎭めた。ミューリンは心行く許り二人の混亂を打ち守つてから、一歩前へ出た。

『かうなんですよ。』と彼はオルヂノフに丁寧に御辭儀して語り續けた。『この方にも失禮ですが、あなたのことで御心配を願つた次第で。御承知の通り――あなた御自身御分りでせうが――カテリナも私も、即ち私達はあれでしたら氣持ちよく、心から喜んで――何にも申すことはないのですが。――私の生活の仕方、これはあなたも御存知に成り、御分りに成つてる通りですが、私達が皆な神樣に御願ひするのは何よりも平和に暮させて下さいといふ事ですから……まあ外のことはあなたも御自身御分りでせうが――泣き言を申さなければ御分りに成らないでせうか。』かういつてミューリスは又顎ひげを袖でふいた。

オルヂノフは凡んど病人見たいに成つた。

『さう〳〵、僕がこの方の事を君に話したね。この方は病氣なのだ。といふのはこの Malheur だ。僕は佛蘭西語で話し度いのだが、許してくれ給へ。どうもすら〳〵とやれないのだ。といふのは……』

『成る程……』

『さうなのだ。といふのは……』

オルヂノフとヤロスラフ・イリイツチとは御互ひに輕くうなづき合つたが、二人は謝罪するやうな笑ひで混亂を隱した。實際的なヤロスラフ・イリイツチはすぐに恢復した。

『僕はこの正直な方に悉しい事を伺つて居たのだ。』と彼は語り出した。『御話に依るとこの婦人の病氣は……』かういつて優美なヤロスラフ・イリイツチはその顏に現はれた輕い當惑を隱さうと思つたのだらう、せか〳〵と物問ひ度げにミューリンを見た。

『え、家の御上の……』

優美なヤロスラフ・イリイツチは別に爭ひはしなかつた。

『御上さん、といふのは今迄居た家の主婦、何といつていゝか分らないが……あのね、あの御上さんは病人で……君の勉强の邪魔をするといつて居られるさうだし、この方も……いや君は僕に重大な出來事を隱して居たね!』

『何をさ。』

『鐵砲のことさ。』とヤロスラフ・イリイツチはその親しいテノールの中に優しく響くほんの少し許りの咎責が籠つた世にも甘つたるい調子で凡んどさゝやくやうにいつた。

『だがね』と彼は忙しなく附け加へた。『この方がその事はすつかり許して下さつた。そして君はこの方の對する過失を勘忍して上げて立派な振舞をしたね。誓つていふが、僕はこの方の眼に涙が宿つたのを見たよ。』

ヤロスラフ・イリイツチは又赤く成り眼は輝やき、感動して椅子の中で體を動かした。

『私、といふよりも私達、いやあなた、實際私と家の御上とは祈禱をする時にあなたのことを祈り添へますよ。』とミューリンはオルヂノフに向ひ、彼を打ち眺め乍ら語り出したが、ヤロスラフ・イリイツチは彼のいつもの激動に打ち克つた。『私が申し上げなくとも御存知でせうが、あの女は病身の馬鹿な女です。それに私ももう足が利かなくなるでせう……』

『えゝ、私はそのつもりで居ます。』と、オルヂノフはじれつたさうにいつた。『どうか――いや分りました。私はすぐに……』

『いや全たく私達はあなたの御親切を非常に有難く思つて居るのですよ。』(といつてミューリンは極く低く頭を下げた。)『そんな事を私は申し度いと思つて居たのぢやありません。一言申し上げたいことがあつたのです。あの女は凡んど目分の家から、といふのは遠くから、よく云やうに山を越え海を渡つて私のところへやつて來たのですよ。私達の話を輕蔑なさらないやうに御願ひ致します。私達は無智な人

間ですから――小さな子供の頃からあの女はあゝいふ風でしたよ！ 頭が病的で氣短かで、彼奴は森の中で成長し、船頭や職工の間で百姓に成りました。それから彼奴の家が燒けて、母親は燒け、父親も燒け死にました。――彼奴はあなたに何をいふか知れませんが……私はおせつかいはしませんが、モスコウの醫務局で彼女は診察しました。ね、彼奴はもうとても治らないのですよ。彼奴に殘つて居るのは私丈けで彼奴は私と一緒に住んで居るのですよ。私達はその日〳〵を暮して神樣に御祈りをして、全能者にすがつて居ます。何事でも私は彼女の邪魔をした事はありません。』

オルヂノフの顏は一變した。ヤロスラフ・イリイツチは二人を次々に見た。

『ですけれど、それが私の申し上げたいと思つて居たことではありません。……さうぢやないのです！』とミューリンは重々し氣に頭を振つて訂正した。『あの女は何といつていゝか、そゝつかし屋で、風車見たいで、愛す可き、一徹なたちで、しよつ中戀人を欲しがつて居るのですよ。――そんな語葉使ひを許して下さるなら――そして誰かを愛することをね。その點では彼女は氣違ひですよ。私は御伽噺をして御機嫌を取り、それに全力を盡して居ります。私は彼女が――馬鹿なことをいふのを御許し下さい。』とミューリンは頭を下げ、顎ひげを袖で拭つて語り續けた。『私は彼女があなたと仲好しになつた次第を承知して居ります。あなたは、いや、あなた樣は愛の誓ひを抱いて彼女に近附かうとなさりました。』

ヤロスラフ・イリイツチは眞赤になつて咎めるやうにミューリンを見た。オルヂノフは凡んど席に落ちついて居る事が出來なかつた。

『いゝえ……さうぢやありません……私は飾らずに申し上げますが、私は百姓です。私はあなたに御仕へ申します。……勿論私達は無知な連中です。私達はあなたの召使ひです。』と彼は低く頭を下げていつた。『私の家内も私も心を籠めてあなた様の爲めに祈ります……私達に何が要りませう。丈夫で食べるものが充分にあれば、私達はこぼしはしません。だが私はどうしたら宜敷いでせう。首くゝるより無いでせうか。生活とは如何なるものかあなた様は御存知ですから、私達を憐れんで下さるでせう。だが若し彼女にも戀人が出來るとするとどうなることでせう！……がさつな言葉を御許し下さい。私は百姓であなたは紳士です……あなた様は御年若で、見識があつて氣短かな方、彼女は御存じの通り馬鹿なねんねで——容易に罪惡に落つこちます。彼女は可愛いらしい娘つ子で、ぱら見たいで美しいが、私はしよつ中病氣して居る老人です。いや惡魔があなた様を誘惑したらしい。私はしよつ中御伽噺をして彼女の御機嫌を取つて居ます。だが、私達——私の家内と私とはどんなにかあなた様の爲めに御祈りをすることでせう！　どんなにか私達は祈ることでせう！　ところで彼女が可愛いらしいにしてからが、あなた様に取つて何でせう。可愛いゝにしてからが矢つ張り彼女は普通の女、洗つてない百姓女、馬鹿な田舍娘、私見たいな百姓の相手で御座いますよ、あなた見たいな紳士の方が百姓なんかと仲好くなさる可きではありません！　ですけど、彼女と私とはあなた様の事を神様に祈ります。どんなにか私達は祈ることでせう！』

かういつてミューリンは極く低く頭を下げ長い間、猫背中になつて、のべつに袖で顎ひけを拭つて居

た。

ヤロスラフ・イリイツチはどうしていゝか分らなかつた。

『さうだ。この方が』と彼は最後に言た。『好ましくない出來事を話して下さつたのだ。僕は何もこの方の御つしやることを信じた譯ではないが、この方に聞いたところに依ると君は未だ病氣だてんぢやないか。』と彼は、同情の涙に充ちたるまなこで當惑し切つて居るオルジノフを打ち眺め、忙しなくくちばしを入れた。

『幾何程借りがありませうか。』と、オルヂノフは忙しなくミューリンに尋ねた。

『あなた様は何をおつしやるのです。御止しなさい。私達はユダではありません、あなたは私達を侮蔑なさいますね、私達だつたらそんなことをいふのを恥じます。私や彼奴が何かあなたに不愉快を與へましたか。』

『だがこれは全たく變てこですよ。この方はあなたから間借りをしたぢやありませんか。それをあなたが言はるといへば、あなたはこの方を侮蔑するのだとは思ひませんか。』とヤロスラフ・イリイツチはミューリンに御前の仕草は可笑しな、失禮なことだといふことを敎へやうと思つて口をさしはさんだ。

『だが決してさうぢやありません！　何とおつしやるのです。あなた様を喜ばす爲めにしなかつたことが何がありませう。私達は私達の全力を盡したぢやありませんか！　まあ私のいふ事を御聞きなすつて下さい、主があなた様にめぐみを與へ給はむことを！　私達は不信心者か何かでせうか、何事もなけれ

ばあなたは私達と一緒に住み、私達と一緒に召し上り、あそこに寢ころがつて居て下さつて差しつかへなかつたのですよ。歡迎したのですよ。私達は何も申さなかつたでせう。何もいふ必要がなかつたでせう。だが惡魔があなたを誘惑しました。私は病人で、家のも病人です。どうしたらいゝでせう、あなたにかしづくものが誰も無かつたのですよ。でなかつたら、私達は心から喜んだ事でせう。けれども、家のと私とはあなた樣の爲めにどんなにか祈る事でせう。どんなかにか私達はあなたの爲めに祈ることでせう！』

ミューリンは腰を屈めて御辭儀した。ヤロスラフ・イリイツチの喜ばしさうな眼に涙が浮んだ。彼はじつとオルヂノフを見た。

『何といふ寛大な性質だらう！ 露西亞の人民には何といふ神聖な親切が見出される事だらう。』

オルヂノフはきつとなつてヤロスラフ・イリイツチを打ち守つた。

彼は凡んど恐怖を感じたるもゝ如く、ヤロスラフ・イリイツチを頭のてつぺんから足の爪先まで打ち守つた。

『さうなんです。私達は親切といふことを尊とみます。實際尊とみます。』とミューリンは顎ひげを袖で擦つて肯定した。『實際、私もそんな事を考へたのですよ、本來ならばあなたを御客さんとして歡迎したのですよ。實際歡迎したのですよ。』と彼はオルヂノフに近附いて、語を續けた。『何もいけないことは無かつたのですよ、外の時だつたら私は決して何も申すことは無かつたでせうが、罪惡といふものは大き

な誘惑物で、家内は病氣して居ますからね。あゝ、家内さへ居なかつたら！ 例へば若し私一人だつたとしたら、どんなに私はあなた樣を喜んだことでせう。どんなに私はあなたにかしづいたことでせう。あなたにかしづかなくつてどうしませう！ あなた樣を尊敬せずして誰を尊敬しませう。私はあなたの御病氣を治したでせう。私は術を知つて居ますから……あなたは私達の御客さんになつて下さつたことでせう。本當ですよ？……』

『なる程。さういふ、何の術があるだらうか。』とヤロスラフ・イリイツチはいつたが中斷した。

オルヂノフが今さつき、ヤロスラフ・イリイツチをひどく驚いて見上げ見下したのはよくないことだつた。

彼は勿論非常に正直な尊敬す可き人だつたが、今や彼はすべてを了解した。それはオルヂノフの立場が非常に困難だつたといふ事に歸す可きものだつた。彼は笑つて了ひ度かつたのだ！ 若し彼がオルヂノフと二人丈け居るのだつたら、ヤロスラフ・イリイツチは控えやうとはしずにわつと笑ひ出したに相違ない。しかし、それも紳士らしくやつたことだらう。彼は笑つてからオルヂノフの手を優しく握り締め、心つから彼に、私は君に倍の尊敬を感じる、どんなことでも許すよといつて……勿論、君は若いよ等とはいはなかつたことだらう。だけど、今は二人切りでないので、例の優美な感情の爲めに、彼は世にも困難な立場に居り、凡んどどうしていゝか分らなかつた……

『術といふのは煎藥のことですよ。』とミューリンは附け加へていつた。ヤロスラフ・イリイツチの無雜

作な叫び聲の爲めに彼の顏には震へが現れた。『馬鹿な百姓の私が申し上げる事ですが』ともう一歩進んで語を續けた。『あなたは書物を讀み過ぎましたよ。私達百姓の間にある露西亞の諺にかういふのがあります。『才知が知慧を犯した』つてね。……』

『分りました。』とヤロスラフ・イリイツチがきつとなつていつた。

『僕は失敬する』とオルヂノフはいつた。『ヤロスラフ・イリイツチ、有難う。又やつて來る。又きつとやつて來るよ。』と彼は、もつと彼を引き留める事の出來なかつたヤロスラフ・イリイツチのいつもに倍した禮儀に答へていつた。『さよなら。さよなら。』

『失禮致します。私達を御見忘れのないやう。又あはれな罪人の私達を御訪ね下さいまし。』

オルヂノフはその外には何も耳にしなかつた。彼は亂心したもの丶如く表へ出た。彼は辛抱が出來なくなつた。彼は粉微塵になつたやうに感じ、彼の心は痺れ、彼はぼんやり、病氣のとりこになつたことを感じたが、冷たい絶望が彼の心に君臨し、彼は只漠然とした痛みが彼を壓し潰し、へと〳〵にさせ、彼の胸を嚙むのを感じ、彼はその時死に度いと願つた。彼は足下が危なくなつたので、垣根のそばに座つたが、通行人、彼のぐるりに集まり出した群衆、並びに物好きな連中の質問や叫び聲には氣も留めなかつた。ところが突然、がや〳〵いふ聲の中、自分の體の上に、ミューリンの聲が聞えた。オルヂノフは頭を擧げた。實際かの老人が彼の眼の前に立つて居たが、彼の青白い顏は考へ深さうで、威嚴があつて、さつきヤロスラフ・イリイツチのところで下品な道化芝居を打つた人とはまるで別人の觀があつた。

オルヂノフは立ち上つた。ミューリンは彼の腕をとらへ、彼を群衆の外へ連れて行つた。『あなたは所有品が欲しいのでせう。』と彼は横合からオルヂノフを見ていつた。『御歎きなさるな。』とミューリンは叫んだ。『あなたは御年若だ。何を歎くことがありませう。……』

オルヂノフは返答をしなかつた。

『御腹立ちですか。……きつと今あなたはひどく怒つていらつしやるに違ひない……だけどそれは無理ですよ。誰だつても、自分の品物は守護しますもの！　私にはあなたが分りません。』とオルヂノフはいつた。『私はあなたの秘密を知りたいとは思ひません。だけど、彼女は、彼女は？……』と彼はいつたが眼から涙が迸り出た。風が次から次と、その頰から涙を吹き飛ばした。……オルヂノフはそれを手でふいたが、彼の所作、彼の眼、彼の青い唇の無意識の動きは、――それ等はすべて狂氣の如く思へた。

『私は最早あなたに申し上げました。』とミューリンは眉をしかめていつた。『彼奴は氣違ひだつて事をね！　何で彼奴は氣狂ひになつたか。……そんな事を知つてどうするのです。だけど私に取つては、それでも矢つ張り可愛いのです！　私は彼奴を自分の命よりも愛しました。ですから、彼奴を誰にもやる事は出來ません。私のいふ事が分りましたか。』

オルヂノフの眼には一瞬間火のやうな輝きが見えた。

『だが何だつて私は……何だつて私は自分の命を失つたも同樣になつたのでせう。何だつて私の胸は痛むのだらう。何だつて私はカテリナを知つたのだらう。』

『何ですつて。』といつてミューリンは笑つたが考へ込んだ。『何故といつたとて、私には何故か分りません。』と彼は遂にいつた。『女の心といふものは海のやうに深くはありません。あなた、それを知る事が出來ます。ですけれど、女の心といふものはずるくて、强情で、生命に充ちて居ます！　が欲しいものはすぐに得たければ止みません！　あなたに御聞かせ申した方が宜敷が、彼女は私を捨てゝ、あなたと一緒に何處かへ行かうと思つたのですよ。彼女はこの老人に厭氣がさしたのです。彼女は私と一緒に暮して得ることが出來るものをすつかり得て了ひました。あなたは最初つからあれの氣に入つたらしい。尤とも誰が氣に入つたつて差し支への無いことですけれど……私は彼女の事はちつとも反對しません。あれが鳥の乳が欲しいといへば、私は鳥の乳を取てやります。さういふ鳥が居ないなら、乳を出す鳥を拵へてもやります。彼女は彼女の思ふ通りにしますが、彼女自身、自分の心が何にあこがれて居るか知らないのです。ですから、何事もこれ迄通りの方がいゝと思ひました！　あゝ、あなたは非常に御年若だ。あなたの心は未だ、涙を袖で拭つて居る、見棄てられた娘のやうに燃えて居ます！　まあ私のいふ事を御聞きなすつて下さい。弱い人間といふものは一人で立つことが出來ません。彼に何もかも與へて御覽なさい。向ふから返しにやつて來ますから。彼に世界の諸王國の半分を所有させて御覽なさい。やつて御覽なさい。どうすると思ひますか。彼はすぐにあなたのスリツパの中に隱れるでせう。彼はそれ程小さくなるでせう。弱い人間に自由を與へて御覽なさい。彼は自分からそれを縛つて、あなたに戻しますよ。馬鹿なものには自由は無用です！　あんな風では生きて行かれやしません。こんな事をいふの

は、あなたが非常に御若いからですよ！　あなたは私に取つて何でせう。あなたはいらしつて下さつてそれから出て行かれた。あなたであらうと誰であらうと同じです。私は初めつからかういふ事になるだらうといふことを知つて居ました。誰も彼女に反對することは出來ません。誰も彼女に反對するやうなことをいふ事は出來ません――若し幸福を亂されまいと思へばね。ですけれど』とミューリンは考へ乍ら語を續けた。『診にもいふ通り、どんな事がおきるかも知れません。人間といふものは怒ればナイフを引つつかむ事もあるし、刄物を持たぬものが、素手であなたの體の上に眠りの如く忍びやかにのしかゝつて、あなたののどを齒で食ひ切ることもありませう。だが、あなたの手にナイフを持たせ、敵に胸を擴げさせてあなたの前に突つ立たせて御覽なさい。きつとあなたは後ずさりするでせう。』

二人は庭へ入つた。韃靼人は遠方からミューリンを認めて、彼に向つて帽子をぬぎ、こつそりオルヂノフを打ち守つた。

『君の御母さんは何處に居るの？　家かね？』とミューリンは彼に向つて叫んだ。

『えゝ。』

『御母さんにこの方の引つ越しの手傳ひをして呉れといつて呉れ。すぐにだよ！』

二人は階段を上つて行つた。實際門番の母親らしい年取つた召使ひがオルヂノフの荷物を集めて、不平だら〳〵にそれを大きな束にこさへた。

『一寸待つて下さい。外に未だあなたのものがありますから持つて來ます。あちらにあります……』

ミューリンは自分の部屋へ行つた。暫らくして彼は戻つて來て、オルヂノフに、絹や打紐の縫ひが一杯に入つて居る立派な蒲團、彼が病氣の折にカテリナが彼の頭の下に宛がつた蒲團を與へた。

『これはあれの送り物です。』とミューリンはいつた。『それでは失禮。御機嫌よく。まあうろ〳〵していらつしやらないやうに。』と彼は聲を低くし、父親らしい調子で附け加へた。『でないといけない事があるから。』

彼は自分の止宿人を怒らせやうと思つて居た譯でないことは明かだつたが、彼がオルヂノフに最後のべつ見を投げた時、知らず〳〵彼の顏に烈しい惡意の輝やきが見えた。『いやな奴だ。』とでもいつたやうに彼はオルヂノフの後から戸を閉めた。

二時間と經たない內にオルヂノフは獨逸人シュビースの家に引つ越して居た。チンヘンは彼を見て驚いた。彼女はすぐに御機嫌はいゝかと尋ね、體の工合の惡いことを知ると、一心に彼を介抱した。

かの年取つた獨逸人はオルヂノフが前金で拂つた間代が丁度今日でなくなつたので、內へ新たに貼札を出しに行かうと思つて居たところだといふ次第を優しく話した。その老人は機會を逸しず、遠廻しに獨逸人のきちようめんなこと、正直なことを賞めた。その日オルヂノフは病氣に成つたが、三ケ月後に初めて彼は床を離れることが出來た。

段々彼はよく成つて、外出するやうに成つた。獨逸人の宿に於ける日々の生活は平穩で單調だつた。その老人には別に特別な性質はなく、可愛らしいチンヘンは理想的な女だつた。だがオルヂノフには人

生が永遠に色あせたやうな氣がした！　彼は夢見勝ちに成り、怒りつぽく成つた、彼の感じ易い性質は病的に成り、いつの間にか鬱々とした、怒りつぽいヒボコンドリヤに陷つた。幾週も本を開かないこともあつた。未來は彼に閉され、金はなくなる、彼はあちゆる努力を捨てゝ、未來のことを考へるもしなかつた。學問に對する、昔の、熱につかれたやうな熱心、自分の創造に關する昔の幻が過去からはつきり頭を持ち上げる事もあつたが、それ等は彼の精神的の力を抑壓し、窒息させるに過ぎなかつた。彼の心は働らかうとはしなかつた。彼の創造的な力は停車した。それ等の幻は彼の想像の中で故意々々巨人に成つて、おのが創造者の無能を嘲けるやうに思へた。悲しい時には彼は自分を、內所で敎師の魔術の語を覺えたが、篩に水を持つて來いといつて、『もうよろしい！』といふ語を忘れたので、水を飲んでむせぶ魔法使の弟子と比較せずには居られなかつた。或ひは完全な、獨特な、獨立した考へが實際彼の心中に存在したかも知れなかつた。或ひは彼は學者に成るやうに運命附けられて居たかも知れなかつた。少なくとも昔は彼はさう信じて居た。眞誠な確信は未來を保證するもの。ところが今は彼自身自分の盲目的の確信をあざ笑ひ、一歩も前進しやうとしなかつた。

六ケ月前には彼はへと〳〵に成る迄勉强し、創造し、ある仕事のスケッチを紙に書き留めたりして居たが、（彼は非常に若かつたので）非創造的な時には、彼はその上に世にも堅固な希望を築いて居た。それは敎會の歷史に關した仕事で、彼の熱烈極まる確信はその中に表現されることに成つて居た。今や彼はその計畫書を讀み直し、いろ〳〵書き代へ、考へ直し、又讀んで見て、いろ〳〵調べたが、その古跡

に新しいものを建設せずに遂にその考へを斥けて了つた。だが神秘主義、宿命論に似たもの、神秘なものに對する信仰が彼の心の中に入り出した。この不幸なるものはおのが苦痛を感じて、神に彼を癒すことを願つた。この獨逸人の召使ひで、信神深い年取つた露西亞の婦人はさも面白さうに、彼女の溫和しい下宿人が祈る話、彼が何時間もぶつ續けに意識を失つたるものゝ如く教會の敷石に横つて居る話をするのであつた……

彼は誰にも自分の事は話さなかつた。だが時々、殊に、教會の鐘の音が彼に——初めて彼の胸が痛み彼に取つて新しい感じで與へた時、何もかも打ち忘れ、彼女のおづ〳〵した胸の鼓動の外何も耳にせず神の家で、彼女のそばに跪いて居た時、彼の寂しい生活にもえ出した新しい、輝しい希望を有頂天と愛の涙で洗禮した時のことを思ひ起させると、とこしえに癒えぬほど傷つけられた彼の心に嵐が起り、彼の心は震へ、又しても愛の惱みが焦すやうな火で、彼の胸に輝やき、彼の胸は悲しみと情熱とで痛み、彼の愛は悲しみに連れて增すやうに思へた。屢々何時間も打つ續けにわれを忘れ、おのが日常生活を忘れ、世界のあらゆるものを打ち忘れて、同じところに、ぽつねんとし、鬱々として座つて居ることもあつた。絶望したやうに頭を打ち振り、だんまりの涙を流して、小聲で、

『カテリナ、私の大事な鳩、私の唯一つの愛す可き妹！』といふのであつた。

或る恐しい考へが屢一層彼を苦しめ出し、いよ〳〵はつきりとした姿で彼を追つかけ、毎日段々目鼻の附いた、實際的な姿と成つて彼の前に現れた。彼は想像した。そして遂に彼はそれをすつかり信じ切

つた。彼はカテリナの理性はしつかりして居るが、ミューリンが彼女を『弱い女』といふのは當つて居ると思つた。彼は或る神秘、或る秘密が彼女をかの老人に結びつけ、カテリナは純潔な鳩のやうに無辜だけれど、彼の手中に入つたのだと思つた。彼等は如何なる人間だらう。彼は知らなかつたが、彼はあはれな、防禦することの出來ないものに對する洪大な、壓し潰すやうな專制をしよつ中幻に畫き、激怒し、力無き怒りで打ち震へた。彼は彼女の突然眼を覺した靈のおど〳〵した眼の前にその墮落の觀念が巧みに差し出され、あはれた弱い心が悪賢こく苦しめられ、事實が彼女に對してはねじらされ、いざといふ時に故意と盲目にされ、彼女の惱める情熱的な心のこれ迄に覺えのない傾向が巧みに煽られ、段々自由な心はその翼をはさみ取られて、遂には抵抗も、自由な生活に對する自由な運動も出來なくなるのを想像した。

段々オルヂノフは一層交際嫌ひに成つて行つた。公平にいふと、彼の獨逸人達は彼のその傾向をはゞまなかつた。

彼は當てなしに町を歩き廻ることが好きだつた。彼は唯それが好きで、遠い、ひつそりした、人が行かないところを選んだ。ある雨の降る、氣持ちの悪い春の夕に、彼の好きな裏路て彼はヤロスラフ・イリイッチに出くはした。

ヤロスラフ・イリイッチは眼につく程瘠せて居た。彼の親しいまなこは曇り、彼はまるでがつかりして居るやうに見えた。彼は何か大至急を要する仕事の爲めに全速力でかけて居た。彼はずぶ濡れ、泥だ

らけで、一晩中滴が、彼の非常に似つかはしくはあるが、今は青い鼻に變てこにかゝつて居た。その上彼は頰ひげを立てた。

その頰ひげと、それからヤロスラフ・イリイッチが古い友達に會ふことを避けやうとするやうに彼をちらりと見たことがオルヂフノをびくりとさせた。可笑しな話だが、そんな事が彼の感情を害した。その時迄彼は同情の必要を感じはしなかつたのに。實際彼はこの男が以前の如く單純で、親切で、無邪氣で、思つたことをいひ、少し抜けては居るが、幻影消滅、常識面をちつともしない方がいゝと思つた。もとは好きだつた馬鹿者が、馬鹿だから突然利口さうな顏をするやうに成るのは徹底的に不愉快つただ。とはいへ、彼がオルヂノフを見た疑ひ深い眼付きはすぐに消えた。

彼の幻影消滅に拘らず、彼は依然として昔の作法は保つて居た。それは私達が皆知つて居るやうに墓場迄人間に御伴して行くもの。今も猶彼は一心にオルヂノフの信任を得やうと努めた。先づ彼は非常に忙しいといひ、それから御互ひに暫らく會はなかつたねといつたが、突然話が變な方へそれた。

ヤロスラフ・イリイッチは一般に人類の僞り多きことを語り出した。この世の幸福の移り易きこと、空の空なること、彼は萬更冷淡ではなしにプーシュキンのことに迄いひ及ぼし、皮肉を含んで知り合ひのことに就いてのべ、この世の中には眞の友情といふものはないし、これ迄もなかつたが、友情といふものゝ僞り多きものなること、不信なるものなることを最後にのべた。簡單にいふと、ヤロスラフ・イリイッチは利口に成つた。

オルヂノフは彼に反對はしなかつたが、自分の親友を葬りでもしたやうに解もなく悲しく成つて來た。

『あゝ！　話すことを忘れて居た。』とヤロスラフ・イリイッチは何か非常に面白いことを思ひ出したやうに突然語り出した。『話があるのだ！　内所だぜ。君は下宿して居た家を覺えて居るかね。』

オルヂノフはびくりとして靑く成つた。

『まあ聞いて呉れ給へ。つい近頃ぬすびとの一群があそこで見つかつたのだ。といふのは、本當だぜ、立派な山賊の團體なのだよ。密續者、何か知らぬが、いろんなおひはぎ。梟げられたものもあるが、外の奴等は未だめつからずに探して居るのだ。嚴重なふれが出たよ。そして、本當だよ！――君はあの家の主人、あの神信心な、立派な、ゑらさうな老人は覺えがあるかね。』

『あゝ！』

『だから人間といふものは分らないものだよ。彼奴がその群れの親分、首領なのさ。馬鹿々々しい話ぢやないか。』

ヤロスラフ・イリイッチは乘り氣に成つて話し、一つの例で、全人類を判斷した。といふのは、ヤロスラフ・イリイッチはその外のことがさうするより外出來なかつたから。それが彼の性質だつたから。

『そして彼等は？　ミューリンは？』とオルヂノフは小聲でいつた。

『あゝ！　ミューリンか！　いや、あれは立派な老人だ。全然尊敬す可き……だが一寸、君がいふので

思ひ出したが……』

『何だつて？　奴も仲間だつたのかい。』

オルヂノフの胸はじり〳〵して今にも破裂しさうだつた。

『だけど、君がいふやうに……』とヤロスラフ・イリイツチはオルヂノフに白目を向けて（彼が考へて居るしるしだつた。）附け加へた。『ミューリンが仲間だつた筈はないよ。丁度三週間前に彼は細君と一緒に自分の家へ行つたのだから……僕は門番に聞いた。あの小さな鞣革人さ。覺えて居るかい。』

（完）

他人の妻

市橋善之輔譯

『一寸御訊ねしますが……』

さういつて訊ねられた紳士はびくりとして、町中で、夜の八時にだしぬけに語を掛けた浣熊の皮で拵へた着物を着た紳士を驚いたやうに眺めた。私達は皆知つて居る。――ペテルスブルグの紳士が突然町中で知らない紳士に語を掛けると、掛けられた方の紳士はきまつてぎくりとする。

だからして、語を掛けられたこの紳士もびくとして少し恐慌を感じた。

『御引き留めして済みません』と浣熊の紳士はいつた。『だが私は……私は本當に分らないのですよ……きつと私を御許し下さるでせう。ね、私は少し轉倒しちやつて居るのですよ……』

その時初めて綿の入つた外套を着た若者は、この浣熊の着物を着た紳士が確かに轉倒して居ることに氣がついた。その皺の寄つた顏は可成り眞つ青で、聲はふるへて居た。彼は確かに心が亂れて居るらしく、語もすら〳〵口から出ず、誰かに賴みごとを切り出す、のつぴきならぬ必要に迫られて居るといふものゝ或ひは身分の下かも知れぬ男に、頭を下げて願ひごとをすることがその男に恐しく骨が折れるのだといふことを見て取ることが出來た。又實際、その願ひ事はこんなに氣品の高い毛皮の上衣、かくも上等な暗綠色のちやんとしたヂヤケツ、並びにそのヂヤケツを裝る有名な勳章をつけた紳士から出づる

ものとしては何といつても、體裁の悪い、下品な、變てこなものだつた。明かに、浣熊の紳士もこれ等のことで心が亂れたらしく、で、遂に彼はそれに辛抱出來なく成つて、胸を鎭め、われと自分が引き起したこの不愉快な狀態に、禮を失することなくけりを附けやうと心を決めた。

『許して下さい。私はどうかして居るのですよ。だが實際、あなたは私を御存知ないのです……御面倒掛けて濟みません。私は氣が變つたのですよ。』

かういつて、挨拶に帽子を擧げて、急ぎ去つた。

『一寸御待ちを……』

だがかの小さい紳士は、綿の入つた外套の紳士が茫然として居るのを後に殘して暗闇の中に消え去つた。

『何て變な奴だらう！』と綿入り外套の紳士は思つた。さう思ふのは當然の話だが、かう不審を打つてから、やつとぼんやりして居たのが治つて自分の事を思ひ出し、何階も〳〵ある家の門をぢつと眺め乍ら、あちらこちらと歩き出した。霧が深く成つて來たが、若者はそれで少しほつとした。といふのは霧の中の方が、彼方此方を歩くことが人に分らなくてよかつたから。尤とも實際は、一日中一文にも成らずに待つて居たある駿者の外誰にも氣がつく筈はなかつたのだが。

『一寸失禮！』

若者は又びくりとした。又もや浣熊の紳士が彼の前に立つて居た。

『何度も御迷惑を掛けますが……』と彼は切り出した。『あなたは……あなたは立派な方に違ひない！私の身分を氣にしないで下さい……私はぼんやりしちやつてるのですよ……どうか御同情下さい……あなたの前に居る男は、特にあなたに御願ひして……』

『身に叶ふことでしたら……何御用でせう。』

『あなたは或ひは私が御金を御ねだりすると思し召すかも知れませんが』と不思議な紳士は神經質的に笑ひ、眞青に成り、變な笑を浮べていつた。

『飛んでもないことです。』

『いやあなたには御迷惑なことだといふことは分ります！　許して下さい。私は我慢出來ないのですよ。あなたは激動して居る、凡んど氣違ひも同然な男に出會して居るといふことを考へて下さつて、かうなのだらうと早合點しないで下さい……』

『それはさうと御用は？』と若者は促すやうに、尙又じれつたいといつたやうにうなづいて答へた。

『その事ですよ！　あなたのやうな若い方が私が迂濶な子供でどもあるかのやうに、側道へそれないやうに注意をして下さる！　私はぼけ掛つて居るに相違ありませんよ！　かういふ不體裁な眞似をして居る私があなたにはどう見えますか。あから樣におつしやつて下さい。』

若者は狼狽して了つて、何ともいはなかつた。

『さつくばらんに御訊ねしますが、あなたは或る婦人に御會ひに成りませんでしたか。あなたに御尋ね

したいのは只それ丈けのことです。』浣熊の上衣を着た紳士は遂にきつぱりいつた。
『女の方ですつて？』
『さうです。』
『えゝ、見たには見ましたが……女の人は澤山通りましたからね……』
『そりやさうでせう。』と不思議な紳士は悲しげな笑を浮べて答へた。『私はうろ〳〵して了つて居るのですよ。私が御尋ねしたいと思つたのは、さうぢやなかつたので。許して下さい。私はかういふ御尋ねがしたかつたのです。――あなたに狐の皮の肩掛をはほり、黒ずんだびろうどの頭巾、黒いヴエールを掛けた婦人に御會ひに成りませんでしたかといふので。』
『いや、さういふ方には氣がつきませんでしたが……いや、さういふ方は見掛けなかつたやうに思ひますが。』
『それぢや、失禮します！』
若者は尋ねたいことがあつたが、浣熊の紳士は又もや姿を隠した。又もや彼は悠長な聞き手をぽんやりさせた儘立去つた。
『惡魔にさらはれるがいゝや！』と綿の入つた外套を着た紳士は、實際くしや〳〵して考へた。
うるさ相に海狸の襟を引つくり歸して、何階もの家の門の前を又もや彼方此方と氣を配り乍ら歩き始めた。彼は心中激昂して居た。

『何だつて出て來ないのだらう。』と彼は思つた。もうおつつけ八時に成るだらうに。』
町の時計が八時を告げた。
『あつ、こん畜生！』
『いや失禮！……』
『いやそんなことをいはないで下さい……だがあんまりだしぬけだつたので、すつかり驚いてしまひましたよ。』と若者は顔をしかめ乍ら、謝罪するやうにいつた。
『又やつて來ました。さぞうるさい、變てこな奴と御思ひでせうが。』
『てきぱきと早速御話し下さいますまいか。何御用なのか分らないのですよ……』
『あなたはせか〳〵していらつしやいますね。萬事ざつくばらんに早速御話しませう。御話しせずには居られません。事情といふのは時々非常に違つた性格のものを一緒にするものですね……だが、君がせか〳〵して居ることは分りますよ……だから……僕は實際どういふ風にして御話したらいゝか分りませんが、私はある女を探して居るのですよ。(私はあなたに何も彼も御話する氣に成りました。)ね、私はその女が何處へ行つたか突き留めなくちやならないのですよ。その女が誰かといふことは。――僕は君に御知らせする必要はないと思ふのですがね。』
『さう。それから？』
『それからですつて？　何といふものゝいひやうをなさいます？　許して下さい、或ひは君といつたの

で御怒りかも知れませんが、私は何も……つまり、若し御力を御添へ下さる御つもりでしたらかうなんです。ある婦人、といふのは、私の知り合ひの、非常にいゝ家の淑女なのですが……私は頼まれたのですよ……私には家庭はありませんが……』

『さうですか。』

『君私の身になつて御覧なさい。(おや、又やりましたね。許して下さい。しよつ中君々といつて居ますね。)一寸も猶豫しちやあ居られません……まあ考へて下さい。その婦人が……だが、この家には誰が住んで居るか御存知はありませんか。』

『ですけれど……こゝには澤山人が住んで居ますからね。』

『さうです、さうです。あなたのおつしやる通りですよ。』と浣熊の紳士は品を作つて微かに微笑み乍ら答へた。『何だか隨分間違々々しちやつて。……だが、何だつてそんなことを仰しやるのです。ね、私は自分が間違々々して居ることは正直に承認します。それにあなたがどんなに高慢な方だつても、御滿足の行く程私の屈辱は御覧に成つたのですからね……私のいふのは行狀の賤しからぬ、といふのは氣輕な傾向の婦人のことで、許して下さい。私はまるでぼや〳〵しちやつて居るのですよ。何だか私は文學の話でもして居るやうですね。ポール・ドュ・コック(譯者註、佛蘭西の小說家兼戲曲家)は氣輕るな傾向の作家と思はれて居ますが、厄介なことは皆ポール・ドュ・コックから起るので……』

若者は浣熊の紳士を氣の毒さうに見遣つたが、紳士はまるで混亂した樣子で話を中絶し、譯の分らぬ

微笑みを浮べ、用も無いのに若者の綿の入つた外套のたれをふるへる手で攫んで、彼をまじ〳〵見守つて居るのであつた。

『あなたはこゝに誰が住つて居るか御尋ねですね。』と、若者は少し退つていつた。

『さうです。あなたはこゝには澤山の人が住んで居るとおつしやいました。』

『こゝに……私はこゝにソフイヤ・オスタフエーヴナも住んで居るといふことを知つて居ます。』と若者は低い、さも同情して居るといつた調子でいつた。

『そら御覧なさい! 君は何か知つて居るのですね。』

『いや私は何にも知つては居ないのですよ……あなたが御困りに成つて居る樣子を見て……』

『私は今あれがこゝへやつて來るといふことを料理番から敎はりましたが、あなたは方針を誤つて居ますよ。といふのはソフイヤオ・スタフエーヴナに對しての話ですが……あれは自分の何を知らないのですよ……』

『知らないのですつて? おや……それぢや、私はあなたの御許しを乞はなくちや成りませんが……』

『いや、こんなことは君には面白くも何ともないことだといふことは分つて居ますがね。』と例の變な男はひどく諷刺的にいつた。

『まあ聞いて下さい。』と若者はためらひ乍らいつた。『實際私にはあなたが何だつてそんな樣子をしてらつしやるか分らないのですよ。だが包まずおつしやつて下さい。あなたの御上さんが不時なことをや

つていらつしやるのですね。』と若者はほくそえんだ。『何しろ御互ひに了解し合ひませうよ。』と彼は附け加へたが、氣高くも彼の姿全體が輕く御辭儀をしやうといふやうな傾向を表した。

『あなたの御つしやることは私を挫きます！　だが私は包まず白狀しますが、實際さうなのですよ。だが誰にもあることでさあ！……私はあなたの御同情で深く心を動かされました。確かに、若い人の間にはね……だとも私は若かあありませんが、だが御承知の通り習慣といつていゝか――獨身生活いや、獨身ものゝ間には、私達は皆知つて居ますが……』

『さうですよ。私達は皆知つて居ますよ！　だが、どうしたら私、あなたの御役に立つことが出來ませうか。』

『かうなんですよ。ソフイヤ・オスタフェーヴナを訪ねることを許して……尤とも私は、あの女が何處へ行つたかはつきりとは知りません。只あれがあの家に居ること丈けは知つて居るので。だがあなたが彼方此方歩つて居るのを見、自分も同じ側を彼方此方歩つて居て、私は考へたといふのは……ね、私はあの女を待つて居るのですよ。……私はあの女がこゝに居るてえことは知つて居ますよ。私はあの女に會つて、どんなに恐しい、不埒なことかといふことを說いてやりたいのですよ！……實際、あなた私のいふことが御合點が行つたでせう……』

『成る程！　それで？』

『私がかうして居るのはわが身の爲めぢやあないのです　。さう思はれちや困ります。人の細君ですよ！

あの女の夫は彼方のヴォズネセンスキイ橋のとこに立つて居ます。女を取つ攝まへたがつては居ますが、さむさうするといふ勇氣は無いのです。亭主の常として、未だ今もそれを信じないのですよ。(かういつて浣熊の紳士は無理に笑はうとした。)『私は亭主の友達です。いはなくとも御分りでせうが、私だつて何がしと謂はれる男です。あなたがかうぢやないかと當りをつけた、そんなものである筈はありませんよ。』

『いやそりやもう勿論の話でさあ！』

『だから、私は女を探して居るので。この仕事を私は任されたのですよ。(あの男は可哀さうだ！)だが私は知つて居ますが、あの若い女はずるいのですよ。(ポール・ド・ユ・コックがいつもあの女の枕の下に居ます。)きつとあの女はこつそり何處かへ逃げて行つて了ひますよ。……打ち開けて御話しますが、料理番が私にあの女はこゝへ來てゐると話して呉れました。私はそのしらせを聞くとその儘氣違ひ見たいに驅け出しましたね。私はあの女が取つつかまへたいのですよ。私はさつきから不審を抱いて居ました。だからあなたに御尋ねしたいと思つたのですよ。あなたはこゝを歩つて居る……あなたは、あなたは、私は……』

『一體、その御用といふのは？』

『さうです……私は未だこれ迄あなたに御目に掛つたことはありません。私はずけ〳〵あなたはどなたで、どんな方かと尋ねるやうなことは致しません。……何しろ、自分で自分を紹介させて貰ひます。初

めて！』

紳士は興奮で打ちふるへつつ、若ものゝ手を心籠めて握つた。

『初めにこれをしなければならなかつたのですが』と彼は附言した。『禮儀等といふことをすつかり放心しちやつて居たので。』

かういひ乍ら浣熊の紳士はじつと立つて居ることが出來なかつた。彼は心配さうにしよつ中あたりに眼を配り、足をもぢ〳〵させ、溺れつゝある人のやうに若者の手をとらへた。

『ね。』と彼は語を續けた。『私は親しくあなたに語を掛けやうと思つたのですよ……勝手を許して下さい……私はあなたに向側を歩つて貰はうと思つたのですよ。横町をね。あちらには裏がありますかね。私も此方側を入口から歩きます。二人で女を通しつこないやうにね。一人ぢや、逃げられやしないかと心配です。通したかああありませんからね。あなたは女を御覽に成つたら、喰ひ止めて、私を呼んで下さい……待つた、俺は氣違ひだな！　やつと今、私は、自分の申し出の馬鹿らしいこと、あられもないことが分りました！……』

『そんなことはありません！　可笑しかないぢやありませんか！』

『私の辯護をして下さいますな。私はもう氣が顚倒しちやつて居るのですよ。私はこれ迄こんな氣持に成つたことはついぞありません。助けるか生かすかの取調べを受けて居るやうです。實際、私は打ち開けなければなりませんが――私は君には包み隱しのない、立派な態度を取りますが、私は實際あなたが

『色』かも知れないと思ひましたよ。』

『つまり、簡單にいへば、あなたは私がこゝで何をして居るか知り度いのでせう。』

『なに、あなたは立派な方ですよ。あなたが『色』だなんて夢にも思やあしませんよ。そんな、あなたを侮辱するやうな疑ひは抱きやあしませんが……俺は……『色』でないといふ誓言はなすつていただきたいもので。』

『畏りました。誓言をしますが、私も『色』ですが、あなたの細君の色ぢやあありませんよ。あなたの細君の色なら私はこの町中に居やあしません。今頃は女と一緒に居まさあ！』

『細君ですつて！　君、誰があの女は私の妻だといひましたね。私は獨身者です、私は――つまり、私も『色』なんですよ……』

『あなたはヴォズネセンスキイに夫が居るとおつしやいましたね……』

『勿論、勿論、私の話は餘りといへばさつくばらんで。だが、外にも關係といふものはありますまいかね！　そして、君も御承知の通り、或るふは〳〵した性格といふのは……』

『成る程、成る程……』

『つまり、私は決してあの女の亭主ぢやありませんよ……』

『勿論そりやさうでせう。だが私は、明ら樣に申しますが、今私はあなたを安心させる爲めに、先づ私自身心を靜めたいのですよ。だからこそ、私はあなたにざつくばらんな態度を取るのです。あなたは私

の心を顚倒させて居ます。あなたは私の妨害をして居ります。私はあなたを御呼びするといふ約束は致します。だが、どうか御願ひしますから、もつと向ふへいらして、私を一人ぼつちにして置いて下さい。私もある人を待ち受けて居るのですから。』

『畏りました。向ふへ參ります。私はあなたのわく〳〵した氣持を尊敬します。いやもう、あなたのことはよつく分りましたよ！』

『いや結構、結構……』

『ぢや又後で！……だが許して下さい、又やつて來ましたが……何といつていゝか分りませんが……もう一度、紳士として俺はあの女の色男ではないといふことを誓言して下さい。』

『何ですつて！』

『もう一言尋ねさせて下さい。これつきりですから。あなたはあなたの……つまり、私のいふのは、あなたの熱誠の的なる婦人の夫の姓をですな、あなたは御存知ですか。』

『そりや知つてまさあ。あなたの御名前ではありません。そしてその事に就いちやそれ丈けで澤山です。』

『私の名前をどうして御存知ですか。』

『あなたはいらしつた方がいゝといふのに暇潰しをして、さ、あの方が千度だつて逃げ出すことが出來ますよ。何御用なのです。あなたの女は狐の肩掛に頭巾を冠つて居るし、私のは辮慶縞の外套に水色びろうどの帽子を冠つて居ます……外に何御用がありますか？　えつ、外には？』

『水色、びろうどの帽子ですつて！　あれは辮慶縞の外套に水色びろうどの帽子を冠つてますよ！』と

このしつこい男は、直ちに又振り返つて叫んだ。

『畜生！　そりやあさうでせうよ……して實際、私の女はこゝへ來てはゐませんよ！』

『ぢや、あなたの女は何處に居るのです？』

『あなたそれが知り度いのですか。それがあなたに何の關係があります。』

『私は打ち開けて申し上げねばなりませんが、私は末だ……』

『馬鹿な！　何です！　あなたはまるで作法といふものを知りませんね。私の女には町の方に向いて居る二階に友達があるのですよ。あなたはその友達の名が聞かせて欲しいのですか。』

『待つて下さい。私も友達がありますよ。三階にね。そして窓は町に向つて居ます……將軍の……』

『將軍ですつて！』

『將軍です。何なら、何といふ將軍か申し上げませう。よろしい……ボロヴイチン將軍です。』

『何ですつて！　いや、さうぢやありません！（畜生！）』

『さうぢやありませんか。』

『いや、さうぢやありません。』

二人はうろ〳〵して御互ひに顏を眺め合ひ乍ら默つて居た。

『何だつてあなたはそんな顏して私を見て居るのです。』と若者はいら〳〵して、痳痺と疑ひ深さうな樣

子を振り拂つて叫んだ。

紳士はうろ〳〵して居た。

『私は……私は打ち明けて申し上げねばなりませんが……』

『さあ一つ、よく心を落ち着けて御話しませう。二人に關係のあることですから。話して下さい……あそこであなた誰を御存知ですか。』

『といふのは、私の友達は誰と誰かといふ事ですか。』

『さうです。御友達のことです……』

『そら御覽なさい！……あなたの眼で、私の推量が間違ひでなかつたことが分ります！』

『下らない！　馬鹿な！　あなたは眼が見えないのですか。私は現在あなたの前に立つて居るぢやありませんか。あの方のところに居るのぢやありません。なあに！　あなたがそんなことをおつしやらうとおつしやるまいと私は心にとめはしないが！』

かつと成つて若者は又もや人を馬鹿にしたやうに手を打ち振り、ぐるりと向ふを向いた。

『いや、何もさういふ積りぢやあなかつたのです。立派な人間らしく、私はあなたに一伍一什を御話し致します。最初私の妻がこゝへ一人でよくやつて來たものです。あの人達は妻の身内のものなので、私は少しも疑ひを抱いたり等しはしなかつたのですよ、昨日私が御大に會ひましたところ、御大が私にいふのです。俺は三週間前にこゝから、外のところへ變つたか、御前の女……』といふのは私の女房のこ

とちやないので、外の人の女房のことですが（ヴォズネセンスキイ橋に居る亭主の女房のことですが）……その女一昨日あの人達のところに居たと話したのですよ、といふのはこの部屋にですよ……ところが料理番は御大の部屋にはボビニチンといふ若者が入つて了つて居ると話して呉れたのです……』

『えつくそつ！……』

『あなた、私はおの〻き、驚いて居ます！』

『畜生！　あなたがおの〻き、驚いて居たつて、それが私に何の關係があります。おや！……彼方を御覽なさい……誰かこそ〳〵逃げ出して行きましたよ……彼方を御覽なさい……』

『何處です。何處です。『イウアン・アンドレエイッチ』と呼んで下さりさへしたら、私は飛んで行きます……』

『承知しました。こん畜生！　イウアン・アンドレエイッチ！』

『何です。』とイウアン・アンドレエイッチは立ち歸り乍ら、まるで息を切らして叫んだ。『何です。何です。何處です。』

『いや何でもありません……私はこの婦人の名前は何といふのか知り度かつたのです。』

『グラフ……』

『グラフイラ？』

『いや、グラフイラではありません……許して下さい。よく知らないのです。』

かくいひ乍ら、この立派な男が紙のやうに白く成つた。
『いや、勿論グラフイラぢやありません。グラフイラぢやあないといふことは私は知つて居ます。そし
て私のグラフイラぢやありません。だがあの女は誰と一緒なのか知らん。』
『何處です。』
『あそこです！　えつくそつ！』（若者はかつと成つて、じつと立つて居ることが出來なかつた。）
『そら御覽なさい！　どうしてあなたはあの女の名はグラフィラだといふことが分りましたかね。』
『えゝつくそつ！　うるつさい！　あなたは俺のはグラフイラといふ名ぢやあないといつて居るぢやあ
りませんか！……』
『あなたは何といふ口の利き樣をなさるのです！』
『畜生！　今そんなことが大問題かなんぞのやうに！　あの女は誰です。あなたの細君ですか。』
『いえ、つまり、私は結婚しちやあ居ないのですよ……だが私だつたら困つて居る相應の人物、奉る價
打ちがあるとはいひませんが、兎に角教育のある人間にのべつに畜生呼ばりはしやしません。あなたは
のべつに畜生、畜生！』といつていらつしやる。』
『こん畜生に違ひない。さうなんだ。分つたか。』
『あなたは怒りで目がくらんで居るから何にもいひません。おや、あれは誰でせう。』
『何處です。』

物音と笑ひ聲が聞えた。二人の可愛らしい娘が踏段を驅け下りた。二人の男は彼等のところへ驅け寄
けた。
『おや、何といふことをなさるのです。何ですか。』
『何處へいらつしやるのです。』
『これやあ、違ひますよ！』
『ぢやあ、御間違へに成つたのですか！　馬車屋さん！』
『御嬢さん、何處へいらつしやるのです。』
『ボクロフ。アンヌシュカ、御乘んなさい。連れて行つて上げますから。』
『あゝ私向つ側へ乘つてよ。出して下さい！　早くやつて頂戴ね。』
辻馬車は驅け去つた。
『あの連中は何處から來たのでせう。』
『おや〳〵！　あそこへ行つた方がよくありませんか。』
『何處です。』
『ボビニチンのところでさあ……』
『いやそんなことはとんでもないことで。』
『何故です。』

『そりやあ行つても宜しいが、私が行つたらあの女は何か外の話をするでせう。彼奴……誤魔化しつゝやうでせう、彼奴は私はあなたが誰かと一緒に居るところを取つつかまへる爲めに故意々々やつて來たのだといふでせう。さういはれりやあ私は參つて了ひます。』

『あの人は彼處に居るかも知れないぢやありませんか！　だがあなたは――何故かその譯が分りませんが――あなた將軍のところへ出掛けたつていゝぢやありませんか……』

『だが御存知の通り御大は引つ越しましたよ！』

『そんなことは何でも無いぢやありませんか。あの人は彼處へ行つたのです。だからあなたもいらつしやい。分りませんか。將軍が行つて了つたことを知らない樣な顏をしていらつしやい。細君を連れに來たといふ顏をしていらつしやい。』

『それから？』

『そして、あなたがボビニチンのところで見つけたい人を見つけなさい。ふん、畜生、何といふ馬鹿な……』

『だが、私が見つけることがあなたに何の關係がありませう。ね、ね！』

『何です、何です。あなたは又例の手を使ひますね。あゝ、主よ、私達にめぐみを垂れよだ！　羞じるがいゝ、途方もない、馬鹿なんだ！』

だがあなたは何だつてそんなに乘り氣に成つて居るのです。あなたは見つけたいと思つて居るのです

か……』

『何を見つけるのです。何をです。いや、何、勝手にするがいゝや！　私はもうあなたのことでは心を痛めません。私一人で行きます。彼方へ行つて下さい。彼方へ。氣をつけるがいゝ。彼方へいらつしやい！』

『まあ、あなた、あなたはまるで無我無中でいらつしやる！』と浣熊の紳士は自棄に成つて叫んだ。

『それがどうしました。私が無我無中だからつてそれが何です。』と若者は齒を喰ひしばり、かつと成つて浣熊の紳士のところへ進み寄つていつた。『それがどうしました。誰の前で無我無中に成つて居るのです。』と彼は拳骨を固め乍ら、雷のやうに怒鳴つた。

『まあ、あなた……』

『私は無我無中に成つて居るといふのだがさういふあなたはどなたです、あなたの御名前は何といふのです。』

『そんなことは知りませんよ。何だつて私の名前が聞き度いのです。……あなたに御話することは出來ません……私もあなたの御伴をした方がいゝでせう……御一緒に參りませう。私は尻込みは致しません。どんなことがあつたつて平氣です。……だが、私にもう少し丁寧に、尊敬して待遇して下さつてもよさうなものだ！　あなたは落着きを失つちやいけないや。何事かで、あなたが轉倒すりやあ、何で轉倒して居るかといふことは分りますよ。何しろ、無我無中に成る必要はありませんよ……あなたは未だ老

い先きの長い人だから！……』

『あなたが年を取つて居るといふことが私に何の關係がありませう。それに不思議はありませんよ〜彼方へ行つて下さい。何だつてこんなところをおどり廻つて居るのです。

『年取つて居るが何です。こゝに居たつて少しも差し支へありません。だが私はおどつちやあ居ませんよ。……』

『それは分ります。だが彼方へ行つて下さい。』

『いやあなたの御側に居ります。ぽつぱらはうたつて、ぽつぱらへやしません。私も掛り合ひですから。御一緒に參りませう……』

『それぢや、靜かにして居て下さい。默つてゝ下さい……』

二人は踏段を上り、階段を登つて三階へ行つた。可成り暗かつた。

『御待ちなさい。マッチは持つて居ますか。』

『マッチですつて！　と云ふのは？』

『あなた葉卷やるでせう。』

『あゝあります、あります。こゝにありますよ。一寸待つて下さい……』浣熊の紳士はうろ〳〵して探した。

『ふん、何て馬鹿な……畜生！　これが戸だと思ふがね……』

『これかね。これかね。』

『これだ。これだ。　：何だつ　大きな聲をするのだ。叱つ！……』

『あなた、私は心を鎭めて　君は無鐵砲な人だ。そら御覽！……』

光がぱつと燃え立つた。

『さうだ、さうなのだ。こゝに眞鍮の表札があらあ。これやボビニチンの家だ、ボビニチンといふことが分りましたか。』

『分りました。』

『叱つ！』

『消えましたな。』

『消えつちやつた。』

『たゝきませうか。』

『たゝかなくちや。』と浣熊の紳士は答へた。

『ぢや、たゝいて下さい。』

『どうして私にたゝけませう。先づあなたたゝいて下さい！』

『氣が小さい人だ！』

『あなたも臆病者のくせに！』

『行つて下さい！』
『私はあなたに秘密を明したことを少し後悔して居ます。あなたは……』
『私――私がどうしたのです。』
『あなたは人の難儀を利用していらつしやいますね、あなた、私が轉倒して居るといふことは御分りでせう……』
『だがそんなことを私が氣にしませうか。どうも滑稽だ。それ丈けの話でさあ！』
『何だつてあなたはこゝへいらしたのです。』
『あなたも何だつてこゝへいらしたのです。……』
『愉快な道徳さね！』と浣熊の紳士は憤然としていつた。
『道徳のことであなたは何をいつていらつしやるのです。あなたはどういふ方です。』
『不道徳な話だあね！』
『何ですつて？……』
『あなたの御考へぢや、瞞されて居る亭主てえものは皆な馬鹿者だつてんでせう！』
『ぢやあなたは御亭主さんなのですか。私は御亭主はヴォズネセンスキイ橋に居るのかと思つて居ました。それがあなたに何の關係があります　何だつてあなたは出しや張るのです。』
『私はあなたが色だと思つて居ます！……』

『御聞きなさい。あなたが相變らずその調子だと、私は厭でもあなたを馬鹿者と考へずに居られなく成ります！　誰か分りますか。』
『といふのはあなたは貴様が亭主だといふ御積りなのでせう。』と浣熊の紳士は、煮立つて居る湯でやけどでもしたやうにしさり乍らいつた。
『叱つ、靜かになさい。聞えましたか……』
『ありやああの女だ。』
『なあに、さうぢやない！』
『恐しく暗いな！』
ひつそりと成つた。ボビニチンの部屋の物音が聞えた。
『何だつて私達は喧嘩をして居るのでせう。』と浣熊の紳士が小聲でいつた。
『だがあなたの方で腹を立つたのですぜ。下らない！』
『だつてあなたには堪忍の緒も切れ果てましたからな。』
『靜かになさい！』
『勿論私はあなたと同意見です。こんな目に會つて居る亭主は馬鹿者でさあ。』
『あゝ！　あなた靜かにして下さいませんか。あゝ！……』
『だが何だつて、不仕合せな亭主をこんなに荒々しく苦しめるのでせう。……』

『あの人ですぜ！』

だがその時物音は靜まつた。

『あの女ですか。』

『さうです、さうです！　だが何だつてあなたは――あなたはそんなことでくよ〳〵して居るのです。あなたの知つたことぢやないぢやありませんか！』

『いやあなた』と浣熊の紳士は眞青に成り、あへぎ乍らつぶやいた。『そりやあもう私はひどく激動して居ます……いはずとも私の哀れ悠然な立場は御分りに成りませう。だが、今は申す迄もなく夜です。だが明日は……尤とも、實際、私達は明日御會ひすることもありますまいが、といつて私はあなたに御會ひすることが恐いといふ譯ではありませんが――それに私ぢやあないのです。ヴオズネセンスキイ橋に居る私の友達のことですからね。實際その男のことでさあ！　その男の女房です。他人の女房です。可哀さうに！　實際、私はその男を極く親しく知つて居るのですぜ。何なら悉しいことを御話してもよう御座んす。御分りに成るでせうが、私はその男の親友なので。でなきやあ、今その男のことで私がこんな態に成りやあしませんよ。――これももう先刻御承知のことでせうが、何度も私はその男にいつたことですよ。『何だつて君は結婚なんぞするのだい。君には地位もあれば資産もある。人に立派に尊敬もされて居る。何だつてそれ等をじだらく女に賭けやうとするのだい。よく考へなくちやあ。』といつてね。『いや、俺は結婚する。』と奴はいひましたね。『家庭の極樂』……家庭の極樂てえものはかういふものです

ぜ！　昔は奴も外の夫を瞞したものでさあ……今奴が辛い目に會つて居る。……許して下さらなくちやあ、この說明は全く必要なのですから。……奴は不仕合せな男です。今辛い目に會つて居ます！……』

『へん、そんなことあ聞きたかあない！　馬鹿は澤山世の中に居る。だがあなたはどなたです。』

若者は腹を立つて齒ぎしりした。

『ね、かういふ話をした以上はあなたも、私があなたに對して紳士的で、包み隱しのない態度を取つて居るといふことは承諾して下さらなくちや。……それなのにあなたはそんな調子で口を御利きに成る！』

『いや失禮ですが……あなたの名前は何といふのです。』

『何だつてあなたは私の名前が知りたいのです。……』

『おゝいや！』

『私はあなたに私の名前を御話する譯には行きません……』

『あなたシヤブリンを御存知ですか。』と若者は口早にいつた。

『シヤブリンですつて！』

『えゝ、シヤブリン！』（かういつて、綿入れの外套を着た紳士は浣熊の紳士の口眞似をした。『分りましたか。』

『いや、シヤブリンてえのは。』と浣熊の紳士はうろ〳〵して答へた。『私の友達はシヤブリンてえのでは

ありません。彼奴は非常に立派な男です！　私は嫉妬の苦しみに基づくあたの失禮を許すことが出來ます。』

『彼奴は大惡者です。金に目の無い野郎で、賄賂を取る惡者で、御上の金を着服して居ます！　彼奴は今に招び出されるでせう！』

『許して下さい。』と浣熊の紳士は眞青に成つていつた。『あなたは彼を御存知ない。あなたは彼を全たく御存知ないといふことが分ります。』

『いや私は彼を個人的には知りませんが、彼と接觸して居る人から聞いて知つて居ます。』

『どういふ人からなのでせう。御分りの通り、私は激動して居ますが……』

『馬鹿ですよ！　嫉妬深い阿呆ですよ！　彼奴は自分の女房を大事にしませんよ！　御存知に成りたいのなら、それが彼奴の眞相でさあ！』

『それやあ君、失禮乍ら飛んでもない誤解といふもので……』

『おや！』

『おや！』

ボビニチンの部屋で物音が聞えた。戸が開いて、聲が聞えた。

『いや、ありやああの女ぢやあありません！　私はあの女の聲を知つて居ます。もうすつかり分りました。こりやああの女ぢやあありません！』と浣熊の紳士は紙のやうに眞白に成り乍らいつた。

『叱つ！』

若者は壁にもたれた。

『ぢやあ、私は失禮しますがね。幸にもあの女ぢやあなかつたのです。』

『さうですか！　それぢや、御行きなさい！』

『ぢやあ、何だつてあなたは此處にいらつしやるのですか。』

『居たつてそれがあなたに何ですか。』

戸が開いた。と、浣熊の紳士は矢庭に下へ駆け下りた。

一人の男と一人の女とが若者のそばを通つた。彼はぎくりとした……彼は聞き慣れた女の聲と、それから、まるつきり聞き覺えのないしやがれた男の聲とを聞いた。

『いや、橋をいひつけますから。』としやがれた聲がいつた。

『さうですね。それがよろしいわ。ぢやあどうぞ……』

『すぐに來ませう。』

婦人一人に成つた。

『グラフイラ！　御誓約はどう成つたのです。』と綿の入つた外套の若者は婦人のかひなを捉えて叫んだ。

『おやどなたです。トヴオロゴフですか。まあ！　あなたこゝで何をしてらつしやるのです。』

『こゝにあなたと一緒に居たのはどなたです。』

『夫ですよ。行つて下さい。行つて下さい。すぐに夫が出て來ますから……あそこに居るのです……ポロヴイチンのところからね。行つて下さい。後生ですから、行つて下さい。』

『三週間前にポロヴイチンは引つ越しましたよ！　私はすつかり知つて居ます！』

『えつ！』といつて婦人は下へ驅け下りた。若者は彼女に追ひついた。

『誰が話しました。』と婦人は尋ねた。

『あなたの御亭主のイウアン・アンドレエイツチですよ。御亭主はあなたの眼の前に御出でゞすよ……』

實際イウアン・アンドレイツチは玄關に立つて居た。

『おゝ御前か。』と浣熊の紳士は叫んだ。

『おや！』とグラフイラ・ペトローヴナは心から嬉しさうに彼のところへ驅けつけ乍ら叫んだ。『あなた、私は何事があつたか、あなたの御想像もつきませんわ。私はポロヴイチン家へ行つたのですよ。まあ聞いて下さい……あなた、あの人達が今イズヌイロフスキイ橋のそばに住んで居ることは御存知でせう。私御話しましたね。覺えていらつしやいますか。私あそこから橇に乘つたんですの。馬が驚いて、かけ出して、橇がこわれて了ひ、私はこゝから百ヤード許りのところで投げ出されて了ひましたわ。馭者は拘引される、私困つて了ひましたのよ、幸ひにツヴオロゴフさんが……』

『何だつて！』

トヴオロゴフ君はトヴオロゴフ君といふよりは寧ろ化石だつた。

『トヴオロゴフさんがこゝで私を御覽に成つて、私を護衛して下さることを引受けて下さいました。だがもうあなたがこゝにいらつしやるのですから、私はあなたに心から御禮を申し上げればいゝので……』

婦人はぼんやりして居るイウアン・イリエイツチに手を差し出し、ぎゆつと握手した。

『トヴオロゴフさん、私の知り合ひの方よ。スコル、ポフの舞踏會で御目に掛つたのよ。私あなたに御話したと思ひますが。コヽ、覺えていらつしやいませんか。』

『いや、覺えて居ますよ。覺えて居ますよ。』と、コヽといはれた浣熊の紳士はいつた。『うれしく思ひます。うれしく思ひます！』さういつて彼はトヴオロゴフ君の手を一心に握り締めた。

『どなたです。どうしたのです。私は待つて居ますが……』としやがれた聲がいつた。

人々の前に素晴しく脊の高い紳士が立つた。彼は眼鏡を取り出し、浣熊の上衣の紳士をじつと見た。

『あゝ、パビニチンさん！』と婦人がさえづつた。『あなた何處からいらしたのです。何といふ集會でせう！　まあ聞いて下さい……私今さつき橇でひつくり返つたのよ……だがこゝに私の夫が居りますわ！　チヤン！　ポビニチンさん、カルポフの舞踏會で……』

『いや、うれしく思ひます。非常にうれしく思ひます！……だが、すぐ馬車を連れて來るよ。』

『えゝ、さうして頂戴な。私未だ恐いのですから。體中ぶる〳〵して、まるでめまいがして居るのよ……今夜、假面會でね』と、彼女はトヴオルゴフにさゝやいた……『ポビニチンさん、さいなら！　多分、明日カルポフの舞踏會で御目に掛れませうね。』

『いや、失禮ですが私明日は彼處へ參りません。明日のことは分りません、今日のやうな雖梅では……』
ボビニチン君は小さな聲でいひ、大きな靴で足擦させて挨拶し、橇に乘つて行つて了つた。
馬車がやつて來た。婦人はそれに乘つた。浣熊の上衣の紳士は立ち止つて、何をする力も無い樣子で、綿の入つた外套の紳士をぼんやり打ち守つた。綿入れ外套の紳士は間抜な顏して笑つた。
『私は……』
『許して下さい。あなたと御知り合ひに成つたことを嬉しく思ひます。』と若者は念入れて頭を下げ、少しおど〳〵して答へた。
『うれしく思ひます。うれしく思ひます!……』
『あなた上靴をなくしやしませんか……』
『私ですか——あゝさうです。あり難う。あり難う。私はいつもゴム靴を履かうと思つて居ますから。』
『ゴムぢやあ、足がひどくほてりませう。』と若者はひどく興味を持つて居るらしい樣子でいつた。
『ジャーン! 來ませんか。』
『ほてりますよ。すぐ行くよ。面白い話をして居るのだ! 仰つしやる通りです。足がほてります……だが、許して下さい。私は……』
『どうぞ。』
『あなたと御知り合ひに成つたことをうれしく思ひます。本當にうれしく思ひます!……』

浣熊の紳士は馬車に乘り、馬車は出發した。若者は茫然としてそれを見送つた儘そこに立つて居た。

二

あくる日の晩、伊太利の歌劇で、ある興行があつた。イウアン・アンドレエイッチは爆彈のやうに劇場に飛び込んだ。音樂に對するかくの如き熱狂、情熱はこれ迄彼に認めることは出來なかつた。何しろ、イウアン・アンドレエイッチが伊太利の歌劇で一時間か二時間うたゝねすることが素敵に好きだといふことは確實なことゝして知られて居た。彼自身何度もそりや氣持ち好くつて愉快だよと公言した。『プリーマ・ドネー(譯者註、歌劇の首席歌妓)は小さい、白猫のやうに、ねんねこ唄を歌つて呉れるぢやないか。』と彼は彼の友達にいひ〳〵した。だが彼がこんなことをいひ〳〵したのはずつと前の話、この前の季節のことで、今は哀れにも、家でも彼は夜な〳〵眠ることが出來なかつた。だが彼は爆彈のやうに歌劇場に飛び込んだ。案内者も彼の姿を見ると、不審なのでびくりとして、用意して隱してある短刀の柄をきつと見ることが出來やうと思つて横目で彼のわきのかくしを見た。その時、最負のプリーマ・ドネーに對して大した要求を持つて居る二つの團體があつたことをいつて置かなければならない。彼等は何々連と呼ばれて居た。兩方の團體とも音樂に大の熱心だつたので、樂長達も實際二人のプリーマ・ドネーに現はれたる美と美に對する熱情の驚く可き表現に對して心配し出した。だからして、髪の毛の白い年長者

（といつたつて、實際彼の髪の毛が白かつた譯ではない。五十歳位で、可成り頭の禿げた、何處から見ても立派な樣子の男だつたが）の威勢の好い突進を見て、樂長は老人が若いものに示した惡い手本に關する、デンマークの王子ハムレツトのすぐれた意見を思ひ出し、既に述べたる如く、短刀が見えるに遣ひないと思つてこの紳士のわきのかくしを横眼で見ずには居られなかつたのだ。だがそこには紙入れの外何にも無かつた。

劇場へ驅け込むと、イウアン・アンドレエイツチはすぐに第二段のうづらといふうづらをすつかり調べた。驚く可し！　彼はぎくりとした。彼女はこゝに居たのだ！　彼女はうづらに腰を掛けて居た！　ボロヴイチン將軍も細君と義姉妹とを連れてそこに居た。將軍の副官で極敏活な青年もそこに居たし、一人の文官もそこに居た……イウアン・アンドレエイツチは注意を緊張し、大きい眼をして見た。驚ろく可し！　文官は不埒にも副官のうしろに隱れ、ぼんやり薄暗いところに居た。

彼女はこゝに來たのだ。而かも彼女はこゝへは來ないといつて居た！

イウアン・アンドレエイツチを參らせたのは少し前からグラフイラ・ペトローヴナが取る一歩毎にあらはれたかうしたかげひなたゞつた。この文官の若者がとう〳〵彼をすつかり絶望させて了つた。彼はすつかり參つて自分の席に腰掛けた。何故かと御尋ねに成つて宜しい。極く簡單な事だつた……

辭つて置かなければならないのは、イウアン・アンドレエイツチの席はうづら近くだつたことで、殊にいけないのは、第二段の不埒なうづらは丁度彼の頭の上で、じれつたいことには、彼は自分の頭の上

で行はれて居ることをまるつきり見ることが出來なかつたことだ。それで彼はむかつ腹を立て、サモーワのやうにかつと成つた。第一幕の全體が彼に注意されずに終つた。即ち彼には一聲だにも聞えなかつた。音樂のいゝ事は音樂の印象は如何なる氣分にも添ひ得るものなることにありといふことが主張されて居る。喜べる人はその調べの内に喜びを見出し、悲しめるものはその悲しみを見出す、イウアン・アンドレエイツチの耳には、正しく嵐が吹きすさんで居た。彼を惱ましたものは、さうした恐しい聲が彼の後ろにも、彼の前にも、彼の兩側にも叫んで、彼の胸は引き裂けるやうであつたことだ。遂にその幕は終つた。だが、幕が下りつゝある瞬間に、わが主人公は、如何なる筆も描き難き珍事にあつた。

番附が上のうづらから落ちることは時々見ることだ演藝が面白くなく、聽衆があくびをして居る時には、彼等に取つてはこれは全たく大事件だ。彼等は力こぶを入れて上の棧敷から極く柔かい紙が飛ぶのを見守り、それが曲りくねつた旅をして座席に落ちるのを喜んで打ち守つて居るが、それはそれを受け止める用意のまるで出來てない人の頭にぴたりにこしを据える。その人が間誤々々するのを見て居るのは全たくどうも面白いことだ。（だつて當人は必らず間誤々々するのだから。）實際私はいつもうづらの端に置いてある婦人連のオペラ・グラスが恐しくて成らぬ、私はしよつ中あれがそんなことゝは夢にも知らむ人の頭におつこちはしないかと思つて居る。だが私はこの不吉な意見はこゝには不適當だと思ふから、それは忠告や、人を瞞す策略に對する警戒、不道義に對する警しめ、家に甲蟲が居るならそれを除く知慧、普魯西の蜻蛉のやうに露西亞許りではない外國にも通じて全世界の甲蟲の不倶戴天の敵なる

有名なプリンチビー君の推擧で一杯な例の新聞の欄に送らう。

だがイウアン・アンドレエイッチは今迄描かれたことのない珍事に出會した。彼の――既に述べたる如く少しく禿げた――頭の上に落ちて來たものがある。番附ではない。私は白狀するが、嫉妬深い、じり〳〵して居るイウアン・アンドレエイッチの立派な、禿げた――といふのは半分しか毛のない――頭の上に、香水のついた色文なんといふ怪しからぬものが御こしを据えた――こんなことをいふのは私は實際厭なのだ。可哀さうにイウアン・アンドレエイッチはこの思ひ掛けない、厭な出來事に不意を打たれて、頭の上で二十日鼠か野獸でも取つつかまへたかのやうにびくりとした。

その手紙が色文なることに關しては間違ひのありやう筈が無かつた。それは小說に書いてある戀文と同じく香水のついた紙に書いてあつて、女の手袋の中へ忍び込ませることが出來るやうに故意と小さく折つてあつた。それは彼女に渡さうと思つた時に誤まつて落したものだらう。或ひは番附を呉れろといふので番附の中へ手つ取り早く手紙を折り込んで、それを彼女の手に渡さうとして居たのかも知れない。ところが、不作法のいひ譯に素敵に巧く副官がすぐ、或ひは偶然に肘でついたところが、手紙がうろうろしてふるへて居る小さい手から辷り落ち、文官の若者は慌てゝ手を差しのべたところが、手紙の代りにからつぽの番附を受け取つて、どうしていゝか分らないで居たのかも知れなかつた。確かにそれは彼に取つて變な不愉快な事件だつたが、イウアン・アンドレエイッチに取つて、更に不愉快なことだつたといふことを諸君は承諾せられるに違ひない。

『かうしたものだ』と彼は冷汗を流し、手紙を兩手でぎゅつと握つてつぶやいた。『銃彈で惡人は知れる。』といふ考へが不圖彼の心に浮んだ。『いやさうぢやない！　どうして私が惡からう。だがかういふ諺もある。』『一度間が惡るく成ると、どうにも成らなくなる……』

だがこの突然の出來事にぶつかつて、耳鳴りがしたり、めまひがしたゞけでは濟まなかつた。イウアン・アンドレエイッチは、よくいふやうに死んだやうに成り、身動きもせずに椅子に腰掛けて居た。その時劇場全體が騷ぎともう一度やれといふ聲で滿ちて居たけれど、自分の珍事があらゆる方面から見られたものと信じた。彼は何か不愉快な意外な事、華かな集りにはそぐはないことが自分に起りでもしたかのやうに眞紅に成り、顏も擧げ得ず、狼狽して腰掛けて居た。遂に彼は思ひ切つて眼を擧げた。

『素敵ですね。』と彼は左側に腰掛けて居る、しやれ男にいつた。

兩手をしかと握り締め、益々勢好く足拍子を取り熱狂の絶頂に達して居たしやれ男はイウアン・アンドレエイッチをちらつと、ぼんやりした眼付きで眺め、早速よく響くやうに兩方を喇叭のやうに口に宛てがつてブリーマ・ドネーの名を叫んだ。そんな呶鳴り聲をこれ迄聞いたことのなかつたイウアン・アンドレエイッチはうれしく成つた。『奴には何も氣が付かなかつたのだ！』と彼は思つて振り返つた。だが彼の後に腰掛けて居た肥つた紳士も振り返つて、彼に背を向けて、オペラ・グラスでうづらを一心に見て居た。『奴も大丈夫だ！』とイウアン・アンドエイッチは思つた。勿論前の方には何にも見えなかつた。おづ〳〵、心に喜しい希望を抱いて彼は自分の座席近くのうづらをこつそり見たが、世にも不愉快な感

じを受けてびくりとした。可愛いらしい女がそこに居て、ハンケチを口にあてがひ、椅子の背にもたれて、ヒステリーでも起したやうに笑つて居た。

『畜生！』とイウアン・アンドレエイッチはつぶやいて、人の足を踏みつけ乍ら、出口へ行つた。

扨て私は讀者諸君に私とイウアン・アンドレエイッチと孰れが正しいか御裁判を願ひ度い。その時の彼は正しかつたらうか。誰でも知つて居るやうに、『大劇場』にはうづらが四段、棧敷の上にもう一列ある。何だつて彼はその手紙が、特にそのうづらから落ちたもので、外から落ちたものではないと思はなければならないか。例へば何だつて、屢々婦人も居ることがある棧敷から落ちたものとは思へないのだらう。だが情熱は例外なもの。そして嫉妬はあらゆる情熱の内一番例外のものである。

イウアン・アンドレエイッチは公會堂へ飛び込み、ラムブの側に立ち、封を切つて讀んだ。

『今日はねてからすぐに、ジー町、エッキス小路の角、ケー・ビルディク、第四階、階段から右に取つて第一の部屋。正面玄關でね。どうか間違ひなくそこへ御越し下さい。』

イウアン・アンドレエイッチはその筆跡は知らなかつたが、密會の約束に違ひないと思つた。『跡を追つてかけ出し、取り押へて、害惡を未前に防がう。』といふのが、イウアン・アンドレエイッチに浮んだ最初の考へだつた。破廉恥をすぐにその場で突き當めてやらうといふ考へが彼に浮んだが、どうしたら出來やうか。イウアン・アンドレエイッはうづらの第二列目へ迄駈けつけたが、賢くも亦立ち返つた。彼はどちらへ走つたらいゝものかまるで見當がつかなかつた。何が何やら分らずに彼は向ふつ側へ走つて行つて、誰か知らある人のうづらの開いた戸から劇場の向つ側を見た。本當にさうだつた！　若い女や若い男が堅に五段に成つた席に腰掛けて居た。手紙があらゆる段から落ちたやうに思はれた。といふのはイウアン・アンドレエイッチは皆なが自分に對して陰謀をこらしてゐるやうに思へたから。だが何にも成らなかつた。何の見當もつかなかつた。第二幕中は、廊下を彼方此方駈け廻つたが、何處へ行つても落ちつかなかつた。彼はうづらの事務所に居る附添人から、四段のうづらに居る人の名前を聞かうと思つて、そこへ飛び込まうとしたが、うづらの事務所はしまつて居た。遂に猛烈な叫びと賞讃の聲がどつと起つた。芝居が終へたのだつた。歌ひ手を呼ぶ聲が起り、上の棧敷から起つた二人の聲は殊に騷々しかつた。二人といふのは相反對して居る徒黨の兩親分だつた。だがそんなことはイウアン・アンドレエイッチの關するところで無かつた。次にやる可きことに就いての思考が既に彼の心に浮んだ。彼は彼等の不意を打つて、彼等を取り押へ、化の皮をひんむいでやらう、何しろ昨日よりは少しは强硬に振舞つてやらうと思つて、外套を着、ヂー町へ駈て行つた。彼はすぐにその家をめつけた。そして將に玄關から入つい行かうと思つて居る時に、外套を着たあるしやれ男が、眞すぐに彼の前をかけり、彼を通り越して三階の階段を上つて行つた。彼はあの時劇場でよく顏立ちを見ることが出來なかつたが、この男は例のしやれ男のやうにイウアン・アンドレエイッチには思へた。彼はぎくりとした。そのしやれ男は階段を二條も彼の先へ行つて居た。遂に彼は三階の戸が、訪問者を待ち受けて居たやうにベルも鳴らずに開いたのを聞いた。その若者は部屋へ入つて行つた。イウアン・アンドレエイッチは戸を閉　す間も無い

内に三階へ登つて行つた。彼は戸のところに立ち、次にやる可きことをよく考へ、よく用心をしてそれからきつぱりした行動をきめやうと思つた。だがその瞬間に馬車が音立てゝ入口に來り、戸ががた〳〵いつて開き、咳拂ひの音も聞えて、大きな足音が三階へと上り出して來た。イウアン・アンドレエイツチはじつと立つて居ることが出來なく成つて、俺はきづゝけられた夫だといはむ許りに部屋へ入つて行つた。下女がひどくおど〳〵して彼を迎へに駈けつけ、それから下男が現はれた。だがイウアン・アンドレエイツチを喰ひ止めることは出來なかつた。彼は爆彈のやうに飛び込み、暗い部屋を二つ通り越すと突然寢室に入り、可愛らしい若い女にぶつかつたが、彼女は自分の廻りにある出來事を理解することが出來ないやうに、驚いてぶる〳〵もので、青く成つて彼をまじ〳〵見た。その時隣りの室に、眞すぐに寢室へやつて來る大きい足音が聞えた。それはあの階段を上つて來た足音だつた。

『おや！　夫だ！』と女は兩手を握り締め、化裝着よりも白くなつて叫んだ。

イウアン・アンドレエイツチは此奴つあ御門違ひの所へ來た、馬鹿な、子供らしい粗相をした、無茶苦茶なことをした、中休み場でもつとよく考へなければならなかつたと思つた。だがどうする事も出來なかつた。既に戸は開き、若し足音で判斷することが出來るとするならばどつしりした夫が部屋へ入つて來るところだつた。……その時イウアン・アンドレエイツチがどんな顏をしやうとしたか私は知らない！何の爲めに彼がその夫に面と向ひ、彼に私は粗相をしましたと告げ、心ならずも不體裁極まる眞似をしたと告白し、詫を入れて――そりや勿論大手を振つていふ譯には行かない、堂々として引き揚げるといふ譯には行かないが、兎に角、立派に紳士らしく立ち去ることが出來なかつたかそれは分らない。イウアン・アンドレエイツチは、自分をドン・ジュアンかラヴレース（譯者註、英吉利の小說家サミュエル・リチヤドソンの作中にある色魔）とでも思つて居るかのやうに又もや子供らしい振舞をした！　彼は初め寢床のカーテンの後ろに隱れ、どゞの詰りすつかり失望落膽し、絕望して馬鹿々々しくも寢床の下にもぐり込んだ。理性よりも恐怖の方が彼には力があつた。で、彼自身がきづゝけられた夫たる、少なくとも自分をさういふ夫と思つて居るイウアン・アンドレエイツチは他の夫に面と向ふ勇氣がなく、自分が立ち現はれて彼の感情を害することを恐れた。それは扨て置き、彼は夢我無中ではあつたが、寢床の下へ入つた。だが實に驚いたことは女が平氣だつたことだ。彼女は全たく見ずしらずの中老人が自分の寢床の下に隱れるのを見乍ら大聲も擧げなかつた。恐らく彼女はひどく驚いたので、ものをいふ力がまるでなくなつて了つたのだらう。

亭主はあへいだり、咳拂ひをしたりし乍ら入つて來て、歌を歌ふやうな、中老人らしい聲で細君に今晩はと挨拶し、薪を一荷運んで來たところでもあるかのやうに安樂椅子にどかりと腰掛けた。低い聲で長く咳をした。イウアン・アンドレエイツチは獰猛な虎から小羊に一變し、猫の前の鼠やうに憶病に柔和に成り、恐くつて、息も碌さま出來なかつた。尤とも自分の經驗から、傷つけられた亭主といふものがすべて咬み付くものではないといふことは知つて居たかも知れないが。だが熟考の足りないのと、或る一種の激動を感じて居たのと兩方の所爲で、その考へが彼の頭に入らなかつた。用心しつゝ、そつと、

手探りし乍ら、もと床に横はることが出來るやうに寢床の眞下へ行かうとし出した。彼の手があるものに觸れた時の彼の驚きはどんなだつたらう。そのあるものは、びつくり仰天したことには動いて、今度は向ふから彼の手を取つつかました！　寢床の下に今一人人間が居たのだ！

『誰だ！』とイウアン・アンドレエイッチは小聲でいつた。

『名前は御話しますまい。』とその不思議な男がさゝやいた。『ぶまをやつたのなら、じつとして默つてらつしやい！』

『だがね！……』

『默つてゝ下さい！』

さうしてその餘分の紳士は（だつて寢床の下には一人で充分だつたから）イウアン・アンドレエアッチの手を、彼が痛くつてすんでのことに悲鳴を擧げさうに成つた程、手の中でぎゆつと握つた。

『あなた……』

『叱ッ！』

『ぢや、そんなにきつ〳〵握らないで。でないと、わあつといひますよ。』

『よろしい。わあ〳〵いふがいゝ。いつて御覽。』

イウアン・アンドレエイッチは羞しくつて赤く成つた。この知らない紳士は意地惡く、不機嫌だつた。恐らく彼は一度ならず運命の迫害に苦しみ、一度ならず二進も三進もならぬ目に會つた男らしいが、イ

ウアン・アンドレエイッチは新參者で、この動きの取れぬ場にぶつかつて、息することも出來なかつた。頭がぐら〳〵つとして來た。だがどうすることも出來なかつた。うつむいて伏つて居るしかなかつた。

イウアン・アンドレエイッチは溫和しく默つて居た。

「わしはパーウエル・イウアーニッチのところへ行つて來たのだよ。』と亭主が語り出した。『二人はブリアレンスをやらうてんで座り込んだのさ。こほん〳〵〳〵！』（彼は咳をした。）『さうさ……こほん！それで俺の脊中が……こほん！　畜生……こほん〳〵〳〵！』

老紳士しきりに咳をして居た。

『俺の脊中がね』と彼は眼に涙を溜めてやつといつた。『脊骨が痛み出しやあがつた……痔には閉口だ。立つてることも座ることも……座ることも出來ないのだから。こほん〳〵〳〵！』……

續いて起つた咳はその持主の老紳士よりも長く續く運命でゞもあるかのやうに思はれた。老紳士は合間々々に何かつぶやいたが、はつきり何かいふ事は全然不可能だつた。

『もし、後生ですから、もう少し向ふへ行つて下さい。』と不幸なるイウアン・アンドレエイッチはさゝやいた。

『駄目です。場所がありません。』

『だが、これぢややり切れないと云ふ事はあなたも御分りでせう。こんな厭な目にあつたのは初めてゞすから。』

『私だつてこんな厭なつき合ひをしたのは初めてだ。』
『だが君！……』
『默つてゝ下さい！』
『默れですつて。君は不愛想ですね……ひが目でなかつたら、あなたは極く若い方だ。私はあなたより年上だ。
『靜かになさい！』
『もし！　あなたはどうかしていらつしやいますぜ。相手をよく御覽なさい！』
『寢床の下に寢て居る神士を相手にして居るのさ。』
『だが私は不意を打たれたのだ……粗相だ。だがあなたの方は、若し私が間違ひでなかつたら、不道德だ……』
『それが間違ひですよ。』
『もし！　私の方があなたよりも年を取つてますぜ……』
『私達は同じ舟に乘つて居るぢやありませんか。顏をつかまないで下さい！』
『何が何やら分りませんね。失禮。場所がないのですから。』
『そんなに肥えてなければいゝのに！』
『あゝ〳〵！　私はこれ迄こんな羞しい目に會つたことはない。』

『いかにも、これより成り下らうたつて下れつこはありません。』
『もし〳〵！　私はあなたがどなたか知りませんが、どうしてこんなことに成つたのか知りません。だが、私は誤つてこんなところへ來たのです。私はあなたが御考へに成るやうな者ではありません……』
『私はあなたがぐい〳〵押して來さへしなければ、あなたのことなんぞてんで考へやあしません。それより靜かにして下い。靜かに！』
『もし、もう少し動いて下さらなければ、私は病氣になつて了ひます。私が死んだらあなたがその責任を負はなければならなく成りますぜ……私だつて相應の人物です。私はある家庭の父親です。實際私はこれぢや遣り切れませんや！……』
『自分から好んでかういふところへいらしつたくせして。さあ、此方へいらつしやい！　場を開けて上げましたから。この上は何も出來ませんよ！』
『立派な御人だ！　もし！　私はあなたを誤解して居たことが分りました。』とイウァン・アンドレエイッチは、自分に許された場所の爲めに有難涙に暮れ、窮屈にしてた手足を伸し乍らいつた。『あなたが窮屈なことは分りますがどうすることも出來ません。あなたが私のことをよく思つてないといふことは分ります。あなたの眼に映つて居る私といふものに對する信用を恢復させて下さい。御免を蒙つて私が如何なる人間か御話します。私はこゝへ來る氣なしにやつて來たのですぜ。私はあなたが御想像になるやうなことをもくろんで來て居るのぢやありません……私は全たくおつかないのですよ。』

『默つて呉れませんか。若しも私達が聞きつけられたら飛んだことになるといふことを考へて下さい。叱ッ！……亭主がしやべつて居ますぜ！』

實際老紳士の咳は止つた樣子だつた。

『なあ御前』と彼はまるで涙を誘ふやうな單調な調子で苦しさうにいつた。『あのなあ……こほん／／！あゝ苦しい！ フエドセイ・イウアーノウイッチがいつたよ。『のこぎり草の御茶を飲むといゝ。』とな。さういつたよ。分つたかい。』

『えゝ』

『さうだよ。さういつたよ。『のこぎり草の茶を飲んで見るといゝ。』といつたよ。俺は彼奴に蛭をつけて見たといつたよ。ところが奴『いや、アレキサンドル・ドシヤーノウイッチ、のこぎり草の方がいゝよ。有稅品だぜ』といつてな……こほん／／！ あゝあゝ！ どう御考へかね。こほん！ あゝ／／！ こほん／／！ のぎり草をやつて見たらいゝだらうか。こほん／／！ おゝ……こほん／／／／……』

『その御藥をやつて御覽に成るもいゝと思ふわ。』と彼の細君がいつた。

『さうだらう！『君は肺病かも知れないぜ』と奴がいやがつた。こほん／／！ で俺は痛風と胃が感應し易く成つて居るのだといつてやつたよ……こほん／／！ だが奴はどうしても肺病なのかも知れないよといつて居やがつた。御前はどう御思ひかね……こほん／／！ 御前どう御思ひかね。肺病だらうか。』

『まあ、あなたは何をいつてらつしやるの。』

『肺病の話だよ！ もう御前着物を脱いで寢るといゝよ……こほん／／！ 今日は風を引いて頭痛がするよ。』

『あゝ苦しい！』とイウアン、アンドレエイッチがいつた。『後生だからもう少し向ふへ行つて下さい。』

『本當にあなたどうしたのです。じつと寢て居られませんか……』

『君はひどく怒つて居ますね。君は僕を怒らせたいのですね。あなたはこの女の色でせう。』

『默つて下さい！』

『默りません！ 私はあなたに指圖されて默つては居ません！ あなたは確かにあの女の色だ。若し私達が見つかつても、私は何も惡いことはない。私は何にも知らないのですから。』

『若しあなたが靜かにしないと』と、若者は齒ぎしりし乍らいつた。『私はあなたが私をこゝへ連れて來たといひますよ。私はこれは私の叔父で身代を潰した男だといひますよ。さうすりやあ皆なが私をこの女の色だとはどうしたつて思やしませんよ。』

『もし、あなたは人を馬鹿にしていらつしやいますね。あなたには堪忍の緒も切れますよ。』

『靜かになさい。でないと厭でも靜かに成るやうにして上げますよ！ あなたに出會したのが身の不幸だ。ね、何だつてあなたはこゝへ來たのです。若しあなたがこゝへいらつしやらなかつたら私は兎に角朝迄にこゝに寢てそれから出て行くことが出來たのです。』

『だが私は朝迄こゝに居ることは出來ません。私だつて立派な人間です。勿論家庭の係累があります……

どうでせう、大將は今夜こゝで寢るのでせうか。』
『誰です。』
『この老紳士でさあ……』
『そりやあ勿論です。あなたのやうな亭主許りぢやありませんからね。夜家で寢る亭主もあります。』
『もしあなた！』とイウアン・アンドレエイッチは恐怖で冷酷に成つて『私だつても夜は家で暮しますぜ。今日が初めてにです。だがあなたは私を御存知ですね。君、あなたは誰なのです。さあ聞かして下さい。眞の友情から御尋ねするのです。どなたですか。』
『さあ、腕力に訴へますよ……』
『だがこの恐しい仕事の仔細をどうか聞いて下さい。』
『どんな御話も聞きません。そんなことは何も知り度くありません。默つて下さい。でないと……』
『だが私は……』
寢床の下で小ぜり合ひがあつて、イウアン・アンドレエイッチは靜まつた。
『猫がふう〳〵いつて居るやうな音がするね。』
『猫がですつて！　猫がどうしたのです。』
女は何の話か分らない樣子だつた。彼女はひどく轉倒して氣を落著けることが出來なかつた。彼女はびくりとして耳を欹てた。

『猫つてのは？』
『猫だよ。いつかわしが書齋へ行たら、書齋に雄猫が居てシュー〳〵〳〵！　といつて居る。わしは奴に『何だね、ブッシイ』といつてやると、小聲で死ぬやうにシュー〳〵〳〵と又やつてやがつた。わしは『おや！　彼奴がシュー〳〵いふのはわしの死ぬ前兆ぢやないのか。』と思つたよ。』
『今日は本當に馬鹿なことをおつしるのね！　本當に羞しかありませんか！』
『まあさ、怒らないでな。御前はわしが死を考へるのが厭なのだね。さういふ積りぢやなかつたのだよ。だが御前着物を脱いで寢るといゝよ。御前が寢る間わしはこゝに腰掛けて居るから。』
『後生ですからもう止めて下さい、あとで……』
『いや怒つちや困る。怒つちやあ。だが本當にわしはこゝに鼠が居るに違ひないと思ふよ。』
『おや初めは猫でその次は鼠ですか。あなた本當にどうなさつたのです。』
『なあに何でも無いよ……こほん……わしは……こほん！　心配しなくともいゝよ……こほん〳〵！　あゝ！　南無阿彌陀佛……こほん。』
『聞いたか。君がぐた〳〵するので大將が聞きつけたよ。』と若者がさゝやく。
『だがあなたが、私がどうしたか知つて下さつたら。鼻血が出るのですよ。』
『出るがいゝや。靜かにして下さい、大將が行つて了ふ迄御待ちなさい。』
『だが君、私の身に成つて見給へ。私は誰と一緒に寢轉つて居るかも知らないぢやないか。』

『知ると工面が好く成るとでもいふのか。私の方ちやああなたの名前を知り度くないといふちやありませんか、だがあなたの御名前は何と仰しるのですか。』
『いや、私の名を聞いてどうなさらうといふのです……私が御話仕度いのは只馬鹿々々しくも……』
『叱つ……大將が又何かいつて居ますよ……』
『どうもひそ〳〵聲がするよ。』
『い〻え、あなたの耳の中の詰綿が外れたのですよ。』
『あゝそれはさうと、詰綿といやあ御前知つて居るかい、上で……こほん〳〵……上で……こほん〳〵……』と咳入る。
『上でだつて！』と若者がさゝやいた。『こん畜生！　私はこゝがてつぺんだと思つて居たが。こゝは二階なのか知ら。』
『ね君』とイウアン・アンドレエイツチはさゝやいた。『何とか仰しやいましたね。後生ですから聞かして下さい。何だつてそんなことを仰しやるのです。私もてつぺんだと思つて居ました。後生ですから話して下さい、まだ一階あるのですか。』
『どうも誰かごと〳〵して居るやうだ。』と老人はやつと咳を止めていつた。
『叱つ！　聞きましたか。』と若者はアウアン・アンドレエルツチの手を握り締め乍らさゝやいた。
『無闇に手をつかまへては困ります。放して下さい！』

『叱つ！』
小ぜり合ひがあつて、又しんと成つた。
『私は可愛らしい女の人に出會したよ……』と老人が話し始めた。
『可愛らしい人ですつて！』と彼の細君が遮つた。
『さうだよ……わしは何時か御前に梯子段で可愛いらしい女の人に會つたといふことを話したと思ふが、或ひは話さなかつたのか知らん。憶えが悪い。セント・ジョンス・ワートだ……こほん！』
『何ですつて！』
『わしはセント・ジョンス・ワートを飲まなくちやあ。よく利くといふことだよ……こほん〳〵〳〵！よく利くつてよ！』
『あなたが大將の話の腰を折りましたぜ。』と若者は又も歯軋りし乍らいつた。
『あなた今日どなたか可愛らしい女の人に會つたと仰しやいましたね。』と彼の細君が話を續けた。
『何だね。』
『可愛らしい女の方に御會ひに成つたの？』
『誰がね。』
『あなた御會ひに成つたのぢやありませんか。』
『私が？　何時かね？』

「あなたがですよ！……」
『おや〳〵！　何といふ木伊乃だらう！　おや〳〵！』と若者は忘れつぽい老紳士に對して心中激怒し乍らさゝやいた。
『もし、私は恐くつてふるへて居ます。あゝ、私は何といふことを聞くのでせう。昨日見たいだ。本當に昨日見たいだ！……』
「叱っ！」
『本當に！　わしは覺えて居るが、こそ〳〵と油斷の成らない奴で、變な眼をして、青い帽子を冠つて……』
『青い帽子ですつて！　あゝ〳〵！』
『彼女だ！　彼女は青い帽子を持つて居る！　あゝ〳〵！』とイウアン・アンドレエイッチが叫んだ。
『彼女ですつて！　彼女つて誰です！』と若者はイウアン・アンドレエイッチの手をぎゆつと握り乍らさゝやいた。
『叱っ！』と今度はイウアン・アンドレエイッチが戒めた。『大將が話して居る。』
「あゝ〳〵！」
『だが青い帽子を持つてないものがあるでせうか。』
『そりやあこそ〳〵と油斷の成らない惡者でな。』と老紳士は續けていつた。『こゝへ友達に會ひに來るのだよ。しよつ中色眼を使つて居やがつてな。それに外の友達もその友達に會ひにやつて來るのだよ……』
『いやあな、ちつとも面白くないわ！』と女が遮つた。『どうしてあなたにはそんなことが面白いのでせう！』
『好し〳〵、まあ怒りなさんな。』と老紳士はたらし口調で答へた。『私のいふことが聞き度くないといふのなら、私は何もいはないよ。御前は今夜は少し機嫌が惡いやうだね。』
『だがあなたはどうしてこゝへいらしたのです。』と若者が話し始めた。
『そら御覽なさい！　今あなたは興味を感じていらつしやるが、さつきには私のいふことを聞かうとなさらなかつたぜ！』
『なあに聞きたかありませんや！　どうか御話しにならないで下さい。畜生、何て厭なことだらう！』
『感情を惡くしないでくれ給へ。私は自分で自分のいつてることが分らない。氣に掛けないで下さい。只私はあなたがそんなに興味を感じるに就いて何か深い理由が御ありなさるに違ひないといはうと思つたゞけです……だが君はどなたですか。私にはあなたがこれ迄御會ひしたこともない方だといふことは分りますが、どなたですか。おや、私はまあ何をいつてるのでせう！』
『いやもう何とも仰しやらないで下さい！』と若者は何事か考へて居るやうに遮つた。
『だが悉しい事を御話しませう。あなたは多分私が御話しないと思つてらつしやるでせう。私があなたを恨んで居るとね。飛んでもないことです！　さあ握手しませう。私は只元氣をなくして居る丈けの話

ですよ。だが後生ですからあなたがどうしてこゝへいらしたのかそれを最初に話して下さいませんか。どうしたはづみですか。私は悪意は抱いて居ませんよ。本當ですぜ。さあ握手しませう。隨分手をきたなくして了ひました。こゝはひどいほこりですからね。だが實があればそんなことは何でもありませんや。』

『眞平だ。向ふへやつて下さい！　ぐるりと向きを變へる場所もないのに、厭に手を押しつけてやがる！』

『だがもし、あなたは、かういつちやあ失禮ですが、私を古靴かなんかのやうにあしらつていらつしやる。』とイウアン・アンドレエイッチは至極溫和しい、然し絶望で躍起に成り、懇願的な聲でいつた。『もう少し丁寧にあしらつて下さい。ほんのもう少し丁寧にあしらつて下さい。さうすりや仔細を御話しますから！　私達は友達に成れますよ。私は全たくあなたを御飯に御招きしたく思つて居るのですから。露骨に申しますが、私達はかうして並んで寢て居ることは出來ませんや。君は誤解して居ますよ。君は御存知ないが……』

『大將があれに會つたてえのは何時のことだつたらう。』と若者はつぶやいたが、どうもひどく激して居る樣子だつた。『恐らく彼奴は今俺を待つて居るだらう……こゝを出なくちやあ！』

『彼奴ですつて。彼奴つて誰のことです。あゝ〳〵、君は誰のことをいつて居るのです。あなたはあれだね、上で……あゝ〳〵！　私は何の因果でこんな目に會ふだらう。』

イウアン・アンドレエイッチは絶望して向仰きに寢返りを打たうとした。

『あなたは何だつてその女が誰か知り度いのです。えつくそつ、彼奴であつたつて無くつたつてかまはない、俺は出やう。』

『もしあなた！　何を考へていらつしやるのです。私はどう成ることでせう。』とイウアン・アンドレエイッチは絶望して自分の隣人の燕尾服のたれをとらへ乍らさゝやいた。

『そんなことが私の知つたことですか。あなたは一人こゝに居たらいゝや。それが厭なら私は皆なにこの男は私の叔父で、財産を使ひ果した男だといひまさあ。さうすりやあ老紳士も私が自分の女房の色だとは思ひますまいて。』

『だが君そんなことは途徹も無いことだよ。私が君の叔父だなんて可笑しな話だ。誰だつてそんなことを信じはしますまいよ。赤ん坊だつて信じはしますまいて。』とイウアン・アンドレエイッチは絶望してさゝやいた。

『よろしい、それぢやあべちやくちや喋らないで煎餅のやうに平つたく寢轉つて居るがいゝや！　多分あなたは今夜はこゝで宿て、何とかして明日逃げ出すことに成るだらう。誰にも氣が付きやあしませんよ。若し一人抜け出れば、皆なは未だ一人殘つて居るとは思やあしますまいよ。十二人居ると思ふ人がないと同じやうに考へられないことだ。尤ともあなたは一人で十二人も居ると同樣だけれど。もう少し向ふへ行つて下さい。でないと私は出ますよ。』

『君は私を苦しめますね……若し私が嫉でも出たらどうしやう。萬事よく考へなくちゃあ成りませんからね。』

『叱つ！』

『何だらう。又上で何かごと〳〵やつて居るやうな氣がするが。』と一寸の間こつくり〳〵やつて居たらしい老紳士がいつた。

『上ですつて。』

『君、聞きましたか。私は出て行きますよ。』

『聞きましたよ。』

『あゝ！ 君、僕は行きますよ。』

『さうですか、それぢやあ私は出て行きませんや！ 構ひません。ごた〳〵が起きやうと僕よだ！ だが私が目星をつけて居ることが分りますか。私はあなたは傷つけられた夫だと思ひますが——どうです。』

『おや〳〵何といふ皮肉を仰しやるのでせう！……本當にさう思ひますか。夫ですつて。……私は結婚しちやあ居ませんよ。』

『結婚しちやあ居ないのですつて。馬鹿な！』

『私も色かも知れませんよ！』

『好い色男だ。』

『まあ聞いて下さい！ 宜しい、すつかり御話しませう。私の絶望的な話を聞いて下さい。私ぢやありませんよ——私は結婚して居ませんから。私はあなたのやうに獨身者でさあ。私の友達ですよ。私の若い時の仲間ですよ……私は色男でさあ……彼が私に俺は不仕合せな男だよと申しました。『俺は苦い盃を飲んで居るよ。』と彼が申しました。『俺は自分の女房を疑つて居るから』といつてね。『ね』 私は彼によく申しましたよ。『何だつて君はうたぐるのだい。』……だがあなたは私のいふ事を聞いていらしやいませんね、まあ聞いて下さい！『嫉妬つてえものは馬鹿々々しいものだよ』と私は彼に申しました。『嫉妬といふことはいけないことだよ！』とね。……『いや』と彼は申しました。『俺は不幸な男だよ！ 俺は苦い盃を……といふのは俺は自分の女房をうたぐつて居るのだからね。』といつてね。『君は私の友達だ。』と私は申しました。『君は私の優しい青年時代の仲間だ。『俺達は一緒に幸福の花をみ取り、快樂の羽根蒲團に轉つた。』といつてね。おや、私は何をいつて居るのでせう。厭に君は笑つてますね。僕は氣が違つて了ひますよ。』

『だつてあなたは既に氣が違つて居るぢやあありませんか……』

『いやよく分りましたよ……氣違ひの話をするのは既に氣が違つて居るからだといひ度いのでせう。まあ笑つて濟すがいゝや。私も若い時にはさうだつた。私も踏み迷つて了つたのですから！ あゝ、私は頭が變てこに成つて了ひさうです！』

『何だらうね。誰かくしやめをしたやうな氣がするが。』と老人がいつた。『御前がくしやみをしたのかい。』

『嘘ですよ！』と彼の細君がいつた。

『チツ！』といふ音が寢臺の下からした。

『上で騒いで居るのに違ひないわ。』と彼の細君はびつくりし乍らいつた。といふのは確かに寢臺の下で音がしたから。

『上だよ！』と亭主がいつた。『上だよ、今さつきわしは御前に話したらう。俺は……こほん〳〵……俺はひげを生したハイカラに出會したよ——脊骨の痛いには參つたよ！——ひげを生した若いハイカラにね。』

『ひげだつて！　そいつい君だつたに違ひない。』にイウアン・アンドレエイッチがさゝやいた。

『おや〳〵何といふ人だらう！　私はこゝにあなたと一緒に寢轉つて居るぢやありませんか！　彼に出會さう筈がなかつたぢやありませんか。だが私の顏を取つ摑ましちやあ困ります。』

『あゝ私は氣絶しさうです。』

この時確かに大きな物音が漏れ聞えた。

『何でせう。』と若者がさゝやいた。

『もし！　私は恐くつて成りません。助けて下さい。』

『叱つ！』

『どうも騒いで居るやうだね。本當にどるふらい騒ぎをして居るらしい。それに御前の寢室の上でもね。聞きにやつた方がよくはないかね。』

『聞きにやつてどうするの。』

『別にどうするといふ譯ぢやない。だが本當に御前は今日は何て機嫌が惡いのだらう！……』

『もうあなた御休みに成るといゝわ。』

『リーザや。御前はちつともわしを愛してゝ呉れないね。』

『そんな事はないわ！　後生ですから、私本當に疲れて了つて居るのですから。』

『よし〳〵、それぢやあ私は行きますよ！』

『いゝ〳〵、いらしつちやあ厭ですよ！』と彼の細君は叫んだ。『いゝえ、やつぱしいらしつて下さい！』

『御前どうしたの！　行けつていふかと思ふと、行つちやあいけないなどゞいつて！　こほん〳〵！

本當にもう寢る時間だよ。こほん〳〵！　パナフイデン家の小さい娘……こほん〳〵……あそこの家の小さい娘のニューレンブルヒの人形を見ましたよ……こほん〳〵……』

『今度は人形ですか！』

『こほん〳〵……可愛らしい人形だよ……こほん〳〵。』

『大將はさいならといつて居ますよ。』若者はいつた。『大將は行くのですから、すぐに私達は出られますよ。分りましたか。喜ぶといゝや！』

『どうかさう成りますやうに！』

『いゝ教訓ですよ……』

『君、何の教訓ですか！……私も……だが、君は若いから、私に教へることは出來ないよ。』

『そんなことはありません……御聞きなさい。』

『あゝくしやみが出さうだ！……』

『どうか靜かに。』

『だがどうする事が出來ませう。こゝにはこんなに鼠のにほひがするのですもの。辛抱出來ませんよ。私のポケットからハンケチを出して下さいな、身動きも出來ないのですから。……あゝ〳〵、何の因果で私はこんな目に會ふのだらう。』

『さあ、ハンカチを出しましたよ！　何故あなたがこんな目に會ふのか御話しませう。あなたは燒餅やきだ。何だつてあなたは氣違ひのやうに馳けづり廻り、人の家へ飛び込んで騷動を御起しに成るのか分りません。』

『君、私は騷動を起したことはありませんよ。』

『叱つ！』

『君、君が私に道德の御說法をすることは出來ませんよ。私の方が君よりは道德的だから。』

『あゝ〳〵！』

『あなたは騷動を引き越し、恐しくつてどうしていゝか分らず、恐らく後で病氣に成るやうな若い婦人、おど〳〵した女を脅かし、病氣で苦んで居る、何よりも安息を必要とする尊敬す可き老人を騷がせる——而かもそれが何の爲めですか。馬鹿々々しい事を想像していらつしやるからだ。その想像に鞭打たれてあなたは近所合壁を馳けづり廻つていらつしやるのだ！　あなたは今どんなに恐ろしい狀態に御出でか分りますか。』

『そりやあよつく分つて居ります！　分ります、だがあなたはそんなことを仰しやる權利はありませんよ。』

『御默りなさい！　權利がどうしたのです。これが或ひは悲しい結末を作るかも知れないといふことは分つて居ますか。女房が御氣に入つて居るあの老人はあなたが寢臺の下からはひ出すのを見たら氣が變に成つて了ふかも知れないといふことは分つて居ますか。いや、あなたは悲劇を引き起すことはないや…　あなたがはひ出したら、あなたを見る人は誰だつて笑ふことでせうよ。明るいところであなたを見度いものだ。可笑しな風をしていらつしやることだらう。』

『あなたもだ。そんならあなたも可笑しな風に違ひない。私もあなたの顏が見度いものだ。』

『そりやあさうでせう！』